III. Band 1934 Heft 1/2

東北帝大醫學部
精神病學敎室業報
(精神分析學論叢)

Arbeiten aus dem Psychiatrischen Institut der Tohoku Kaiserlichen Universität

(Beiträge zur Psychoanalyse)

第III卷 第1及2號 (昭和9年12月)

内容目次 (Inhaltsverzeichnis)

Arbeiten aus dem Psychiatrischen Institut der Tohoku Kaiserlichen Universität.

III. Band 1934 Heft 1/2

帝北帝大醫學部
精神病學教室業報

第 III 巻 第 1/2 號 (昭和9年11月)

原 著 (Originalen)

Über den Introjektionsvorgang bei Melancholie.

Von

Prof. Dr. **Kiyoyasu Marui**.

Ein Student der Medizin zeigte nach dem Tode seiner Großmutter das typische Symptombild von Melancholie; es bestand also scheinbar übertriebene „pathologische" Trauer; tatsächlich aber war es Melancholie, denn der Patient wußte gar nichts von dem Zusammenhang seiner Erkrankung mit dem Tode der Großmutter, sondern brachte mit unbedingter Sicherheit sein „Unglück" in Zusammenhang mit seinem früheren sittlichen Verschulden und seinem schlechten Charakter; außerdem wies der Fall Anzeichen außerordentlich verringerten Selbstgefühls und weitgehender Ich-Verarmung auf, die bei Traurigkeit nicht bestehen.

Die Analyse ergab, daß dieser Fall eine Eigentümlichkeit in der Erscheinung seiner Introjektion besaß; denn es war bemerkenswert, daß die Klagen des Patienten oder die Kritik, die von seinem Über-Ich ausging, mehr

gegen sein früheres Ich gerichtet und konzentriert waren und nicht gegen das verlorene und jetzt introjizierte Objekt (Großmutter), ein Punkt, in welchem unser Fall von gewöhnlicher Melancholie abweicht, da uns *Freud* gelehrt hat, daß bei dieser Krankheit das Objekt in das Ich aufgenommen und von dem Über-Ich des Kranken sadistisch behandelt wird. Ferner war auffallend, daß das Über-Ich des Patienten, das vorher so nachsichtig und weichlich gegen sein eigenes Ich gewesen, nun seit dem Eintritt der Introjektion äußerst streng und scharf wurde. Man kann es auch so ausdrücken, daß die Strenge des Über-Ichs des Patienten erst jetzt nach dem Tode der Großmutter erwacht war, und daß das Über-Ich das Ich des Kranken an Stelle der Großmutter tadelte. Daraus schloß Verfasser, dieser Fall erbringe den Beweis, daß bei der melancholischen Introjektion das Über-Ich des Objekts in das des Patienten übergehen kann. Durch Analyse der Umstände dieses Falls von Melancholie erkannte Verfasser, daß das Über-Ich und das Ich des Patienten jeweils vom Über-Ich und Ich des Objekts überdeckt wurden und daß dann zwischen dem Ich des Patienten und dem Über-Ich des Objekts ein Konflikt entstand.

Außerdem möchte Verfasser auf die Störung oder den Entwicklungsmangel des Über-Ichs des Patienten hinweisen, die darin zum Ausdruck kam, daß sich der Patient vor seiner Melancholieerkrankung wie ein zügelloser, unbeherrschter Mensch benahm und alle sinnlichen Triebe befriedigte, sobald er sein Vaterhaus verlassen hatte, und er möchte diese Entwicklungsstörung des Über-Ichs auf das Zusammenwirken einer übermäßigen Objektliebe der Großmutter und eines übermäßigen Zwangs seitens dieser zurückführen.

欝憂症に於ける攝取過程に就いて*

東北帝國大學醫學部精神病學教室

教授 醫學博士 丸 井 清 泰

Freud,[1] Abraham,[2) 3) 4)] Radó[5)] 其他諸氏の欝憂病に關する基礎的業績は本病の心的機構並びに心的機轉への深き洞察を許すものである。Fenichel[6] は其の著書に於てこれら業績の內容を歷史的の順序に於て叙述し尙ほ未だ充分に闡明されて居ない一二の重要なる點を論じて居る。

Freud[1] 及び Abraham[4] が「アンビヴァレンツ」、自我に向けられたる「サディスムス」及び口愛等が欝憂症に罹る人々に於ける顯著なる特徴である事を指摘したる後、Freud[1] は「悲哀と欝憂症」なる論說に於て本病の發生に關する一學說を立てたのであつた。この學說によれば欝憂症は所謂對象の喪失 (Freud) の後に愛の對象の攝取の過程が繼發する場合に起ると云ふのである。Freud は患者の自己非難は對象そのものに適用さるべきものであり、全然無意味である樣に見える患者の言は吾人が彼の訴へに於て「私」(„Ich“) の代りに喪はれたる對象の名を入れ替へる場合にその意味を得る樣になると云ふ事實を發見したのである。

此處に於て吾人は欝憂症の最も主なる症候なる自己非難は患者が彼の喪はれ而も今や攝取されたる對象に關して持つ假裝されたる非難に外ならないものであると云ふ認識に到達した譯である。

所謂自己愛的退行 (Narzißtische Regression) なる過程が此處に起り、患者の自我の一部は對象となり、患者の上位自我は自己の自我をば患者が喪はれたる對象を無意識的に取り扱はうと欲すると丁度同じ有樣に取扱ふ事になるのである。元來對象に向け

※この論文は1933年10月下旬維也納に開催された國際精神分析學會支部の例會の席上獨文を以て朗讀されたものである。

1) Freud: Trauer und Melancholie. (Ges. Schr. Bd. V.)
2) Abraham: Ansätze zur psychoanalytischen Erforschung und Behandlung des manisch-depressiven Irreseins und verwandter Zustände. (Zentralbl. f. Ps-A. II. 1911)
3) Abraham: Untersuchungen über die früheste prägenitale Entwicklungsstufe der Libido. (Int. Z. f. Ps-A. IV, 1916)
4) Abraham: Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido.
5) Radó: Das Problem der Melancholie. (Int. Z. f. Ps-A. XIII, 1927)
6) Fenichel: Perversionen, Psychosen, Charakterstörungen.

られて居た「サディスムス」は忽然として上位自我に歸屬する事になり、今や攝取過程によつて變化したる自我に對して激怒する事になるのである。この Freud の公式が鬱憂症の多數の症例に適合する事は疑ひの餘地なき處である。Helene Deutsch[1] はその著書 „Psychoanalyse der Neurosen" に於てこの種に屬する特に興味ある症例を叙述して居る。

Abraham[2] の見解に從へば患者の訴への或るものは正反對に攝取されたる對象より由來するやうに見え、例へば實際の對象が曾つて患者自身に對して發した非難を繰返すと云ふ事である。これによつて事が非常に不明瞭になつた譯である。何となれば吾人は今迄は對象が自我の中に移行して上位自我よりサディスチツシュに取扱はれるものと假定して居たからである。

Fenichel[3] は此處に於て二つの疑問を擧げたのである。對象が上位自我の中にも取り入れられるものであらうか。それとも吾人は「對象の二重攝取」(即ち對象が自我と上位自我の兩方に攝取される事)なるこの好ましからざる複雜化を承認すべきであらうか。Fenichel は——彼の云ふ處によれば躁鬱狀態の問題を完全に統一されたる有樣に於て包括したと云ふ——Radó[4] の論說に事よせてこの所謂二重攝取の問題を解決しようと試みた。Fenichel は次の如く主張した。「愛されたる對象はこれが最初の上位自我の形成の際に於けると同じ有樣に於て上位自我の中に攝取される。然しながら上位自我は當時と同樣に „意地惡る" であるべき權利を保有し、而も不幸にも退行機轉の結果この權利をば好ましからぬ有樣に於て、そして又非常にひどい程度に於て行使するのである。鬱憂症に向つて特異に „對象關係 (Objekt-Beziehung) よりして同一視への退行の現象" として起り來るものは Freud によつて叙述されたやうに „意地惡る" なる、換言すれば憎まれたる對象を自我へ引取る事に外ならないのである。これによつて鬱憂症の場合に於て攝取されたる對象が他の者に對して怒り得ると云ふ Abraham の發見は一般的意義を得る事になる」と。かくして Fenichel は彼の第一問を不問に附して居るのである。

余は最近對象の上位自我の患者の上位自我內への攝取の事實を非常に明らかに示した鬱憂症の一例を分析する機會を得た。よつてこれを此處に公表せんとするのである。

二十五歲になる醫科の學生(判事の獨り兒)は祖母の死後鬱憂症の定型的なる症候

1) **Deutsch, H.:** Psychoanalyse der Neurosen.

2) **Abraham:** Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido.

3) **Fenichel:** Perversionen, Psychosen, Charakterstörungen.

4) **Radó:** Das Problem der Melancholie. (Int. Z. f. Ps-A. XIII, 1927)

像を示した彼は晝夜靜かに病床に横たはり、彼の運動は非常に遲徐となり、明らかなる考慮制止が彼に起つた。食慾は著しく減退し睡眠又甚だしく不良となつた。彼は繰返して最早や何人をも愛する事が出來ず、又自らは他人から愛されるだけの價値がないと訴へた。彼は自分が無價値な、何の役にも立たない、道德的に劣等な人物であると考へ、自分が世界中での最も平凡にして卑しい人物であると考へた。彼は繰返し死にたいと云ひ、彼の將來の生活から凡ての喜び、凡ての幸福が根こそぎに奪はれたから最早や生きて居る甲斐がないと云ひ、實際に又自殺企圖をもあらはし、これによつて彼の家庭殊に兩親を非常に心配させたのであつた。

患者が二十一歳で某高等學校在學中所謂神經衰弱症に罹つた事があつた。その際の主なる症候は頭痛、不眠、勉學の際に於ける集中力の欠乏等であつた。當時患者は父の樣に法律家となるべきか、それとも醫師になるかと云ふ事を決しかねて居た。そして彼の將來の生活に對するこの煩悶が彼の病氣の主なる原因の一つであつた事は疑ひの餘地なき處であつた。終に彼は醫學を研究しようと決心した。然しながら彼は實地醫家とならうとは思はず將來生物學者として進まうと望んで居た。

彼の祖母は非常に眞面目な嚴格な人であつて非常に活潑、活動的であり又口やかましい人であつた。この祖母の一人兒であつた患者の母は祖母と同じタイプの人物であつたと患者は云つて居る。分析者は患者の母に數回逢ふ機會を得たが、むしろ男性的な婦人であつて、非常に活動的な精力的な婦人であると云ふ印象を得て居る。この祖母と母は患者の發育には非常に嚴格であり又極端に注意深かつたのであつた。彼等は絕えず患者の生活に干渉し特に彼の交友關係について干渉した。特別の注意は患者の食物に對して拂はれた。患者は一日一回いくらかのお菓子或ひは甘いものを貰ふだけであつた。患者は彼等から全然お金を貰ふ事が出來なかつたので家の外で食べ物を買ふ事が出來なかつた。彼は子供の時に兩親からお金を貰つて居た近所の子供にいつも羨望の感を持つて居たと語つた。この事情の下に吾人は本患者に於て「リビドー」のロ・サディスムス統裁期に於ける固定が過度に强められた事を充分なる根據を以て假定してよからうと思ふのである。これに就いては後に尙ほ詳細に敍述しようと思ふ。斯く祖母は患者の行狀態度等に關しては非常に嚴格であり、非難好きではあつたが一面に於ては祖母は患者に非常に親切であり、彼を愛し、彼を甘やかしたのであつた。この事情のもとに於て患者の祖母に對する感情的態度が著しく兩極性（ambivalent）になつた事は疑ひの餘地なき處である。

患者は彼の母に對しても同じ樣な兩極性態度を示したのであつた。この態度は患者の母が祖母と同じタイプの人物に屬し、彼を祖母と同じ有樣に養育し、取扱つたと云

ふ事實に歸すべきのみではないのである。彼の兩親の間の獨り兒として彼は五歳の子供で居て尙ほ母の乳房を吸ふて居たのであつた。そして患者が五歳の時母が肺炎に罹つて病院に入院するに至つて、彼は終にこの習慣を止めねばならなくなつたのであつた。彼はこの母乳を吸つて居た時期に於て屢々母の乳房を嚙みそのために母は屢々彼を罵り叱つたと云ふ事である。この事實は患者の「リビドー」發達のロ・サディスムス統裁期に於ける固定を指示するものである。患者は非常に彼の母に愛着を持ち執着を持つて居た。然しながら他面に於て患者は彼の生活に對する彼女の餘りにも熱心なる而も非難好きなる干渉に對して憤りを感じて居たのである。

患者の父は養子であり、定型的な養子タイプの人であつた。彼は非難の打ち處なき紳士であつたが一面に非常に柔和などちらかと云へば活氣の少い人に屬して居た。彼の權威は家庭に於ては餘り認められず、從つて彼は自分の職務に忠實であつたが彼の家庭及び子供（患者）の事はあまり構はなかつた。この父はいつも患者の祖母や母に遠慮をして居た。分析者が會見の際にこの父から得た印象は女性的「マゾヒスムス」的なるタイプの人より得るそれであつたのである。

患者は一面に於てこの元氣のない柔和な父を憎み蔑み、他面に於て母や祖母からあまり重く見られて居ないこの父に同情して居た。ここに吾人は患者に明らかなる二重の「エディプス」複合體を認めたのである。これは又患者の兩極性態度に對する非常に重要なる原因をなしたものであつた。そして吾人が患者に於て彼の父との同一視の兆を屢々認めた事は怪しむに足らない處であつた。

患者は內向的の人であり、活氣のある人物ではなかつた。已に子供の時から彼は戶外に出て遊ぶ事をしなかつた。又友人を作る傾向が少かつた（彼の交友關係は祖母や母の干渉を受 た事は前に述べた）。學校に於ても彼はスポーツには餘り興味を持たなかつた。反對に彼は幼い時から好んで家の中で遊び又讀書して居た。長じては彼は音樂、寫眞術及び文學に興味を持つた。彼の祖母及び母は患者を非常に素直な從順な青年と考へて居た。それは患者が兩親殊にも祖母の云ふ事や指圖に外觀上全然自働的に從つて居たからであつた。疑ひもなくこの患者の從順なる事は壓迫されたる憎惡心（「サディスムス」）並びに美化されたる「マゾヒスムス」の現れと見るべきものであつた。分析中患者は自發的に彼の性質には男性的の處よりもむしろ女性的の處が多分にある事を述べた事があつた。實際吾人は患者にも女性的「マゾヒスムス」的なる特徵を見出したのであつて、これは勿論一面患者の父との同一視他面彼の母及び祖母との同一視に歸すべきものである。

思春期に至つて患者は自發的に手淫をなす事をおぼえたが健康に害があると云ふ理

由からこの習慣を一二年の後にやめてしまつたと云ふ。彼は子供の時から女の友達を持つた事がなく、又青年期に入る迄戀愛關係を經驗した事がないと云つて居る。思春期頃以來（患者は確かな時間的關係の記憶がないと云つて居る）彼の家庭に一少女（彼の父の姪）が住んで居た。彼女は患者よりも二つ年下であつた。この不幸な少女は彼女の兩親の死後患者の家に引取られ養育されて居たのであつた。父を除く家族達卽ち祖母、母、女中等はこの少女を厄介な居候と見なし、これに好意を持たなかつた事は容易に理解する事が出來る。これに反して患者は常にこの少女に對し親みを持ちこの少女が冷遇されたり輕蔑されたりして居るのを見て心痛した。彼は此の理由からして上記の家族に對して反感さへ感じたと云つて居る。然しながら彼はあからさまに少女の味方をし、その肩を持つ事を敢てしなかつた。それは彼が少女を愛して居るものと疑はれる事を恐れたからであつた。彼は彼女に對する愛を否定した。そして彼女が左程美しくも又愛嬌ある女でもなく、從つて彼から愛されるだけの資格を持つ程の女ではなかつたと云つて居る。此處に於て吾人は彼の彼女に對する態度が兩極性のものであり、彼が青年として尙ほ自己愛の時期に强い固定を示した事を假定すべき理由があると考へるのである。實際彼は美青年であり且つ「モダーンボーイ」の樣な特徵を多分に持つて居たのであつた。吾人は後にこの患者に於ては對象撰擇がむしろ自己愛型に於てあらはれる事を見るであらう。

二十二歲の時患者が高校の學生として家庭から遠く離れ甲市に滯在して居た時に彼は「ヴァイオリン」を買ふために祖母から若干の金を貰つた。然しながら彼はこの金をこの目的に用ゐずして某地の遊廓に行き、全部を費消しこの機會に於て初めて彼は童貞を失つたのであつた。但しその際には患者は彼の態度行動に就いて罪惡感も後悔の感も持たなかつたといふ事である。高校卒業後患者は乙市にある醫科大學に入學した。そして同じく家庭から遠く離れて學生生活を送つて居たのであつた。此處で彼は自分よりも遙かに年上の一上級生と友達になつた。彼は間もなく非常に放縱な生活をして居たこの友人と親しくなり、彼と一緒に料理屋、「ビヤホール」、「カフェー」、撞球場、映畫館と云ふ樣な場所に處きらはず遊びに出かける樣になつた。吾人は此處にこの患者が他人に非常に雷同しやすく、他人から動かされ易い性格を持つて居る事を認めるのである。吾人は又患者が家庭の保護の下にありし間は素直な青年であつたが一旦家庭を離れて暮す樣になつてからは恰かも良心のない人物でゝもあるかの樣に柔弱に且つ又不安定なる行動を示した事實を看過する事が出來ないのである。

二十四歲の時に患者は乙市の某料理店に於て若い女給に出逢つた。そして二人は相思の仲となつたのであつた。女は度々患者の宿を訪問した。そして終に彼等の間には

性的關係さへ起る樣になつたが間もなくこの二人の關係は解消さるるに至つた。この絕緣の理由として患者は彼の兩親特に祖母が兩者の結婚に贊成しないであらう事を確信して居た事を述べた。然しながら吾人はこの絕緣の實際の原因が患者自身にあつた事を假定するのである。女は實際にこの美しい青年を愛して居たらしい。彼女は金錢や贈物を受けた譯ではなかつた。又彼女はむしろこの戀愛關係に於ては患者よりもませて居た方であつたのであつて謂はば彼女が患者を誘惑した形になつて居たと信ずべき理由があるのであつた。患者にとつてはこの戀愛關係は充分眞面目なものではなかつたのであつて、彼はこの女及び彼女の運命を弄んで居たのであつた。彼は美しい愛人を持つ事に喜びを感じ誇りを感じて居たのであつた。彼は其頃この女の外に數名の女に於て同時に美しい然しながら空虛なる Don Juan（精神的）の役を勤めて居たのであつた。數ケ月の後にだから患者はかの女に對して不信となつたのであつて、而も彼は何等の罪惡感を感ぜず又彼女に對する同情を持たなかつたのであつた。この自己愛的にして自我中心的なる青年に向つては各々の婦人が惚れ込み、彼に屬し、而も彼のために惱まねばならなかつたのは勿論であつたのである。

その後間もなく患者は乙市の某撞球場に於て若い一少女を知るに至つた。この少女は彼の氣に入り、彼は大いに彼女を愛した。そして彼女が誰か他の男の犧牲になりはしないかと氣遣つたのであつた。それと同時に彼は彼女が處女であるか否かと云ふ事に疑念を持つたのである。それはかゝる場所に雇はれて居る少女には男子から誘惑される危險が多いからであつた。患者は折があつたらばこの少女に處女であるか何うかを聞き質して見たいものである、そして若しさうであつた場合には彼の家庭殊に祖母が彼女との結婚を承諾する時が來る迄彼女の處女性を保つやう彼女に乞はうと考へた。彼は彼の祖母が自分の孫が下層階級の少女と結婚する事に決して贊成をしない樣な人である事をよく知つて居たのであつた。

處で 1930 年の秋以來祖母が胃病に罹り、患者とこの少女との間の戀愛關係が始まつた丁度前頃に患者は醫師連が祖母の病氣が最早や手術療法の出來ない胃癌であると診定し、祖母の命は最早や短時日の問題であると云つたと云ふ事を聞いた。最初の間は患者は祖母の病氣を余り氣にしなかつた。然しながら彼が 1931 年の夏季休暇に歸鄉し祖母の健康狀態が最惡の態にある事を眼のあたり目擊した時に彼は非常に驚き且つ彼女が病氣に罹つて以來今日迄あまり頓着しなかつた事を悔いたのであつた。彼は祖母の死後强い自責感と後悔を感じないやうに彼女の生前に一生懸命孝養を盡さうと考へた。そこで彼は彼女を看護し、この氣の毒な祖母を喜ばせる爲めに最善の努力を拂はうと決心した。そして實際彼はさうしたのであつた。彼はこの時期に於て祖母が

死ねばいいと云ふ願望を心ひそかに抱いた事を斷然否認して居る。そして終に哀しみの日は來た。醫師連及び家族殊に患者の祖母の生命を一日でも延ばさうとの最善の努力にも不拘彼女は1931年8月に死の旅立をしたのである。

葬式が濟んで後患者は勿論悲しかつたが、彼の悲哀は左迄大なるものではなかつた彼は勿論祖母の死に對して責任があるとは感じなかつた。それは彼が胃癌の如き病症を治する事は人力の到底及ばぬ事である事を確信して居たからであつた。然しながら彼は漸次益々意氣消沈して來た。彼の顏面は益々蒼白となり苦痛と苦惱に滿ちみちて來た。彼は胃內膨滿の感を經驗し彼の食慾は次第に減退して來た。彼は自分もいつかは胃癌に罹り非常に早く死なねばならないであらうと云ふ觀念に惱んだ。又彼は急に非常に年老いたる樣に感じ、青年の凡ての幸福と愉快は彼の生活から消失したものと信じた。さてこれらの觀念及び現象は患者の喪はれたる祖母との無意識的なる同一視の結果起つて來たものであり、Abraham[1] の云つた樣に一面に於て憎まれ他面に於て愛されたる對象の所謂攝取の過程の起つた徵候と見るべき事は明らかなる事である。患者はこの事には絕對に意識がなかつたのであつた。さて患者は今や乙市に於て性的關係を持つたかの女が處女であつたに違ひないと云ふ事を考へ始め、從つて彼は彼女の處女性を侵した事に就て强い自責の念を持つに至つた。此處で强調して述べておかねばならぬ事は患者が以前には彼女が處女であると云ふ事は全然考へず從つて罪惡感は全く持たなかつた事である。そして又吾人は彼女が決して純潔なる處女ではなかつたと推定すべき根據を持つて居るのである。それは彼女がこの戀愛關係に於て寧ろ積極的能動的役割を演じた樣に思はれたからである。彼は又以前祖母から貰つた金を持つて甲市の青樓を訪れ以て童貞の誇りを失つた事を非常にくやんだのであつた。この自責の感も又彼は祖母の生前には決して持たなかつたものであつた。今や彼は自分が童貞を失はしめられた甲市の娼婦が彼の尊き童貞を捧ぐるに足る程充分に美しく且つ氣高い女であつたか何うかを知りたいとの熱望を持つた。彼は又乙市に居た頃の彼の放縱なる生活振りに關して深刻なる自己非難を持つたのであつた。彼は自分が撞球場に於て知合ひになつた少女と最早や結婚し得る資格がないと考へて非常に不幸に感じ又最早純なる處女より愛される事の幸福と喜びを享受し得ないと云ふ事に對して强い恐怖を持つたのであつた。患者の愁訴は決してこれだけでは盡されて居ないのである。

已に前に述べた樣に患者は自分が何人をも愛し得ず又何人からも愛される價値がないと云ふ事、それから彼が碌でなしであり、不完全不健全な人間であり、世界中で最も劣等なる人物であると云ふ事を繰返して嘆いたのであつた。これらは凡て自己感情

1) **Abraham:** Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido.

の異常なる減退と高度の自我貧窮 (Ich-Verarmung) の徵候である。この場合に於て患者が自分の病症と祖母の死との間の關聯を全然知らなかつた事及び精神分析によつて初めて患者が實際の事情及び事の關係を理解し得るに至つた事は非常に重要なる事と云はねばならないのである。

而してこの事實及び前記の自我貧窮並びに自己感情の減退の兆がこの症例が欝憂症に屬するものであつて決して悲哀の過度に强い場合に屬するものでないと云ふ事の確實なる證據となるものである。病的悲哀 (Pathologische Trauer) と欝憂症との間の區別は前者に於ては悲哀或ひは意氣消沈と人の死亡との關係が完全に意識されて居るに不拘欝憂症者に於ては彼の悲しみと喪はれたる對象との關係を壓迫して居ると云ふ事にあるのである。余の症例に於ては外見上過度なる病的悲哀が存するが如き觀を呈して居る。それは意氣消沈の現象が祖母の死後三週間以內に起り來つたからである。然しながら實際これは欝憂症であつたのである。それは患者が彼の罹病と祖母の死との關係に就いては夢にも知らず、非常なる確實さを以て彼の病症と彼の以前の道德的の罪過並びに彼の惡い人格との間の關係を作つたからである。Freud[1] は又欝憂症者は自己感情の異常なる減退と著しく高度なる自己貧窮を示すがこれらのものは單なる悲哀には存在しないと說いて居る。

余は何人もこの欝憂症例が攝取の過程に關係して持つて居る特徵を看過しないであらうと思ふのである。患者の訴へ或は彼の上位自我より出でたる批判非難がむしろ患者の以前の自我に向けられ、集中せられて居り、喪はれ今や攝取されたる對象に向けられて居ない事は注意に値する事と云ふべきである。換言すれば吾人は患者の凡ての自己求刑、自己非難が祖母の生前に於ける彼の行動及び彼の放縱なる經歷 (品行) に關係して居るものと云ひ得るのである。唯だ彼の年齡に關する唯一の訴へのみは對象の攝取過程によつて變化した自我に向けられて居る樣に見えたのであつた。

これは余の症例が通常の欝憂症のそれと異なる唯一の點である。何となれば Freud[1] は欝憂症に於ては對象が自我の中に取り入れられ、患者の上位よりして慘虐なる取扱ひを受ける事を敎へたからである。尙ほ以前には非常に寬大に且つ柔弱軟弱に自分の自我に對して居た患者の上位自我が攝取過程が起つた後には非常に嚴格に且つ苛酷になつた事も注意に値する事である。吾人は患者の上位自我の苛烈性、嚴格性が今やはじめて祖母の死後に於て眼覺め, 上位自我が祖母に代つて患者の自我を責める樣になつたとも云ひ得るのである。そこで余は欝憂症性の攝取過程が起る場合に對象の上位自我が患者の上位自我に攝取され此處に入口を見出し得るものと假定し得るものと考

1) Freud: l. c.

へる。從つて余は Fenichel のあげた第一問が肯定し得る事——少くとも本例に於ては斷然積極的の意味に於て答へ得る事を信ずるものである。

こゝに於て Fenichel によつて引用された Abraham の症例——患者の愁訴が曾つて彼の對象そのものが彼に對して呈示した告訴或は非難から來て居るやうに見えた——はこの觀點から見るならば一層容易に且つ無理がなく理解し得るやうに思はれるのである。然しながら余はこれを主張しようとするものではない、それは余が彼の症例の完全なる分析をした譯でないからである。余は鬱憂症のこの症例に於ける事情を分析し叙述して居る内に次の如き認識に到達した、即ち「患者の上位自我及び自我がそれぞれ對象の上位自我及び自我によつて覆はれ、兩者が互に重なり合ひ、そして上述の如く精神軋轢が患者の自我と對象の上位自我との間に起つたものである」と。余は同じ事が鬱憂症或は神經症性鬱憂症 (neurotische Depression) の他の症例に於ても起り得るものであり、この症例の症候像が兩方の上位自我並びに自我の態度の差異及び彼等の間の相互關係の差異によつて種々にあらはれて來るものであると假定し得べき根據がある樣に考へるものである。然しながら余は此の點に關する余の論述をこれ以上進めようとは考へない。それは余がこの主張を何處迄も支持するだけの材料を持合はせないからである。

余は唯だ鬱憂症のこの例に於て分析が對象の上位自我の患者のそれへの攝取の事實を非常に明らかに示した事を決定しようと欲するのみである。患者が自分の童貞を失つた當の相手の娼婦が美しく氣高い女であつてほしいと云ふ希望、及び患者が乙市に於て性的關係を持つた女給が處女であつたと云ふ假定は自我の非常に强い自己愛的過重評價の證であり、又自我が嚴格なる上位自我に對し寛恕を乞ふ事のあらはれと解し得るのである。

さて余はこの論説を結ぶ前にこの症例が上位自我の發達に關して呈供した非常に興味ある重要なる點を述べようと思ふのである。已に述べたる如くこの青年は彼の家庭を離れるや自らを制御する事の出來ない人物の樣に振舞ひ凡ての衝動的肉慾的の滿足に耽つたのであつた。

患者の行動は外見上悖德性人格を思ひ起させるのである。然しながら彼は決して通常の言葉の意味に於てかく名づけらるべき人物ではなかつたのであつた。彼は唯だ彼の家庭を去るや彼の氣に入つた通りに自由にしてもいいと感じたのであつた。彼の不行跡は單に彼の上位自我がまだ生存して居る人々に存在して居り未だ充分に完成されて居なかつたと云ふ事情から出發して居たのである。一言にして云へば彼は彼の生活を道德的に支配した人々を未だ自分自身の中に攝取して居なかつたのであつた。この

障礙或は上位自我の發育欠陥の一つの原因は多分患者が祖母にあまりにも頼つて居り祖母から非常に注意深く保護されて居たために、上位自我を完成する必要を少しも持たなかつた事情にあつたものと考られる。上位自我の發達のこの障礙の今一つの原因はこの保護が彼を全く不自由にしたために彼に向つては上位自我を生ぜしめる機會が與へられなかつたと云ふ事にもあつたのである。而して彼の「マゾヒスムス」的なる傾向がこの事情と關係があつた事には疑ひの餘地なき處である。

斯くして吾人は過度の對象愛と過大なる束縛とがこの症例に於て上位自我の發達を妨ぐる事に共働したものであるとの結論に達したのである。それにしても如何にして一體祖母の上位自我の患者のそれへの攝取が起つたのであらうか。既述の如く愛の對象（祖母）に對する兩極性（Ambivalenz）はこの症例に於ては非常に顯著であつた。患者は祖母を愛して居ると同時に憎んで居たのであつた。然しながら彼の憎惡心は祖母が病氣に罹り、特に彼女が死亡した後には最早や存續し得なくなつた譯である。換言すれば祖母の罹病と死亡は彼の憎惡觀念に大なる滿足を與ふる二つの要素であつたのである。死後には憎惡の對象は最早や存在しないものである。だからして今や憎惡は自己そのものに向ひ、斯くして患者が自責と道德的責苦に苦しめられるやうにした譯である。卽ち患者の自我が攝取されたる上位自我に對して、丁度患者が小兒期に於て彼の祖母に對すると同じ態度を取るに至つた事は興味深い事と云ふべきである。

Psychoanalytische Studien über Erythrophobie. II. Mitteilung.

Von

Dr. M. Yamamura.

(Aus dem Psychiatrischen Institut der
Tohoku Kaiserlichen Universität,
Vorstand: Prof. Dr. K. Marui.)

Die analytische Untersuchung eines zweiten Falls von Erythrophobie ergab zwei Fixierungspunkte während der Entwicklung der Libido, und zwar in der Ödipal- als auch in der anal-sadistischen (bezw. analen) Phase. Das Erröten, an dem dieser 22jährige Erythrophobiker litt, war als Ausdruck der Anpassung des Kranken an den psychischen Konflikt in der phallischen Phase oder, mit anderen Worten, als Kompromißbildung zwischen phallischer Libido und ihrer Verdrängung zu deuten; die „Verschiebung der Libido von unten nach oben" und die sog. Genitalisierung der Gesichtspartie war auch hier die letzte Analyse des Leidens. Außerdem bekam Patient jedesmal, wenn Widerstände gegen die Analyse auftraten, Stuhlverstopfung bezw. Diarrhöe als Zeichen der Regression von der Libido zur anal-sadistischen bezw. analen Phase und als Zeichen der von mir so genannten „Verschiebung der Libido von vorn nach hinten". Insofern stimmte dieser Fall von Erythrophobie sowohl im Mechanismus als auch in der psychischen Struktur mit dem ersten Fall überein.

Patient war deutlich ein Mann des (psychischen) Don-Juan-Typus; dies fand seine Erklärung darin, daß er ausgeprägt doppelsinnigen Ödipuskomplex hatte und sein Libidoleben einerseits von phallischer und Inzestfixation, anderseits von der Hemmung durch Kastrationskomplex und Inzestscheu beherrscht war. Der Kranke war eigentlich sehr narzißtisch, und obwohl wir natürlich

an ihm deutlich Neigung zur Objektwahl nach dem Anlehnungstypus bemerkten, ging seine Objektwahl vorwiegend nach dem narzißtischen Typus.

Verfasser fand weiter an ihm deutliches Minderwertigkeitsgefühl mit dahinter verborgenem (latentem) Narzißmus, Überschätzung der Frau, Schamhaftigkeit infolge Verdrängung des starken Exhibitionismus, deutlich ausgeprägte masochistische Neigung, die durch „Verkehrung ins Gegenteil" aus latentem Sadismus entsprungen war, u. s. w. und kam zu der Ansicht, daß sich der Narzißmus des Patienten zum sogenannten ersten Typus (*Reich*) zählen läßt. Während der Analyse machte der Narzißmus sich häufig als Widerstand geltend; der Kranke verband in der Sprechstunde bald Nebensächliches bald Gleichgültiges (narzißtisch gegen die Methodik der Analyse); außerhalb der Analysestunde benahm sich Patient zuweilen wie der Analytiker (narzißtisch gegen die Person des Analytikers). Verfasser fand hinter dieser Identifizierung mit dem Analytiker die sogenannte latente negative Übertragung und kam zu der Ansicht, daß der Narzißmus des Analysanden ein Entstehungsmotiv der latenten negativen Übertragung werden kann.

赤面恐怖症に就いて

（第二報）

醫學士　山村道雄

I. 緒　　論

第一報に於いて余は一赤面恐怖症患者に於ける精神分析學的研究の結果を報告し、先づ患者に於ける「リビドー」發達の經過並びにその固定に就いて述べ、次いで赤面現象の發生機制に論及した。患者には「リビドー」の「エヂパールファーゼ」に於ける固定が明らかに認められ、患者が二重の意味の「エヂプス」複合體を示した外、患者には肛門「サヂスムス」統裁期にも強い「リビドー」の固定を示した爲、患者の「リビドー」生活は強い兩極性傾向に透徹されて居る事が認められた。一面に於いて患者には骨肉愛の恐怖及び去勢不安があり、之は男根統裁期及び更に性器統裁期迄の發達を遂げて居たこの患者に異性愛の制止の原因を作り、凡ての對異性々慾は禁ぜられたる骨肉愛の代表者の意義を持つに至り、爲に壓迫を受くる結果となり、赤面はこゝに起つた病因性精神葛藤に對する適應機制のあらはれ――或ひは互に軋轢する二つの傾向の妥協形成として解釋されたのである。而してこの際、フロイドの所謂『「リビドー」の下方より上方への移動』が見られたのであつて、赤面はこの機制によつて、元來性器に起る可き亢奮が頭部及び顏面に現れたものと解す可く、ここに顏面の所謂性器化の現象が起つたものと解されたのである。この患者に於いては尙、暴露慾の傾向に強い「リビドー」の備給があつたのであつて、暴露慾の發現の許されてゐる顏面に赤面現象として壓迫されたる性器「リビドー」の吐け口が見出された事は、赤面現象に暴露慾の大關係ある事を示すものであると考へられたのであつた。尙この患者には赤面現象、卽ち「リビドー」の下方より上方への移動の現象の外に、余の所謂『「リビドー」の前方より後方への移動』の現象が認められたのであつて、この現象は患者の「リビドー」が肛門「サヂスムス」統裁期への退行を示した際に現れたのであつた。而して赤面の現象が一面「ヒステリー」性轉換の機制に近い機制によつて生ずる一方、他面一定度迄强迫性を帶び、强迫現象への類似點を示す事は、この肛門「サヂスムス」統裁

期に於ける「リビドー」の固定に關係するのではないかと考へられたのであつた。余は最近に於いて赤面恐怖症の第二例に就いて詳細なる精神分析的研究をなす機會を得た。因つてその結果を第二報として報告しようとするのである。

II. 病　　歷

患者は廿二歲の未婚の男子である。農學校二年生（十六歲）の冬百日咳樣の疾患に罹り、三四日欠席した。登校するに至つてからも咳は依然として殘つて居り、呼吸苦しく、鼻がつまり、鼻先きが熱を持つてゐる樣な感じがし、その結果自然と顏がほてり、赤くなつて來るのであつた。殊に登校するのに寒氣甚だしき場所を自轉車で通らねばならなかつた關係上マスクを用ひたが、このマスクの使用は又一層呼吸を苦しくさせ、鼻に關する上記の現象を引起し、患者はこの顏が赤くなるのが恥しくなつて來たのである。專門醫の治療により鼻腔閉塞は一時的に治り、鼻先きが熱を持つたり、赤くなつたりする事はなくなつたが、赤面不安は去らず、風邪をひき又マスクを用ひたりすると忽ち舊の如き苦痛を增して來るのであつた。三年生の冬、學校に於ける繩なひ實習を一同が圓陣を作つて行つてゐた時、ふと一友の母の事を考へた時急に顏面潮紅し、以後赤面に對する不安が募つたと云ふ。從來患者は人の面前に出たり、又は他人と視線を合はせても平氣で居れたのが赤面が起つて來てからは頭痛が起り、鼻がつまり、動悸を感じて人の前に居る事が非常に苦しくなり、その爲に患者は他人と視線を合はせる事を極力避けようと努めたと云ふ。農學校卒業後患者は暢氣に農業に從事してゐたら良いだらうと考へ、家でブラブラしてゐたが少しも良くなる樣には思はれず、然も周圍の事情が患者には「人が自分の事を話してゐるのではあるまいか」「笑つてゐるのではあるまいか」「自分の行動は如何樣に考へられてゐるか」等と思惟される樣になつて來たと云ふのである。患者は不安を感じてゐない瞬間に於いても頭、眼及び顏面に充血がある樣で、頭を振ると「少量の水が入つてゐる樽を振る」樣な感じがすると訴へてゐる。

患者は祖父の代に伊達藩士から農に從事するに至つた家柄に屬し、現在も引續き農を生業とする家の第一子として生れたのである。患者が出生した當時の家族は祖父母、父母、父の弟夫婦と父の妹及び多數の傭人が居たのであるが、後には祖母、叔母は死亡し、叔父夫婦は別家し、妹一人弟三人の出生を見、傭人は次第に減少して現在はほんの少數しか居ないと云ふ。患者は小兒期から身體强健で、滿七歲の時に中耳炎を患ひし外特記すべき疾患に罹りし事なく、小學校入學後身體の發育は組中一番であつた程である。成績も良好にして常に首席を通して來たと云ふ。父の考へによつて患者は高等小學校一年終了後農學校に進んだ。農學校入學後、赤面不安に惱み出してからは成績が低下して來た。患者の云ふ所によると、彼は級長に選ばれるのが厭だつたので故意に成績を惡くしようとした事もあつたと云ふ。患者は「譯が判らぬ乍ら」哲學書に興味を持ち、それを讀みふけつてゐたと云ふ。

III. 分析經過

患者は前後二回入院した者である。患者は分析の終了を待たずに、父からの退院要求により一時退院したが、完全に消失してゐなかつた赤面不安の爲に父の許可を得て再び入院して來るやうになつたのである。その前後二回の入院中の分析經過を一纏めにしたのが次の報告である。

分析方法としては自由聯想法及び夢の解釋を用ひたのであり、夢は患者に手記せしめた。自由聯想は每日一時間宛行ひ、その回數は第一回入院の際は八十七回、第二回目には八十四回、合計百七十一回に及んだ。

IV. 「リビドー」生活

患者は女手の多い家庭で鷹揚に育ち、何不自由なく、患者は意の儘に振舞ひ、又周圍から十分に世話されて來て、六歲迄母乳を吸つて居た。六歲の時迄母と一緒に寢てゐたが、ある朝突然母の床から祖父母の寢室に移された。その時家の中ががやがやしてゐるなと思つたが、之は妹が生れた爲であつた事を後に知つたと云つてゐる。かくの如く長期間に涉つて母乳を吸つてゐた事は患者に口愛の傾向を强くし、而も六歲の時受けた離乳の經驗は患者に痛々しき愛の失望（Versagung）として作用し、口愛に於ける固定を來たさせた事が判る。かくの如き性器統裁前期（prägenital）の固定が後年の「リビドー」生活に惡影響を齎らしたであらう事は容易に思考される事であり、分析の結果も、この離乳が母から愛されてゐたと云ふ考へを持つてゐた患者に幻滅の悲哀として大なる影響を與へた事が判るのである。患者は分析經過中、分析が中斷せらるるに非ずやと考へる時に不安が一層增强されたりしてゐるのはこの離乳の經驗の反復を象徵するものと考へられる。妹が生れてから患者は母の乳房が汚いものであるとし、又コンデンスミルクが汚くて飲む事が出來なくなつたと云ふが、之は口愛が抑壓された結果であると云へる。[1] 患者は仲々に多辯である。然し乍ら現在は衆人の前では多くを語れないと云つてゐるが、分析時間中自由聯想に際しては隨分多辯である。小兒期家にあつても、又屋外で遊んでゐた時にも決して無口の方ではなかつたし、入院後患者は「叔母からお前は決して默り虫ではないと云はれた」夢を見た事がある。尙患者は分析經過中顯著な症狀として時々食事をしてゐるのを他人に見られるのを苦痛に感じたり、食慾不振、嘔吐感を持つたりしたのである。Freud は「口愛が保存されてゐ

1) Spielrein, S.: Verdrängte Munderotik, (Internat. Z. Psychoanal., 1920.)

る小兒は成人後接吻道樂の人(Kußfeinschmecker)となつたり、變態的接吻を行つたり、酒客とか喫烟者となる力强い動機が與へられる。口愛に抑壓が加はると食事に對し嘔吐感とか、「ヒステリー」性嘔吐を起すことがあり、時には榮養本能迄が侵される」[1]と說いてゐるが、之の事を以て患者の上記の諸種の傾向を十分に說明し得るであらう。

患者は排尿に關して快感を持ち、排尿を終るに長時間を要すると云ふ。然し乍ら、この傾向は患者の自供する所によると次の如き變化を來す事があつたのである。即ち分析經過中に患者に性慾の亢進が起つてゐると分析者に認められた時に、患者は一回の排尿量の減少を覺えたと云ふ事である。次に述べる如く患者に尿道愛的傾向が認められるが、この尿道愛的傾向と性慾との間に關聯があり、性慾の亢進に對する抑壓が尿道愛に迄及んでゐるのではあるまいかと考へられる。患者に尿道愛的傾向が存在せる事實として、患者は小兒期に友人と尿を遠距離に屆かせる競爭をした事が屢々あつたと云ひ、十歲頃迄夜尿症が續いたと云ふが如きがそれである。尤も夜尿症は後述する所の早漏とは密接な關係がある事は既に Abraham[2] によつて精神分析學的に解明せられてゐる。患者の尿道愛的傾向は患者の自己愛や名譽心に大關係がある事は否定出來ないであらうし、後述する患者の見榮坊である事にはこの事が大いに關係を持つであらう。

患者は肛門愛的性格の保持者であり、同時に「サヂスムス」の傾向を壓迫されたる形に於いて示してゐたのである。患者は整頓好きで、金錢には嚴格で、他人が自分を吝嗇家と考へはせぬかと自分自身で思ふ程である。小遣錢に一定の豫算を立て、一錢でも無駄使ひをしたなと思ふと大いに後悔したりするのであつた。友人との貸借は正しく約束日に返濟しなければならぬと考へ、而もその様に實行してゐる。患者は利己的で剛情張りであり、征服慾に驅られる傾向があつて、友人の失敗を內心で喜んだりする。患者は小學校で初めの中は運動會で何をしても一等であつたが、負けるのではあるまいかと考へる様になつてからは運動會が嫌ひになり、スポーツを避ける様になつた。然し乍ら患者は仕合を見る事が好きであり、入院中には柔劍道の仕合を見に行きたいと考へた事があつたと云ふ。そして患者は仕合場で熱心に仕合を見てゐる間は少しも赤面不安を感ぜず、道場を去ると直ちに不安に陷つたりした事があるのである。患者は容易く怒るのであるが、然しこの怒りをそのまゝに現す事を得ず、常に內心怒りに燃え、「今に復仇してみせる」等と種々の空想を廻らす傾向があつた。又患者は小兒期以來全く臆病であつたが、反面に「サヂスムス」の傾向が潛在性にあつたらし

1) Freud, S.: Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, (Ges. Schr. Bd. V. S. 5-.)

2) Abraham, K.: Über Ejaculatio praecox, (Internat. Z. Psychoanal., 1917.)

く、小兒期に患者は猫の仔を大地にぶつけて殺したり、或は河中に投じて溺死させたりした事があつたと云ふ。又患者は發病來屢々自殺を考へ、「自殺したらどんな事を云はれるか」「祖父はどんなに悲しむであろうか」「父は如何に驚くか」等と考へたと云ふ。ある時患者は生き乍ら納棺されたと云ふ夢を見た事がある。この夢は母胎への復歸と云ふ重復限定の意味をも持つものであるが、又自殺の願望、自殺の空想と關係があるものと見得るものである。此處に又患者の潛在性「サヂスムス」の現れを認める事が出來るのであり、「サヂスムス」の自我への反趨によつて、却つて顯在性「マゾヒスムス」なる形になつて現れてゐるものと見る事が出來る。換言すれば患者に於いては能動性 (Aktivität) が受動性 (Passivität) によつて代償されてゐるものと見る事が出來るのであつて、こゝに所謂反對への復歸[1] (Verkehrung ins Gegenteil) の現象を認め得るのである。同じ現象は患者の肛門愛の傾向にも認められるのであつて、患者は腹がキリキリ痛む時、下痢が甚だしい時に却つて快感を經驗する傾向があつたと述べてゐる。肛門愛への固定の現れとして患者は又、自分の糞が排泄されたばかりのものならば、それが手に附着しても汚さを感じないと云ひ、患者に弄糞症の傾向の殘存を認める事が出來る。かくして患者には肛門愛の固定を明らかに示してゐるが、兩極性 (Ambivalenz) の傾向を著明に示してゐるこの患者には肛門愛の傾向に對しても反動的形成は決して欠除してゐないのであり、肛門に對して嫌惡の感を抱いて居り、特に肛門が女性々器と相接近してゐると云ふ理由で肛門に强い嫌惡を示したのである。この事は患者の性器「リビドー」(Gnitallibido) と關聯を有するものであるから更に後述の性器「リビドー」を說く時に再說しようと思ふ。

患者には暴露慾の傾向が强く認められる。患者は屢々男根暴露の夢を見た事がある。又小兒期の追想として患者は川邊で友人と男根を見せあつたりした事を述べてゐる。又患者は男子であり乍ら、入院中階段を下りる際に着物の裾が亂れるのを氣にした事もある。之は患者の有する暴露慾に對する反動の現れと解すべきは勿論である。患者に於けるこの强力なる暴露慾の傾向は、究極の分析に於いては患者の强力なる瞳視慾の自我への復歸の現れと解する事が出來るのであり、從つて患者に潛在性に强い瞳視慾の存する事を察せしめるのである。又實際に患者が聯想をなすに當り、閉眼してゐなければ聯想が出來なかつた事もある。この暴露慾と瞳視慾とが後述する患者の性器「リビドー」に於いて重大なる役割をなす事は當然考へられる所である。

以上述べたる所によつて患者に於ける口愛、尿道愛、肛門愛等の器官愛の傾向及び成分本能的傾向は、或は積極的に卽ち倒錯的に現はれ、或は反動的形成の意味に於いて

1) Freud, S. : Triebe und Triebschicksale, (Ges. Schr. Bd. VI.)

現れてゐる事を知るのである。

患者は赤面不安が女性の面前に於いて最も強く起ると云つてゐる。患者は居村の一般青年達が女の事のみを問題にし、余りに淫蕩的であり、好んで猥談に耽ける事に嫌悪を感じ、自らは性的事象に無關心な立派な青年、最も優秀なる人物であると村民から評價されたいと欲する時に不安が強く起ると云つてゐる。又或る時患者は、女性が存在しなければ自分の不安は起らぬであらうと云つた事があり、又患者が女性に關する聯想を初めて行つた夜多量の發汗があり、頸部がチカチカし、全身の强直を感じたと翌日の聯想時に述べた事もある。尙又、患者は女性に對し强い不安を持ち乍ら、入院中に屢々外出しては女事務員を見に行つたりした如き、患者の赤面不安が異性の存在と密接なる關係を有する事を明白に物語つてゐるのであつて、此處に患者の上位自我と自我との間に著しい懸隔があり、患者の異性に對する態度に著しい兩極性のある事を見得るのである。換言すれば、患者の自我は一面に於いて「エス」の欲求或は無意識的本能的要求に應じて居村の青年と同様の態度に陷らんとする傾向があるが，他面に於いて患者に模範青年たらん事を要求する上位自我があり、患者は高い理想我に服せんとし、ここに强力なる兩極性精神軋轢を經驗するものと見るべきである。患者が模範青年でありたいと考へてから、容易に性的滿足の可能性ある Café の女給の如き女から言葉をかけられたりする事を非常に厭がり、かゝる環境の女からは遠ざかる様に苦心し、この種の女を非難罵倒してやりたいとの感を强く抱いてゐる反面に於いて、教養あり、氣品あり、上品な、貞淑な女性に接近し、而もかゝる女性を妻にしたいとの念を持つた事は患者の自我がその嚴格なる上位自我と妥協しようとして採つた一つの態度或は ichgerecht なる空想――理想に外ならなかつたものと考へられるのである。實際患者の現實に於いて採つた態度行動はこの理想と相距る事遠いものであつたのである。卽ち彼の平生とる實際の態度行動は彼の上位自我よりして到底許さるべき程度のものではなかつたのである。或る時患者は彼が好きだと云ふ女性と夜道を同じマントに入つたり、又は手を握り合つて步行したりした事があり、又Mと云ふ少女に於いて彼の肉慾的願望の滿足を得る目的を以てその家を訪問した事があつたのである。而もこの慾望はその滿足が他人から非難される性質のものであると云ふ不安から、患者がその家に到着する以前に消失してゐたと云ふ事である。之は嚴格なる上位自我を持つて居り、「肉慾の事などは少しも問題にせぬ模範青年」を理想としてゐた患者としては當然な事であり、こゝにも患者の性的態度の兩極性の現れを見るのであり、患者が一面に種々の性的空想を持ち、性的願望を强く持ち乍ら、他面に性的事象に對する强い制止の現象を示した事を察すべきである。患者は前述の如く Café の女給を非難罵倒してやり

たいと思つたり、或は之から遠ざかる様に努めた一方に於いて、女給に接近して行きたい氣持を持つたり、村中の女性には凡て關心を持ち、假令見知らぬ女でも女が通行するのを見かけた時には言葉をかけるのが常であり、患者自らも自分が女に對しては特殊な人間である様に考へた程であり、ある時の如きは當りばつたりの女を相手にしたいとさへ考へた事もあり、入院中にも看護婦を追ひ廻はしてゐたのであつた。かくして患者は Don Juan 型の人物に屬し、多數の或は凡ての女性に對して興味をもつ人物である事が判るのであるが、而もその興味たるや空想的精神的のものであり、實際に性的の滿足を之に於いて得る事に强い制止抵抗を示す人物に屬した事が考へられるのである。卽ち患者は謂はば精神的或は空想の上に於ける Don Juan に屬する人物と見るべきである。患者は氣品あり、貞淑にして敎養ある人物を求めようとし、意識的には女給の樣な下品な erotic な型の女性を嫌つてゐる事は前述の通りであり、而も患者はこの意味に於いて自分が嫌つてゐるYと云ふ女との Koitus の夢を屢々見てゐるのである。卽ち患者は無意識的には却つて彼が意識的に嫌つてゐる型の女性から引きつけられてゐる事になるのである。又患者は平素手淫をなす際には女性を對象としてゐるに不拘、一旦女性に直面すると手淫の時に抱いた氣持ちは全く消失して了ふとも云つてゐる。ここに又患者が肉慾的願望を强く持つて居り、從つて erotic な女性から强く引きつけられ刺戟される傾向があり、而もこの願望に對して强い壓迫作用が働いてゐる結果、この種の女性に嫌惡を感ずる事が理解される譯である。患者の云ふ所によると彼が高等小學校一年生の時に、それ以前に持つてゐた男根に對する關心が考慮外に去ると共に肉慾的願望も消失するに至り、爾後彼は精神的に女性を愛さうとする樣になり、一般肉慾に關する淫穢なる言辭又は性器に關する事柄を口にする事が出來なくなつたと云ふ事である。然るに農學校入學後は周圍の人々が平氣で猥談を口にせるに反し、患者自らは卒直に之をなし得ざる關係上、患者は「考へてゐる通り話し得る人間」になりたいと望んだ事があつたと云ふ事である。以て患者が當時よりして已に性慾、殊に異性愛に强い壓迫を示した事を察し得るのである。偖て患者が貞淑云云を理由として交際してゐる女性は H. K. M. の三人であるが、之等三人に對しては他の女性に對する場合に比して赤面不安を感ずる事が少いと云ふ。その理由としてこの三人は余りに穩和であり、露骨な事を云はず、又他人の批評をする樣な女性ではないからであると云つてゐる。勿論之は極めて表面的な說明であると云はねばならぬ。之等の社會的に非難のない女性との交涉は患者を村人の批評非難の對象にする危險が少く、患者が比較的無難に之等の女性と交際し得ると云ふ事もこの患者の態度反應の一限定であらうと考へられる。然し乍ら患者のこの態度には一層深い限定があるものと察せられ

るのである。之に就いては後述しようと思ふが、兎も角も患者が常に接近せんとし、妻にもと望んでゐるこの三人の女性とは患者は實際結婚し得ぬ立場にある事は注意に値する事である。三人の中二人迄は既に他人との婚約が出來てゐるのであつたが、患者は自分が病氣である爲にむざむざと彼女等を他人から奪はれて了つたと思つてゐるのであつた。又Mは村に於いてはLepra系統の女と目されて居り、從つて患者が彼女と結婚する事は家人から強く反對される事は患者にも判つてゐるのであつた。患者が入院中、病室の向側にあるLepra診療所に來るMと同年輩の女患者にMに對すると類似の感情を抱き、彼女に接近し話合つてみたくなつたと余に告げた事がある。斯く當然結婚の出來ない事情にある女性に却つて接近せんとする傾向を示した患者は、入院中一入院患者の妻と交際し、而も患者の彼女に對する態度は可成り露骨なものであり、患者は時に彼女を己の膝にのせて遊んでゐたりした事もあるのである。之等の事實は卽ち、患者の性慾に於ける前記の兩極性を一層明らかに示すものと云ひ得るのである。患者がその異性愛に強い壓迫を示してゐる事は既に述べた所である。然らば斷然結婚の出來ない事の明らかな前記の三女性及び決して性的關係の許されない人妻と交際する事は彼の上位自我の許す處であり、彼は安心して之らの女性と交渉し、而も他人からの非難攻擊を受くる危險から逃れ得るのである。而も之によつて彼の Don Juan 的傾向を滿足する事が出來、又彼が女性から持てて居り、又持て得る資格があると云ふ Narzißmus を滿足し、のみならず之を他人に見せびらかす事が出來る譯である。

患者が精神的Don Juanである事は前に述べた處で、患者にこの傾向を生ぜしむるに至つた深い根底に就いては後に述べようとするのであるが、患者が自分の容貌、その他に關して強い自己愛を持つて居り、多數の女性を意の儘に動かし得るとの自信を持つてゐた事は明らかに察せられた。實際又患者は農村青年としては人並以上の端麗なる容貌を備へて居り、農村の子女から騷がれる資格を備へてゐる事は分析者も認めた處である。この自惚れが患者に Don Juan 的傾向を生ぜしむる一限定になつた事は明らかである。患者は又男は女に賴られる資格のあるものであり、女は男に從屬すべきものであるとの考へを強く持つて居たのである。而も何處迄も兩極性の附き纒つてゐる患者は、一面に於いて自分が果して女から賴られる資格と價値を持つてゐるかと云ふ事に疑惑を持ち、この點に關して劣等感を持つたのである。この患者の有する自己愛が破れ、劣等感が刺戟される事は患者の非常に恐れる處であり、これこそ患者をして女給の如きすれからした女であつて躊躇なく彼を批判し、又容易に自家藥籠中のものとなし得ない樣な女に憎惡を持ち、この種の女性から遠ざからうとし、H. K. M. の如き彼の自己愛を傷ける恐れなき女性に近づくやうにさせた一原因をなしてゐるのである。

患者がかく Don Juan の傾向の保持者であり、而も模範青年として村人から賞されようとの強い希望を持ち、從つて居村の青年とは異つた行き方を示し、内心には種々の性的願望を持ち乍ら、村人の批評を著しく氣にしてゐた事は前に述べた所である。この村民に對する彼の態度は結局彼の父に對する態度に還元し得るのである。之と同樣な現象が分析經過中にも顯著にされた。即ち分析經過中に於いて患者の自我が「エス」の欲求を容れ、無意識的本能要求に應じてゐる精神狀態を再現するに至つた時に、患者は他人の不在を見計ひ看護婦に盛んにふざけかけたりしたゐたのであり、而もこの行動が偶々余の發見する處となつた時患者は狼狽し、急いで身を隱して了つた事があつたり、尙又、患者は外出しては市内デパートを遊び歩いて賣子に接しようと努めたのであつた。かくの如き心的傾向は然し乍ら自由聯想上には決して齎らされる事なく、聯想内容は寧ろ枝葉に屬する事或はどうでも良い樣な事に止り、如何なる事を聯想して時間をつぶしたらよいかと考へてゐたのであつた。かくの如き傾向は分析中に生じ來たれる感情轉移現象に自己愛的抵抗[1]が作用してゐる結果と考へられるのである。彼の父は性的事象に對し嚴格であり、自分からは少しも性的事象を口にした事はないし、他人から話しかけられても女性に關する一般的の話すらした事がなかつたから、患者は父の面前に於いて女性の話をする事が出來なかつたのであつて、之は患者が女性に對して恐怖、羞恥等を持ち、殊に erotic な女性を極度に嫌ふ一原因とも考へられるのである。即ちここに患者の父との同一視が認められる。然し乍ら患者がその異性愛の傾向に對して示した強い制止作用或は壓迫作用の根源は、患者が母に對して持つた強い骨肉愛の固定――「エヂプス」複合體――母の愛の禁止――に存在するものと見るべき事は分析の結果明らかに知るを得た。尙患者の示したこの異性愛に對する制止、壓迫作用には患者が妹の誕生によつて經驗した母の愛の幻滅の悲愛も亦重大なる役割を演じた事は否定する事が出來ないのである。實際患者が精神的の Don Juan として發達して來た事には母に對する骨肉愛の制止及び母に對する失望が究極の原因をなすものであり、患者の祖母、叔母、H. K. M. その他凡ての女性に對する態度は患者が母に對して持つた經驗の反復と見る事が出來るのである。患者に於けるこの「エヂプス」慾望の抑壓機制並びに母の愛への失望は患者の性的生活の謎を解く鍵となるものであり、患者の示した種々の倒錯的性的傾向も之を根源としてよく理解する事が出來るのである。患者が六歳迄母乳を吸つてゐた期間中に患者は鷹揚に育ち、父が患者には友人の如く、又從者の如くに感じられてゐたと云ふ。之即ち患者が父の地位を得、父の役割

1) Abraham, K.: Über eine besondere Form des neurotischen Widerstandes gegen die psychoanalytische Methodik, (Internat. Z. Psychoanal., 1919.)

をそのまゝ演じてゐたのであり、ここに父との同一視を見るのである。Freud[1] は男の子が父と同一視をなす事に對して「小さな男の子は父に對して特殊な關心をもち父の如くなりたい、父の如くありたいと考へるが、之は換言すれば父を自分の理想(Ideal)とするものである」と說き、更に「同一視現象は謂はば「エヂプス」複合體成生前期(Vorgeschichte)に屬すべきであり、父との同一視と同時に又母への關心も起つて居る。次いで「エヂプス」複合體に於いては父は邪魔者となり、父との同一視には敵對的色調を帶びて來る。即ち同一視現象には元來兩極性が認められる」と述べて居る。さてこの患者に於いては上記の如く父との同一視をなし乍ら、時々父より折檻を受ける事が非常に恐ろしい事であり、小學校入學式の日に父に伴はれて登校せる頃には既に父に反感を持ち、父はこはいもの、親みを持ち得ぬ者なりとの感を抱くに至つてゐた。現在に於いては患者は父に憎惡の念をもち、父の顏を見るのみで患者の心はいら立つのであり、事毎に父に反對したり、又は反對したいとの慾望が起つて來る。患者の見るところによると父には多くの欠點があり、身體虛弱で、精神的にも決して完全ではない。即ち決斷力なく、余りに義理堅く、而も他人には非常に遠慮勝ちで、傭人の如き者に迄へり下る傾向がある。一言にして云へば父は影辨慶であつて、外に向つては卑屈であり乍ら家人には威張つたり、愚痴をこぼしたりばかりしてゐると云ふのである。父は大低終日ブラブラしてゐて仕事もせず、そのする仕事には碌なものはないにも不拘、患者がなすことにはたとへそれが確に良成績を擧げてゐる場合でも反對すると患者は云つてゐる。患者が農學校卒業後父は彼の作業を批評し、農學校等は卒業しても左程の効果は擧らないものだと云つて非難した。この父の言葉を聞く度に患者は非常に强い反感を父に對して感じ、尙「妹は女學校には入學させぬ」との父の主張を聞く度にこの反感は一層强く激發され、「自分は父とは反對に全財產を使つても弟妹の敎育に盡力するとの覺悟を强く抱くに至つた」と云つてゐる。而も患者はこの不滿を表面化し、自己の意見を直接父に吐露するだけの勇氣を欠いてゐるのであつて、內心で「こんなことを云つたら父は如何に怒るだらうか」等と考へ、一人で亢奮を覺えるのである。さて父に對するこの反感は患者をして家に留つて農業に從事する事を困難にしてゐる。患者は家を出て働きたい、自分の身體は風邪でもひくと母やその他の人々から父の樣に弱くてはいけない等と云はれる程農業に從事するには不適當である、自分が農學校に於いて成績良好なりしは父と同樣に身體虛弱なりし爲、人と同樣の能率を擧げる事が出來ず、他人より遲く迄實習をして居なければならぬので、先生が眞面目な生徒と見た結果に過ぎぬであらう。農業の如き天候に支配され、豫定通りになし

1) Freud, S.: Identifizierung, (Ges. Schr. Bd. VI. S. 303.)

得ぬ仕事は嫌ひであると患者は考へてゐるのであつた。だから患者はどこか別の處に職を求め、農夫としては暮したくないと云ふ念願を抱く事が屢々あつたのである。患者の現在に於けるこの心的態度は患者の父への憎惡感に對する防衛現象と見得るであらう。又一面に於いて患者は自惚れの傾向の現れとして、彼は田舍じみた服裝をして働かねばならぬのは厭だと考へ、ある時の如きは父の意に反して派手な服裝をなし、流行を追はんとしたりした事もあつたと云ふ。又實際に患者は入院中百貨店に行き、自ら服地を買ひ求めて來た事もあり、又初めて來院せる時の素朴な服裝に比すれば次回來院せる時の服裝は少しも素朴さを見出せなかつた位である。分析經過中抵抗狀態に於いて患者は自由聯想の根本原則に從はず、聯想するのに方言を少しも用ひなかつたのであるが、之も亦患者の自惚れが田舍じみた方言の使用を避けさせたのであり、かくの如き抵抗を籍らすに至つたのは患者が父から遠ざからうとし、父を除去せんとし、又父と違つた行き方をしようと云ふ態度が分析者に轉移せられたものと云ふ可きである。實際に父を除去し、父から遠ざからうとし、父と異なつた行き方をしようと云ふ傾向は患者の種々の點に現れてゐるのである。以前患者が未だ小學校に通つてゐた頃には、父が他家に行き留守だつたりした時には、患者は却つてよく勉强が出來たし、祖父と母と三人で居る時には、彼は少しも淋しさを感じなかつたと云つてゐる。患者は分析中に父が水死したり、又は父に負傷せしめたりした夢を見た事がある。かく患者には父の不在を望み、又父を亡き者にせんとし、父の地位を得て母の愛を獨占せんとする傾向があり、ここに患者に「エヂプス」慾望が遺憾なく現れてゐると云へるのである。患者は父の代理として時々村の集會に出席させられる事があり、それは患者には苦痛であつたが、一面に於いて患者はかくして一人前の人間として取扱はれる事が嬉しいのであつた。患者は自分を取立てて吳れる人に自分の能力を十分に發揮し得ぬのを相濟まぬ事と考へてゐるのである。患者は父の居ない働き場所で父の助力なしに一人前の男として働きたいと考へて居り、又父の世話にならず自分の妻たる可き女を探さうと考へたりしてゐる事は皆父との同一視、父に對する競爭心の現れと見る可きである。患者は父が毎日ブラブラしてゐる事に對して不滿を持つてゐるのであるが、之は患者自身に向けられる可きものであり、患者にも同樣の傾向があり、こゝにも父との同一視を見る可きである。卽ち患者の不滿はこの同一視に對する反動の現れと見るべきものである。「エヂプス」複合體の前驅としての同一視現象には兩極性の傾向があり、爲に「エヂプス」複合體にも二重の意味が附與されて來るのであるが、「エヂプス」複合體に於いて父との同一視は如何なる歸轉をとるものなるかについて

Freud[1] は「父との同一視はその後間もなく視界より消え「エヂプス」複合體は逆「エヂプス」複合體 (Umkehrung) となり、女性的心的態度 (feminine Einstellung) によつて父が對象となり、父によつて直接的性本能の滿足が期待されるに至る。則ち父との同一視は父との對象結合 (Objektbindung) の前驅となるものである」と云つてゐる。更に「この父との同一視は自己の自我中に取り入れられて上位自我が父の如くに形成されて行く」と述べてゐる。患者の分析は好都合に進行し、陽性感情轉移を示し、不安はいくぶん減少し、患者の女性に對する Don Juan 的傾向が聯想に上る樣になつた時、換言すれば患者の本能と上位自我との間に妥協が見出せる樣になつた時に、偶々父から無謀な書き振りの患者に退院を迫る手紙が來たのであるが、患者の心持ちは之によつて全く平靜を欠き、絕えずいらいらして居り、余と顏を合はす場合も患者は故意に橫の方をむいて了ひ、挨拶をしようとはしなくなり、從つて分析の進行は一時に妨げられて了つた事があつた。之則ち本能的慾求を統御してゐる所の患者の上位自我の形成には父からの禁止によつて直ちに葛藤を生ずる樣な[2]、換言すれば患者には現實に對する適應性が容易に失はれる傾向がある事を物語つてゐる。Freud[3] は同一視現象を感情の結合 (Gefühlsbindung) の最も原始的のものであると述べてゐる外に、「對象結合 (Objektbindung) に抑壓が加はり、退行現象を示さねばならなくなつた時には對象結合は同一視現象に迄退行し、そこに生じた症狀は苦痛を伴ふ事がある」と云つてゐるが、上記の如く父から新に禁止を受けるや現實への適應性を失ひ、父との相似の氣分、態度に陷つて行く傾向を如實にしめすに至つた所に同一視への退行を認め得るのであり、又患者が父の代理として集會に出席させられる事に苦痛を感じ、尙又患者が入院中に分析者と同一視して他患者に自由聯想法を施行せしめ、かゝる行爲が他人から咎められはせぬかと心配して居たるが如き、何れも患者が父又は分析者との同一視をなし乍ら、然もその同一視の爲に惱んでゐる事を示すのである。

以上よりして患者は父に對して强き憎惡、反感を持つてゐる事を知つたのであるが、患者は祖父に對しては反對に非常な親みを持つてゐた。患者は祖父からはどんな事を云はれても亢奮を覺えず、患者は實習で寄宿舍生活をしてゐた時、祖父の事が心配になり、自分が居ないとどんなに祖父が淋しがるかと考へ、祖父の顏が見たくなり歸鄕したくなつたり、早く卒業して祖父の目を樂しませる可く園藝——父は園藝方面の事は大嫌ひであつた——でもやつてみたいと考へてゐた。患者が一時退院した時、祖父が咳で困つてゐるから良い藥はないでせうかと云つて上仙して來たり、又この藥がよく効

1) Freud, S.: Identifizierung, (Ges. Schr. Bd. VI. S. 304.)
2) 古澤平作：交互性性格神經症と症狀神經症（業報 II 號 1.2 卷）
3) Freud: Das Ich und das Es, (Ges. Schr. Bd. VI.)

き祖父が喜んでゐますと手紙をよこした事があるが、患者が如何に祖父に對して愛と憧憬とを持つてゐたかを察する事が出來るであらう。妹が生れてから患者は父母の許から祖父母の膝下に移され、患者は祖父母に可愛がられて方々に遊びにつれて歩かれたり、患者の欲するものは凡て祖父母によつて供給された。尋常四年生の時、父と祖母とが腸チフスに罹り隔離されたが、祖母は同病で死亡し、父のみ痩せ衰へて歸宅したのであるが、その時の父の顔が患者には一層こはいものに見えたと云ふ。祖母の死後、父と祖父とは事毎に意見の衝突を來たし、互に大聲でどなり合つたりした。そしてそう云ふ機會には小供心にも無頓着で居れず、患者の胸は激しくおどつたと云ふ。祖母の死と殆んど同時に弟が生れ、その後父と祖父との反目は一層强くなつて來たと患者は云つてゐる。祖父は患者に父の欠點を敎へ込んだり、父は小學校を首席で通して來たが、現在は父より成績の惡かつた人々が却つて父より成功してゐる事を告げたりした。かくして祖父に對して愛を持つてゐた患者は、父と祖父との爭ひの際には常に祖父の肩を持つたと云ふ。元來祖父と父との性格は全く相反するものであつて、祖父は士分から農業に轉じ、祖父一代で全財產を蕩盡して了ひ、而も祖父は之について少しも意に介せず、現在に至るも士氣分を失つてゐない。患者は祖父に伴はれて狩獵に又は射的場に行つたりしたが、かくの如く祖父からして貰ふ事が患者には樂しい事であつた。患者が農業を嫌ふ時に腦裡に泛ぶ事は「自分の家が昔同樣に武家であつたら」と云ふ事であり、患者は昔帶刀して大道を濶歩し得た時代を空想し、渴仰し、而も患者は自分自身を維新頃の美少年として心に描いたりしてゐる。患者が抵抗狀態に於いて齎らす聯想が雜誌、小說の文章そのまゝを引用し來る事が屢々あるのであるが、この際の內容は多くは武士道を鼓吹し、又は殺伐な氣分を描き出してゐたのであつて、ここにも患者の「サヂスムス」が明らかに現れたのである。かくして患者が農業を厭ひ、家を離れたいとの慾望が起る所には患者の祖父との同一視が認められるのであり、患者の自己愛はこの祖父との同一視によつても大いに培はれたものと考へられるのである。要するに患者の精神生活に於いて祖父は父の代理 (Ersatz) として現れたものであり、種々の點、特にその物吝みする點に於いて父に反感不滿を持つた患者は祖父を Vater-Ideal としたものであつて、祖父との同一視が患者の理想形成 (Idealbildung) に大なる影響を及ぼした事が理解されるのである。

患者が凡ての長上に對して誇張的に余りに丁寧さ、柔和さを示したり、或は卑屈な態度をとる傾向が起つたのは患者が赤面不安を感ずるに至る少し前、養蠶實習の爲寄宿舍生活をしてゐた時、食事時間に患者の一同級生が上級生から食事上の些細な事で强く怒鳴られた事があり、患者自身も怒鳴られはせぬかとビクビクした事があつてから

であると云つてゐるが、之は父に對する憎惡心の反動形成が他人に轉移された結果と見るべきであり、尚又余りに嚴格なる父の態度に對する反動として男性的能動的の傾向を示す事を妨げられ、却つて女性的受動的の傾向をとる樣にさせられた結果であり、かくの如き態度を强ふるに至つた原因として去勢複合體が考へられるのであるが、之に關しては後述したいと思ふ。患者の兩極性態度が「エヂプス」複合體にその根源を持つて居り、從つて患者の父との同一視がこの態度に大關係があつた事は明らかである。實際父自身が如何に兩極性なる人物であつたかは次に述ぶる事實によつても判るであらう。患者が小學校時代受持訓導に對して持つた權威は家庭に於ける父の態度によつて破壞され勝ちであつて、修身科で習つた事は父には通用しなかつた。又先生が家で雜誌を讀む事を奬勵しても父はそれに反對し、尚父は叔母にも雜誌を讀む事を禁じ、叔母が私かに讀んでゐた本を取り上げて讀ませなかつた。而も父自身は秘かにそのとり上げた本を讀んでゐる有樣であり、又大掃除の際には患者は父が以前に讀んでゐた多數の書物を發見したのであつた。この父の性格異常、殊に患者に對する態度も亦患者の父に對する反感を十分に說明するものと考へられる。實際本例に於いて顯著に示された父との同一視が患者を慢性なる神經症者——性格神經症——にしたと云つても過言ではないのである。

さて患者に於いて前記の如く父との同一視を强くさせ、而もそれに兩極性を附與するに至つた原因の主なるものは母に對する强い愛着である。六歲迄も母乳を吸つてゐた患者は、ある時夢に於いて女の懷中に手を入れて乳房や腋窩に觸れてみたりした事がある。この母への愛の關係は然し妹の出生により大いに障害された事は既に述べた處であつて、その結果妹は母の愛に對する競爭者となり、母に對する愛着、口愛に對する壓迫の結果は母乳に對する嫌惡感、コンデンスミルクの汚穢感を抱くに至つた事は前に述べた處であるが、尚患者は妹に對する反感の現れとして妹は容貌醜く、身體はデブデブに太り、頭腦は良い方ではないと考へ、妹と一緒に登校する事を厭ふ結果を呈したのである。然し乍ら精神的反應に於いて何處迄も兩極性なる患者は、妹に對して全然無關心でなかつたらしく、ある夏の夜患者は妹の性器を見て、後になつて見なければよかつたと後悔した事があり、小兒期に友人から「お前は妹と Koitus をしたらう」等と云はれて非常に狼狽したりした事がある。妹が生れた後には患者は母よりも祖母に世話され、祖母に對して愛着を感じた事は既に述べた通りであるが、患者は祖母の死に關して父に責任があるものと考へ、爲に父に對して以前に增して攻擊的傾向を現したものと考へられるのである。祖母の死後患者は叔母に世話され、小學校五年迄患者はこの叔母と一緒に寢たり、叔母から方々につれて步かれたりするのが好

きであつた。患者は小學校一二年生の時已に女生徒について關心を持つてゐたが、叔母が三年生の時から學校教師として患者の組を受持つやうになり、それ以來學校に於いて女生徒には關心を持たなくなつたと云ふ。之には種々の限定があらうと思はれるが、患者の「リビドー」が全く叔母に集中されてゐた事もその主なる限定の一つであらうと思はれる。この叔母が結婚の爲旅立つ事になり、汽車が動き出した際に患者は自分の幸福が全部根こそぎにもぎとられて了つた樣な失望を感じたと云つてゐる處から見ても、この患者のこの叔母に對する愛着が如何に强かつたかが察せられるのである。患者が自己愛的の人物である事は既に述べたが、患者は幼兒期に他人から「可愛らしい子だ」と云はれ「顏貌がどうだ、髮はどうだ」と彼是云はれた事があり、從つて現在も容姿美に關する考へが患者を强く左右してゐるのである。「一層の事女の子に生れればよかつた」等と人から云はれた時、患者自身もその通りであればよかつたと考へたりしてゐる。そして患者は叔母の使用した女學校の教科書をとり出して見る事が好きで、もし自分が女であつたならば、女のする事例へば裁縫刺繡等元來好きであるが、之らの事を女の人より巧みにやる事が出來るとか、女のなす作法禮式も女の人より上手にやつたであらう等と考へる事があると云つてゐる。ここにも患者に於ける逆「エヂプス」複合體よりする母との同一視、次いで祖母、叔母との同一視によつて患者に Weibsein の願望があつた事、從つて患者が女性的受動的心的態度を示し、一面に「サヂスムス」の傾向の强かつた反面に女性的「マゾヒスムス」的の心的態度を示した事が理解されるのである。患者が學藝會に於ける失策以來大衆の面前に立つ事に恥しさを持つ樣になつた事、患者が鏡台に向つて髮を梳いてゐるのを他人から見られる事を非常に苦痛とし、特に父に見られる時その程度が非常に强い事は患者の暴露慾の固定に對する反動、父に對する恐怖(骨肉愛に關して)に限定されてゐる事は勿論であるが、又患者の Weibsein への願望に對する反應とも見る事が出來るのである。さてかくも患者の感情を引きつけてゐたこの叔母は患者の組を六年迄受持つたが、患者が高等一年生の終頃腎臟炎で死亡したのであつた。そして叔母の死後患者の對象となつたものは前記のH. K. M. の三人であつたのである。

患者は屢々女性との Koitus を空想しつつ手淫を行ひ、新聞雜誌等の記事又は廣告から手淫の害を知り、之を禁じようとして禁じ得ず、一人で惱んでゐるのである。患者は手淫の結果陰莖が發達せずに短小であり、又身體が衰弱して弱視を來たし、記憶障害を起してゐるものと考へて心配してゐるのであつた。患者は徵兵檢査前に、この短小であるとして劣等感の對象となつてゐる陰莖を見られるのを恥じて自殺を企圖した事があつた程である。又患者は多勢と一緒に入浴するのを避ける傾向があつた。患者が顏貌

に自信を持つてゐる事は前記の通であるが、一方に於いて患者は陰莖が小さい者は鼻が小さく低いものであるとも考へてゐたのであつた。兎も角も患者が陰莖を他人から見られる事を心配した事は患者の暴露慾の傾向に對する反動と見るべきものであり、既に小學校時代に患者は便所で他の生徒から陰部をのぞき込まれるのでないかと心痛したり、又農學校時代に膀胱の充滿による反射的の陰莖の勃起を他生徒から認められはせぬかとの心配を持つ機會が多かつたと云つてゐるのである。患者は又小兒期に川に水泳に行き、他の子供の陰莖を觀察する機會を得、之と比較して自分が包莖ではないかと心配した事があつたが、後に手淫をなす際に自分が必しも絕對的包莖でない事を知り、幾分安心するに至つた。そして陰莖に關する劣等感は餘りに思ひ泛ばなくなり、唯だ身體に關する劣等感を持つ様になり、而も患者はこの劣等感を「自分が男性的體格の保持者であつたら」と空想で補はんとしたとのことである。患者は自分が包莖でないと云ふ事實を知つた前、高等小學校一年生の時、患者は女生徒には成熟すると月經が起つて來るものであると知り、女生徒に又も關心を持つ様になつたと云ふ。然し乍ら患者は最初は女性を對象としての Koitus を好まず、むしろ精神的に女性と接觸してゐたいものと考へてゐた。農學校入學後、性的事象に就いて耳にする機會多く、家にありても傭人達が話す事柄が多くは性的事象であつたりして、患者は自然に性的方面に興味を持つ様になつたが、それでも患者は自らそれを口に上せる事が出來ず、絕えず「女性に對してゆるんだ心持を引締めよう」との努力を惜しまなかつたと云ふ事である。性的事象に對する關心の昂進は入院中に看護婦を追ひ廻はす事、終には患者を Bordellbesuch に導いたのであるが、Koitus は Ejaculatio praecox に終り、患者は Immissio には快感を持つたが、Ejakulation には少しも快感を伴はなかつた。そして患者は再び Koitus よりは寧ろ抱擁又は接吻がより良いものであると考へる様になつたのである。患者がH. K. M. に對し Koitus の慾望を持ち、或る時はMの家を訪ねたが、その家に行くと同時に Koitus の慾望は全く消失し、却つてその様な考へ方をしてゐる事を他人に氣付かれはせぬかとの心配が強くなつた事は前に述べたが、之等の事實は患者に骨肉愛の制止 (Inzestscheu) が強く存し、H. K. M. のみならず、凡ての女性は母の代理 (Muttterersatz) であり、爲に患者が異性愛に強い壓迫作用を示してゐる事を示すものと云ふべきであり、尙患者が女性と精神的接觸のみを欲し、又 Koitus よりも接吻抱擁を選び、又 Koitus の慾望が事前に消失したり、或はKoitus が Ejaculatio praecox に終つた事等は患者に於ける去勢複合體の存在を示すものと考へられるのである。この Bordellbesuch に導いた所の性的事象に對する患者の關心は、患者の小兒期より未解決に終つてゐた Koitus 及び出產に關する疑問によつて强迫的に增强されて

ゐると云ふ事を分析の結果知つたのである。患者は分析中急に分析者に向つて、今迄の聯想内容から說明して欲しいと申出た事があつた。然しこの要求の滿足を患者は十分に得られなかつた爲にか、患者は病室內で手淫の衝動に驅られたのであつた。[1] 患者がかくの如く說明を求めるに至つた事は分析の結果から考へて、患者の小兒期に於ける Koitus 及び出產の疑問が父により滿足なる解決が與へられずにあつたのが、その分析當時は患者には父からの送金が絕えてゐた時であつたので、父によつて滿足されなかつた古い心的態度が分析に反復されて來たものと考へられるのである。實際に患者は小兒期に妹の性器を見て如何にして Koitus を行ふものかを知らず、而も友人から妹と Koitus を行つたらうと云はれて狼狽した事があつた。その後患者は友人が他の男の子と女の子とに Koitus の眞倣をさせてゐる所を見物させられた事があり、之に刺戟されてか患者自身も妹を押し倒して Koitus 願望を滿足しようとした事があつたと云ふのである。患者は Koitus に關する知識を得たいと思つたが、父から敎へられる事なく、寧ろその樣な事を父に聞く事は父を怒らせるばかりであり、その爲に非常に父から强く叱られたのであつた。患者は祖父、その他の人から聞かうとしたが、各別々の解答が與へられ、Koitus に關する患者の好奇心は滿足させられる事なく、却つて好奇心が强く湧いて來る事になつたのである。患者は小兒期に兩親の Koitus を目擊した事があり、患者にはその際 Koitus が「サヂスムス」的行爲と考へられたと云つてゐる。患者が小學校に入學當時、登校するのを嫌つて家で遊び暮してゐたのは、學校敎師が鞭を持つてゐて唯嚴めしい、恐ろしいものと思はれた爲であると患者は云つてゐるが、この學校敎師に對する感情は父に對する感情が轉移されてゐるものであつて、患者が元來如何に父の制裁を恐れてゐたかと云ふ事を想像し得るのである。患者は父が「サヂスムス」的であると考へ、而も父がある時叔母を叱りつけ、のみならず叔母に傷つける樣な暴行さへもした事があつたのを深く記銘してゐるのであつて、父との同一視を强く示す患者が父と同樣に女性に對して自己愛的に、又「サヂスムス」的に振舞ふ事は當然の事であり、又患者が後年衆人の面前で女にとびついて Koitus や抱擁又は接吻等の行爲に及ばんとする衝動に驅られ、自ら非常に驚いた事さへあると云ふのも父と同一視し、女性に自己愛的に又「サヂスムス」的に振舞ふ傾向から理解し得るのである。然し乍ら患者は父から罰せられる事を恐れ、父との同一視を止め、反對に母との同一視をなす事を餘儀なくされ、男性的能動的の地位から女性的受動的地位に退行し、父との同一視の代りに肛門愛期に於ける母との同一視を明らかに示すに至つたのである。こゝに於いて患者は肛門からの出產 (anale Geburt) とて出產は

1) Ferenczi, S.: Bausteine zur Psychoanalyse, Bd. II. S. 21.

肛門に於いて行はれるものと考へるに至つたのであり、患者は「猫の仔が肛門から生れた」と云ふ夢を見た事さへある。

かくして患者は男性的に父の代理をなし、母の愛を獨占せんとし、父をこゝに邪魔者に感ずるやうになつてゐる一方、患者は母の代理として父から愛されようとし、母が餘計な存在であるかの如くに感ずるのである。「エヂプス」關係は年少期には人間一般的に行はれるものであるが、患者には二重の意味を有せる「エヂプス」複合體が成人に殘存せる胸腺の如く[1]に患者の後年の精神生活に累をなしてゐることは、患者にÖdipalphaseに於ける「リビドー」の固定を認める事が出來るのである。Ödipalphaseに於いては陰莖は只單にPhallusとしての價値を有するに過ぎず、而もこのPhallusはÖdipalphaseに於いて主役を演じてゐるのである。「エヂプス」關係に於いて兩親に對する「リビドー」備給をなすに當り、Phallusを失ひはせぬかとの心配を生ずる時に、兩親に對する「リビドー」備給とPhallusに對する自己愛的關心との間に葛藤を生じ、自我は「エヂプス」關係への關心を除去し、こゝにPhallusに對して自己愛的關心を强くするに至るものである[2]。余は此處に於いて患者の去勢複合體に論及したいと思ふのである。患者は一聯想時間中に、患者が農學校入學當時に級友間に紛失物あり、而も患者は何等の根據なしにその竊盜の嫌疑が自分にかゝるのではないかと思はれてビクビクしてゐたと云ひ、この追想をなした際に患者は非常な心的苦痛を覺えたと述べた事がある。患者は父から直接に小遣錢を貰ふ事を厭がつてゐたが、屢々いゝ加減な名目で父から金を絞りとらうとした事さへあつたと云ふ事である。患者は分析に對して抵抗を持つて來ると便秘の傾向を示したのである。患者は肛門愛的性格の人物であり、從つて患者には糞と金錢とは同意義[3]を持つてゐる。然し乍ら患者の秘結による快感は金錢を得たいと云ふ慾望によつて美化され切らず、その結果慾望は抑壓現象によつて不安を作り出したものと云へるのである。患者には小兒期に排便に關して母より懲罰を受けし事あり、患者が後に糞を保留せんとする時に同樣の懲罰が働きかける事を示すものである。他方患者がPenisに對して持つた關心は妹の性器、女性の性器を見るに及んで「penisと糞とは共に同樣に身體から離れ去るものである[4,5]」と考へ方に變化を來たしたのであつて、こゝに患者の去勢複合體の存在を窺ひ知り得るに至るのである。患者は長上に對し常にビクビクした感情に把はれてゐることは前述した所である。尙患者の追想によれば患者は、小兒期に每日の樣に祖母に脊負はれて小山の一小祠

1) Fenichel, O.: Spezialformen des Ödipuskomplexes, (Internat. Z. Psychoanal., 1931.)
2) Freud, S.: Untergang des Ödipuskomplexes, (Ges. Schr. Bd. V.)
3)及び4) Freud, S.: Über Triebumsetzungen, insbesondere der Analerotik, (Ges. Schr. Bd. V.)
5) Freud, S.: Einige psychische Folgen des anatomischen Geschlechtsunterschiedes, (Ges. Schr. Bd. XI.)

附近に遊びにつれて行かれてゐたが、ある時患者は社殿に向つて放尿した事があり、祖母からそんな事をすると陰莖が曲つて了ふとおどかされ、それ以前には神樣とは難有いものと思つてゐた患者がそれ以來、陰莖を曲げて了ふ樣な神なんか無力のものと考へるに至つたのであると。この事實は患者に一去勢脅迫として働いてゐるものであり、患者は去勢に對し代償的に神の無力を信じ樣と努力したものである。Freud[1]によれば「快感を齎らす糞柱を强ひて排出せしめる事は去勢期待を生ぜしめる前提となる」と云つてゐるが、患者に於ける排便作用は上記の去勢脅迫によつて去勢複合體の形成に參與する事になるのである。更に Stärke[2] は去勢複合體の成因として母の乳房から離される事を擧げてゐる。この患者には口愛の傾向强く、六歲の時の離乳の經驗は患者に痛々しき苦惱として影響してゐる事は旣に述べた所である。又 Alexander[3] は「快感を齎らす身體部位の消失、卽ち排便、離乳等に際して順次に快不快を生ずる事には手淫に於いて快感を齎らす所の陰莖を失ひはせぬかとの去勢複合體の基礎を見出し得る」とも云つてゐる。何れにせよ患者には離乳排便が共に去勢複合體の前驅者となつて居り、患者の「エヂプス」複合體には去勢複合體の存在を認められるのであつて、患者が抱いてゐる精神的及び肉體的劣等感、Bordellbesuch に於ける Ejaculatio praecox 等何れも患者の去勢複合體に由來してゐるのである。

患者の「リビドー」は Ödipalphase にその固定がある。卽ち患者の「リビドー」の大量は Phallus に備給されてゐると云ひ得るのである。患者が「エヂプス」複合體及び去勢複合體に惱む所に Phallus に對する關心、卽ち Phallus に對する强い自己愛が認められる。Freud[4] は「「ヒポコンドリー」性感覺と比較し得る樣な不快感を伴ふ身體の感覺の典型を性器の亢奮狀態に見出される」と云つてゐる。患者は前述の如く顏貌に對して自己愛的であり、暴露慾强く、從つて精神內界に起つた性慾の亢進、Penis の勃起は壓迫され、顏面の性器化によりその吐け口を見出し、ここに赤面を生じ、患者はそれに對して苦痛を伴つてゐるものと考へられるのである。卽ち此處にも「下方より上方への移動」が行はれてゐると云ひ得るのである。

患者に於ける顏面の性器化は患者の自己への「リビドー」の備給、卽ち自我「リビドー」に變化を招來せしむるのである。而も前記の病歷から明らかなる如く、患者の

1) **Freud, S.**: Analerotik und Charakter, (Ges. Schr. Bd. V.)
Triebumsetzungen, insbesondere der Analerotik, (Ges. Schr. Bd. V.)
Untergang des Ödipuskomplexes, (Ges. Schr. Bd. V.)
2) **Stärke, A.**: Der Kastrationskomplex, (Internat. Z. Psychoanal., 1921.)
3) **Alexander, F.**: Psychoanalyse der Gesamtpersönlichkeit, 1927, S. 140.
4) **Freud, S.**: Zur Einführung des Narzißmus, (Ges. Schr. Bd. VI. S. 166.)

「リビドー」の大部分は女性をその對象としてゐる。患者が女性に對して持つ慾望は患者の上位自我の許す處とならず、自我と上位自我とは妥協しようとし、而もこの妥協は決して患者には成功せず、常に不安を齎らしてゐる。謂はば患者は戀愛生活に失敗してゐるのである。Freud[1)]は戀愛生活から自己愛の研究をなし、一般に對象撰擇には依屬型(Anlehnungstypus)及び自己愛型(Narzißtischer Typus)の二つがある事を說いてゐる。今患者の場合に就いて考察して見ると、患者は自己をはぐくみ養つて吳れた母の幻影(Mutterimago)を求めて Don Juan となり、この母への愛が轉移せられた結果の表現が患者の對女性關係に於いて明らかに現れて居る。即ち患者の對象撰擇が一面依屬型に從つて起つてゐる事は明らかである。患者が「姉の樣な女性」を欲してゐた事も之を裏書きしてゐるものと云ひ得るのである。然し乍ら他面に於いて患者が自己愛型の對象撰擇の傾向をも示す事は明らかである。患者が母の代理として、換言すれば母に對する愛の轉移の現れとして H. K. M. に愛を示した事は既に述べたが、この患者の H. K. M. に對する愛には尙一つの限定がある事を看過し得ないのである。H. K. M. は前述の如く患者が妻となし得ざる立場にある人間である。彼女等は既に他人と婚約濟みになつてゐるか、或ひは村民から Lepra 系統の家の娘と目されてゐるのであり、積極的に患者に働きかける處がなく、從つて患者に對しては謂はば自己愛的に振舞つてゐると云ひ得るのである。Freud[2)]は「女性は美的根據からばかりでなく、ある興味深き心的態度からして男性に非常に强い刺戟魅惑を與へるものである。或る人の自己愛は自己愛の全部を放棄して對象を求めてゐる人に對して大なる引力を及ぼすものである。子供の有する魅力の大部分はその自己愛、彼の自己滿足的であつて、近づき難き事に基づくものである。この場合吾人は恰かも幸福なる心的狀態即ち、吾人自らが疾くに放棄した、かの攻擊し難き「リビドー」態度を保持し、保存してゐる彼等を羨むが如き態度を取る事になるのである」と云つてゐる。さてこの患者の H. K. M. に對する愛、或ひは對象撰擇の有樣はFreudのこの說明によつてよく理解し、說明し得るのである。即ち元來著しく自己愛的であり、又曾つてあつた患者が自分に對して謂はば自己愛的なる態度、或ひは立場を取つてゐる H. K. M.、即ち曾つて自分があつた樣な、或は現在自分がある樣なものを對象として撰擇した譯であつて、此處に患者の對象撰擇の自己愛型を明らかに認め得るのである。Freud[3)]は又、自己愛的な婦人は嚴密に云へば男子が彼女を愛すると同じ强さに於いて自分自身を愛するのであり、彼女の要求は愛せんとする事に向はずして愛される事に向ふものであり、從つて彼女等にはこの條件を滿たす男子が氣に入るのであると云つてゐる。今之を自己愛的なる

1),2)及び3) Freud, S.: Zur Einführung zur Narzißmus, (Ges. Schr. Bd. VI. S. 171, 172, 173.)

この患者に當て嵌めて考へて見るならば、患者は女性から愛され、殊に Café の女給の如き者から愛されたり、騒がれたりする事を決して喜ばなかつたのではないのである。唯だ自己愛の强かつた患者は自己の自己愛を傷ける恐れある、かくの如き職業や階級の女を恐れ、之から遠ざからうとした事は前に述べた處である。此處にも患者に自己愛型の對象撰擇の傾向を認め得るのである。Freud[1] は對象撰擇のこの依屬型と自己愛型の二型は明確に別々に各人に存するものではなく、各人に於いてこの二つの傾向の中何れかゞ優性 (dominierend) になるものであると云つてゐる。この患者に於いては上記によつて自己愛型の對象撰擇の傾向が依屬型のそれよりも寧ろ優位にあつたと云ひ得るのではあるまいかと考へられる。

さて患者は異性に對する强い關心 (Überschätzung der Frau) と同時に之に對する壓迫作用を示して居るのであり、之は骨肉愛と去勢複合體との間の葛藤によるものである。この患者の性的慾望と自我或は上位自我との葛藤は幼兒期の性慾に對する自我の態度、卽ち抑壓鬪爭の連續と見る可きものであつて、この骨肉愛の抑壓は結局患者を女性的受動的となし、患者は潜在性「サヂスムス」、顯在性「マゾヒスムス」、暴露慾卽ち陰莖暴露の抑壓による羞恥、陰莖に關する自己愛は潜在性となつて、顯在性には劣等感が强くなつてゐる。之を要するに患者に於ける自己愛は Reich[2] の所謂自己愛の第一型に屬するものと云へるのである。然し乍ら此處に注意すべきは患者が分析經過中に示した分析者との同一視である。Reich は分析者との同一視の起る自己愛を第一型とは大體に反對の傾向を有する第二型に入れてゐる。卽ち分析者との同一視は、顯在性 (代償性) 自己愛の爲に「何でも知つて居る、分析者よりも良く知つてゐる」との傾向から生ずるものとしてゐるからである。患者が示した分析者との同一視について

1) Freud, S.: Zur Einführung des Narzißmus, (Ges. Schr. Bd. VI. S. 170.)

2) Reich W.: Zwei narzißtische Typen, (Internat. Z. Psychoanal., 1922.)

Reich の所謂自己愛型の第一型及び第二型は次の如きものである。

第　一　型	第　二　型
1) 顯在性劣等感	潜在性劣等感 (去勢複合體)
2) 潜在性自己愛	顯在性 (代償性) 自己愛
3) 肛門、尿道愛的素因	肛門、尿道愛的素因
4) (持續的) 强度の骨肉愛	短期持續的骨肉愛
5) 女性尊重	女性輕蔑
6) 受動的女性的	能動的同性愛的 (潜在性又は顯在性)
7) 潜在性サヂスムス、顯在性マゾヒスムス	可逆的
8) 暴露慾の抑壓 (羞恥)	非抑壓的、性器から性的及びその他の行動に轉移される
9) 理想的自我の滿足	過當評價による現實自我の滿足
10) 感情轉移は陽性	極少
11) 豫後良	疑問

は既に前述した處であるが、患者が自己愛的人物である爲に自由聯想法の根本原則に從はず、枝葉に屬する事どうでもよい樣な事が ichgerecht である爲に、そう云ふ話を續けて唯時間の終了を待つ樣な馴れ振りを示した事があり、之は分析方法に對して自己愛的であつた樣に、患者は分析者と同一視し、他患者を分析した積りになつてゐた事もある。之も亦分析に對する自己愛の現れである。[1][2] 他患者を分析すると云ふことは患者に苦痛を與へてゐる。即ち患者は分析者に感情轉移を示す代りに分析者と同一視し、自分を分析者の地位に置き、被分析者たることを忘れ、精神分析を一の科學として取扱はんとする傾向である。分析者との同一視は結局は小兒が父と同一視し、而も父を低く評價せんとすると同樣であつて、患者は分析者を表面的には高く評價せんとはしてゐるがその實、その背後には精神分析の低評價、即ち陰性感情轉移が潛在してゐると云へるのである。潛在性陰性感情轉移とは陽性感情轉移の背後に存し、分析の進行を阻害する現象であり、この發生原因として Sterba[3] は二重の「エヂプス」複合體、去勢複合體、上位自我より生ずる抵抗例へば罪惡感、抑壓抵抗等を擧げてゐるが、本例に於いては之等の外に自己愛の傾向に影響される事大なるを知る。Sterba は分析を成功させる爲にはこの潛在性陰性感情轉移を十分解決させなければならぬと云つて居り、又 Reich[4] は赤面恐怖症の分析に於いて抵抗が完全に解決つかぬ前に聯想上に說明し得る樣な形で出て來る材料を至る所で說明して失敗したと述べてゐるのは、本例に於いて明らかになし得たこの自己愛から生ずる潛在性陰性感情轉移に十分なる留意を必要とする事を暗示してゐるものであらう。さてこの分析者との同一視と自己愛型第一型との關係について說かねばならぬのであるが、患者には異性に對する强い關心がある。而して既に述べたる如く、患者が異性に强い衝動を驅られて來る時に患者は分析者との同一視をなして居たのである。之は患者の「リビドー」が對象に流れ出でて患者に自我の貧困[5] (Verarmung des Ichs) を來たす傾きがあり、この自我の貧困に對する防衛の結果として自己愛の一表現たる分析者との同一視が起つたと云ふ事は分析の結果明らかである。自我の貧困、從つて自己感情の損傷に對する防衛として患者は女性的受動的となり「分析者からからかはれたい」「分析者に抱擁されたい」との心的

---

1)及び2) Abraham, K.: Über eine besondere Form des neurotischen Widerstandes gegen die psychoanalytische Methodik, (Internat. Z. Psychoanal., 1919.)

3) Sterba, R.: Über latente negative Übertragung, (Internat. Z. Psychoanal., 1927.)

4) Reich, W.: Zur Technik der Deutung und der Widerstandsanalyse, (Internat. Z. Psychoanal., 1927.)

5) Freud, S.: Zur Einführung des Narzißmus, (Ges. Schr. Bd. VI.)

態度を採つてゐる。Jekels 及び Bergler[1] は次の Formel を以て「愛されたい」と云ふ心的態度 (Geliebt-werden-wollen) と同一視現象との關係を説明してゐる。

"Ich bin wie du, und da du dich liebst, mußte du auch mich lieben."

此處にも能動性が受動性に變化せる過程が認められるのであつて、愛される事によつて患者は自己愛の滿足を得て居る譯であり、かくして患者の自己愛は Reich の自己愛型第一型に屬するものと結論し得るのである。

考　　按

以上述べ來つた處を要言すれば、患者は二重の「エヂプス」複合體を持つて居り、陽性の「エヂプス」複合體に於いては患者は一面に父との同一視を示し、母に對する骨肉愛的慾望を持ち、父を母に對する愛の競爭者とし、他面に於いては父を敵視し、父に對する反感を持ち、同時に父よりの去勢脅迫を恐れてゐる譯である。陰性の「エヂプス」複合體に於いては患者は父に對して愛を現し、父の歡心を買はんとし、その結果母との同一視を示したのである。かくして生じた父に對する兩極性態度、殊に父に對する憎愛は患者をして父の代理 (Vaterersatz)、理想的父(Vater-Ideal)としての祖父を求めしめる結果になり、父の價値を低下させ、祖父の評價を高くする事となつたのである。又逆「エヂプス」複合體に於ける母に對する反感に加ふるに弟妹の出生による母の愛に於ける失望は、患者をして母の代理 (Mutterersatz) としての祖母、次いで叔母、更に引續いて H. K. M. 等を愛の對象として求めしめるに至つたのであつて、患者に於ける精神的 Don Juan 的傾向は結局母に對する兩極性態度、骨肉愛の制止に關係があり、母の愛に對する幻滅の悲愛、離乳の經驗の反復と見る事が出來る譯である。而してこの Don Juan 的傾向の發達には患者の持せる去勢複合體が重大なる意義を持つてゐる事は明らかな事であり、患者が erotic な型の女性を避け、自分が結婚の出來ない事情にある H. K. M. 等の女性に近づかんとした事も之によつて説明し得るのである。卽ち之によつて男性としての自己愛を保ち、又之を毀傷する恐れある狀態から逃れようとしてゐるものと見る事が出來る譯である。尙又患者の Weibsein の空想、女性的受動的心的態度も母との同一視、並びに去勢複合體によつて説明の出來る事であり、患者に於ける女性的「マゾヒスムス」的の心的態度は父に對する憎惡、父との同一視による攻擊的「サヂスムス」的傾向の自我への反轉により説明され得るので

1) Jekels, L. und Bergler, E.: Übertragung und Liebe, (Imago, 1934.)

ある。患者の自我は「エス」の慾望をそのまゝ容れんとして上位自我との衝突を起し、或は抑壓され或は妥協形成をなしてゐる。患者の父が餘りに嚴格なる結果、患者の自我は母との同一視によつて女性的となり、この女性的自我と父との同一視による男性的上位自我との間には絕へず葛藤を生じ、この葛藤は患者の劣等感、Potenzstörungを引起してゐるものと考へられる。かくして患者の精神的傾向の主なる特徵は「エヂプス」複合體、去勢複合體、骨肉愛の制止等を根據として理解する事が出來るのである。而して患者の赤面現象も上記の機制により、顏面の性器化、即ち下方より上方への移動であると云へる。

然し乍ら患者の强度の兩極性、即ち能動性の受動性への轉化及び潜在性「サヂスムス」と顯在性「マゾヒスムス」とは單に ödipalphase に於いて行はれてゐる機制であるばかりでなく、患者の肛門「サヂスムス」期に於ける固定にも不斷影響されてゐるのである。患者は明らかに肛門愛的性格者であり、又常に女性的受動的傾向を顯著に示してゐたのである。之は患者の女性に對する强い好奇心、强い異性愛の壓迫の結果の受動への推進と考へられるのであり、患者の小兒期に於ける排便に關して母より受けた懲罰にその因を求め得るものであり、異性愛の抑壓は患者をして肛門「サヂスムス」期への退行をなさしむるものと云ふ可きである。尙患者が下痢に對して持つた快感は、この肛門「サヂスムス」期よりも尙早期の肛門愛期に於けるものと見做すべきであらう。かくして患者には異性愛の抑壓によつて「リビドー」の肛門愛期への退行、即ち「リビドー」の前方より後方への移動が行はれてゐると考へられるのである。

尙患者の自己愛は Reich の所謂自己愛の第一型に屬し、尙ほ患者が分析中、時に示した分析者との同一視は患者の自己愛が Reich の所謂第二型の現れと見る可きものでなく、女性の過當評價による自我の貧困に對する防衛、換言すれば理想我の滿足並びに自己感情の低下の防禦の現れと見るべきであり、結局第一型の現れと說明し得るものである。

次に第一例及び第二例との比較檢討であるが、何れも「エヂパール」及び肛門「サヂスムス」期の固定を見、「エヂプス」複合體に對する反應として生じた骨肉愛の制止、去勢複合體による異性愛の抑壓の結果は一面に「リビドー」の下方より上方への移動の現れとしての顏面の性器化、即ち赤面が現れ、他面に於いては肛門「サヂスムス」期への退行、即ち「リビドー」の前方より後方への移動の現象が起つた事に於いては二例共にその軌を一つにして居るのである。而して本例に於いては自己愛から潜在性陰性感情轉移が生じて來る事を明らかになし得たのである。

（擱筆するに當り御懇篤なる御指導と御校閲を賜はりし丸井敎授に厚く感謝す）

Psychoanalytische Studien über neurotische Angst.
IV. Mitteilung——Ein Fall von Messerphobie.

Von

Dr. Choichiro Hayasaka.

Eine 50jährige Wirtin bekam nach dem Tode ihres Gatten vor allen Messerschmiedwaren besondere Angst, die sich noch verstärkte, seit ein Pensionär sie eines Nachts in ihrem Schlafzimmer besucht hatte. Nach mehreren Jahren spielte sich Liebesgeschichte zwischen 2 Pensionären und der Tochter der Patientin ab, wodurch sich ihre Angst vor Messerschmiedwaren pathologisch steigerte; d. h. sie, die sonst gewohnt war, alles, wessen sie im Haushalt bedurfte, sich sofort anzuschaffen, wollte durchaus kein „Debabocho" (ein spitzes Küchenmesser) kaufen, obwohl sie es dringend nötig hatte. Eines Tages aber hatte sie es doch zufällig gekauft; am nächsten Tag bekam sie einen opisthotonischen Anfall infolge übermäßiger Furcht vor dem Debabocho, als sie sich an dieses erinnerte. Seitdem litt sie an Messerphobie (besonders vor Debabocho), deren Inhalt anfangs lautete, „Männer könnten sie damit verwunden", doch später sich dahin umwandelte, daß „sie andere (ohne Unterschied des Geschlechts) damit verletzen könnte". Während dieser Umwandlung durchlief die Phobie alle Gefahrsituationen, und zwar fürchtete sie, einerseits selbst in Gefahr zu geraten und anderseits etwas Gefährliches damit anzustellen.

Die Analyse ergab, daß sie einen Ausfluß ihrer gestauten Libido bei ihrem Sohn und bei den Pensionären zu finden gesucht hatte. Phobie vor Männern (am häufigsten und am stärksten vor ihrem Sohn) stellt den symptomatischen Ausdruck dieses Zustands dar. Während der analytischen Beobachtung bekam sie neuerdings eine auf männliche Tiere beschränkte Tierphobie, die eine gleiche Deutung wie die Männerphobie zuläßt. Daß sie ihre Libidobesetzung auf die Genitalien von Männern konzentrierte, daß der Mittelpunkt der Männer-

phobie in der Messerphobie lag, und viele andere Eigentümlichkeiten der Messerphobie nötigen uns zur Annahme, daß das Messer bei ihr als Symbol des männlichen Glieds anzusehen ist; diese Annahme wurde durch einen Traum bestätigt. Also entstanden die Männer- und die Tierphobie und auch die sich auf Männer beziehende Messerphobie durch Verdrängung der genitalen Regung, mit anderen Worten jede Phobie dieser Patientin hat eine hysterische Konstruktion. Aber damit kündigt sich das Einsetzen einer regressiven Sexualorganisation zur prägenitalen (Sadismus) hin an, da das männliche Glied durch das Messer symbolisiert wurde und der Koitus durch Verletzung. Wie erwartet, wurde Patientin während des Verlaufs der Krankheit von einem Zwangsimpuls befallen, mit dem Messer andere Personen zu verletzen oder sonst etwas Gefährliches damit auszuführen ; das ist aber nicht mehr der genitalen Äußerung zuzurechnen. Es ist eine echte Regression und stellt Verschlimmerung des Leidens bis zur Zwangsneurose dar. Ob man die Furcht vor Verletzung als ein hysterisches Symptom ansehen kann, da die Furcht die vor genitaler (und zwar phallischer) Betätigung darstellte, bleibt noch fraglich. Jedenfalls gehören die Phobien bei diesem Fall zu einer Mischform von Hysterie und Zwangsneurose und können vielleicht zur Bestimmung der Stellung der Phobien in der Reihe der Neurosen ein wenig beitragen.

神經症的不安の精神分析學的研究

第 4 報 (刄物恐怖症の1例)

東北帝大醫學部精神病學教室
醫學博士　早 坂 長 一 郞

I. 緒　　言

精神分析學が神經症、精神病等の病理、從つて治療及び豫防の理論に向つて種々の貢献をなしつゝあることは識者の均しく認めて居る所であるが、その說く所往々にして奇矯に見え、その理論には檢討を必要とするものが少くない。しかし分析學は今まで誰もが試みなかつた方法に於いて獲られた多年の經驗を基礎として築き上げられたものであるが故に、之が吟味をなすに當つては我亦實際の經驗を通してなすべきであることは言ふを俟たぬ。この吟味は分析學の關係する方面が頗る多いが故に精神現象を取扱ふ總ての方面からなされねばならぬが、余自身としては材料其他の關係から先づ神經症的不安に手を染め、1) 分析學の創始者フロイド (Freud. S.) によつて提唱された不安神經症 (Angstneurose) の獨立性と、2) 不安の原型としての去勢不安 (Kastrationsangst) の重大性とを吟味せんとし、旣に不安を主症狀とする3例を報告し[1] 最後的決定は今後の經驗に俟つことを約束しておいた。こゝに第4例を報告し前記の二點に關して知見補遺をなさんとするものであるが、この中の第二主題に就いては本例は婦人患者であるが故に不適當といふべく (何となれば婦人に於ける不安は去勢不安を原型とするものでないから) 勢、第一主題のみを全研究共通の題目とするが、その代り本例はその他の點に於いて分析學の定說を吟味するのに好都合な特徵を豊富に具へて居るから本報告に於いてはむしろこの點に重心を置いて觀察して行きたい。

1) 早坂(長) 當業報 I 卷、昭和7年、43頁及び95頁。II 卷、昭和8年、47頁。

II. 一般病歴 [2]

患者 50歳、寡婦、素人下宿業、尋常小學校（4年課程）卒業。

家族歴 父は患者の結婚後死亡、病名不明。母健在。同胞6人。中長兄は患者の結婚後心臓病で死亡。患者は2番目。弟妹は總て健在。夫は患者が42歳の時病死。病名不詳。子供7人中4人死亡、23歳の息子と19歳の娘と16歳の息子と健在。

遺傳歴 父方の伯父1名精神病（病名不明）で居る間に死亡。母方の從弟1名曾て早發性癡呆症で當科に入院したことがある。

既往症 17歳の時顔に「くさ」を生じそれが現在尚痣のやうになつて殘つて居る。その他著患無し。

現在症 元來取越苦勞性である。昭和3年秋、夕食に鮪を食べたが二片三片食べてる間に胃の邊から咽頭の方へつき上げて來るものがあり、吐きたかつたが吐かないで濟ませた。（家族一同同じものを食べたがかうなつたのは患者だけ。）その後常に何とも言へぬ嫌な氣持が胸部腹部にあり、一寸したこと（例へば何を食べても中毒するんぢやあるまいかと考へた時とか、嫌なニウスを聞いた時とか、ガードの下をくゞる時とか）にも動悸したり身體が熱くなるやうに感じたり、又その時には定まつて例の何とも言へぬ嫌な氣持が增惡しグーッと咽頭の方へつき上げて來るものがある。内科醫から胃腸藥を與へられたが少しもよくならぬのみか、耳鳴、眩暈などの症狀も加はつて來た。翌年9月から婦人科醫によつて卵巣製劑の注射を受けたが之によつて氣分が段々よくなつて行つた。

昭和5年2月氣分も餘程よくなつた或日のこと、新しい出刄庖丁を買つた。それは前々から買ふ必要に迫られてゐたのであるが、何となく氣が進まず買ふことを躊躇してゐたものである。その翌日針仕事をしてゐる最中に不圖その出刄の形を思ひ出し、非常な恐怖に襲はれ足の方から何かのぼせ上つて來るものがあるやうな感じがしたと共に遂に身體を後方に反らせてしまつた。意識溷濁は無かつた。それから出刄のことが氣にかゝつて夜も眠られず、新しい出刄はその晩の中に向ひの家（實家、母と末弟とその家族とが居る）に預かつた。このことがあつて以來出刄庖丁を中心にして一切の刄物が怖しくなり、僅かに薄刄（菜切庖丁）を辛うじて使用し得るに過ぎず、人が使つてゐるのを見るのも嫌、その音を聞くのも嫌、更に刄物を持つた人（軍人、巡査、魚屋等）、刄物のある所（金物屋、臺所等）も嫌になり、一家の主婦として非常な不自由を忍ばねばならぬやうになつた。この刄物恐怖症の最初は、刄物によつて自分が傷けられはしまいかとの恐怖が中心となつてゐるが、その後次第に（大體7月頃から）刄物を以て人を傷けたい衝動に驅られ、そんなことがあつては大變だとの恐怖が

2) 總て昭和5年8月20日初診時を基とす。

中心をなすやうに變化して行つた。

本例の恐怖症は始發症狀たることに於いて又强度と持續性とに於いて刄物(特に出刄)恐怖が主となつてゐるが、此の他にも患者は先の尖つたもの（錐、火箸、簪等)、ステッキ、棒切、煙管、金槌、紐等の如き人を傷け或は死に至らしむるが如き所謂危險物に對しても同樣の恐怖症を示し、又危險人物（と患者自身で考へる)、例へば勞働者風の男、押賣の男、紳士、家族その他一般の人物に對しても或は危害を加へられはしまいか、或は自分が加へはしまいか（特に家族に對し）との恐怖を抱き、その他危險狀況に對する恐怖症として井戶、池、深い穴、堀、二階の窓際等の傍へ行くと跳び込みたくなる衝動とそれに對する恐怖とを感じ獨居すれば自殺（傷）しはしまいかと怖れ、外出すれば乘物に轢かれたい衝動と防衛的恐怖とを感じ、可愛い子供を見ればそれを握り潰したく、綺麗な硝子窓やコップを見ればそれを壞したく、縫物をすればその衣物を裂きたく、爐の傍に居れば鐵瓶をひつくり返したく、狂人の聲や噂を聞けば狂人の眞似をしたく、その他無數の危險狀況(或はしてはいけないこと)に對して冒してみたい衝動と、それをしたら大變だとの恐怖とにつきまとはれるやうになつた。之等二次的（卽ち强度、持續性に於いて刄物恐怖症に劣る所の）恐怖症は刄物恐怖症が內容上の變化（卽ち自分が傷けられはしまいかとの恐怖から人を傷けはしまいかとの恐怖への變化）をした頃から顯れ、之等の症候の附加と刄物恐怖症の增强とによつて患者は耐へ難き苦惱を續け、あらゆる療法も効果無く、かくして昭和5年8月2)日分析的治療を乞ふに至つたのである。

初診時所見 眉毛のやゝ吊り上つた、鼻筋の通つた、骨張つた顏の持主である。態度毅然として滔々と病歷を話す。その間感情を誇張して他人の同情を求むるといふが如き風が見えぬ。狹義の精神病を想はしむるが如き何等の症狀も見當らぬ。身體的にも鼻簾を中心にして兩頰にかけて黑ずんだ所があるのみで他に異狀が無い。血液ワ氏反應陰性。

その後の經過 その後全然外來患者として分析操作を受ける。9月初旬から時々氣分の好いことがあり、さういふ時には古い小い出刄庖丁なら使へるやうになつた。しかし苦惱の强さ、持續、恐怖症の對象が非常に變化し易く、日常の出來事、一寸した思ひ付きに應じて次から次へと症狀が變化して行き、また戾つて來ては他のものに移つて行く。症狀の變化と言つても大体前記の範圍を出ないが、新に附加された症狀としては11月中旬犬が放尿する所を見てから犬嫌忌症を生じたことと、12月頃馬が深山居る傍を通つた時から馬恐怖症にとりつかれたことと、12月初會見の際に血に關する話が出てから血のことを考へたり、血に關する話を聞いたりするのが恐しいやうな嫌なやうな氣がするやうになつたことと、やはり12月頃から刄物或は血に關する强迫像（Zwangsbild）を時々見るやうになつたこと等がある。此の他非常に風邪引き易くなつたとか、身體の所々に鈍痛や異常感覺を訴へるとか、その他種々雜多な症狀が忽ち現れ忽ち消え、或は强まり或は輕快する等極めて複雜な經過をとつたが、全體としては極めて徐々にではあるが輕快に赴き、11月初には一人で治療を受けに來るやうに

なり(それまでは必ず家族の一人を同伴して來た)、翌6年2月頃には何等の病感を有たぬこともあるやうになつた。所が同年9月末、弟の子(實家の)同志で刄傷をやつたといふ事件が持ち上り、その後すべての症狀がスッカリ逆轉した。しかし10月中旬から先づ刄物恐怖症が輕快し始め、10月末には氣分もよくなり、11月末から再び何等の病感をも有たぬことが多くなつたが、7年1月、子供が相次いで病氣したのを動機として一般に症狀が惡化し始め之はなかなか恢復せず、遂にその年の10月中旬に來たのを最後として操作を打切つてしまつた。

この間に於ける家庭的事情の變化として、昭和5年12月末、最後の下宿人たる一人を軍隊に送つてから下宿業をやめてしまつた。(もう一人居つた下宿人は患者が當科を訪れる1ケ月程前患者の病氣を理由として斷つてしまつた。)

III. 分析病歴

發病までの事情 42歳の時夫に死別し15歳、11歳、8歳の3人の子供を連れて故鄕なる現在の土地に移り素人下宿を始めた。患者は元來男まさりの氣性であり、怖さなどは知らない方であつたが、夫の死後は生活上の心配或は親類との間の色々面白からぬ事件の爲氣が弱くなり、スッカリ臆病になつてしまつた。絕えず何かに襲はれはしまいかとの不安があり、或時など夜椽側で變な音がしたのを非常に怖がつたことがあるが、之は患者の性格として異常なことであつた。下宿人は2人、何れも十臺の男であつたが、3人目に24〜5歳になる海軍兵上りの男を置いた。その男はイヤに親切で狎々しく何か野心があるやうに思はれるばかりでなく、その男が來てから2ケ月ばかり經つと時々夜中に患者の寢室の電燈が消えて居つたり(患者は用心の爲いつもつけ放しで寢る)、夜分患者の寢てゐる傍に來て煙草を喫つたりするやうなことが度々あつた。半年ばかり經つた或晩のこと、その男に呼び起されたので起きると彼は室を出て行つたが、前後の事情から判斷して何をしに來たか確かに判つた。翌日下宿を斷ると謝罪やら哀願やらされたがそれでも斷つたのでどんな仕返しをされるかと思つて非常に怖かつた。扨て刄物恐怖症の前驅症の如きもの、即ち「刄物は危險なものだから用心しなければいけない。人目にかゝる所に置くのは不用心だ」と考へ(實際患者は庖丁さしに覆を作つた)、刄物に氣をつけるやうになつたのはこの事件の前後からであるが、その時期が明瞭でない。夫の生前にはこんなことが無かつたのは確であるが、刄物に特に氣をつけるやうになつたのは、或は夫の死亡直後であると言ひ、或は下宿屋を始めてからであると言ひ、或は前述の海軍兵上りの男が來てからであると言ひ、或はその男が出て行つてからだとも言ふ。何れにしても刄物に特に氣をつけるやうになつたのは夫の死後から薄々起つて居り、それが前述の事件によつて强められたと考へるのが最も妥當だらう。刄物に特に注意するやうになつた時期が明瞭でない如く、その動機も亦明瞭を缺くものがある。「男手が無

いから不用心だと考へたから」とか「刄物で脅されはしまいかと思ふから怖い」とか言ふが脅迫の目的が何處に在るかが明瞭でない。例の事件があつた後は「その男が自棄を起して暴れ込んで來やしまいか」と怖れたといふが、事件の前の刄物に對する懸念に就いては要するにハッキリした動機を思ひ出せないと稱する他はないのである。

その後大した事件も無く、たゞ刄物に特に用心しつゝ數年を暮したのであるが、昭和3年の秋蛸を食べ、その後氣分惡さ、色々な神經症狀を來したことは前述した。當時下宿人は2人（長男の友人、SとG）居たが、その中のSが翌4年の8～9月頃から性質が急變し、陽氣な人が挨拶もろくにしないやうになつた。之が患者を非常に氣に懸けさせ、諸症狀を惡化させる動機となつたが、12月初から再びSはもとの性質に還り、之と共に患者の氣分もよくなつて行つた。何故Sがそんな風になつたかは患者の大きな疑問であつたが、翌5年1月になつてそれが解けた。卽ちGから「Sの日誌にGと娘（患者の）とが仲が好いので面白くないと書いてある」由を聞かされ、更に數日後GがSの日誌を持參し患者に見せたが、それは娘のことばかりでなく女のこと、戀愛云々の文字で埋められて居た。之等のことを知つて以來患者は眞先に「かういふことから刄物三昧になる」と考へ、驚きと憂慮と見るべからざるものを見てしまつたとの自責の念と、更に「娘が殺されはしまいか、そのとばつちりで自分も殺されはしまいか」との恐怖に捉はれた。何故眞先に「刄物」を考へたかは患者自身でも不可解のことであり、後に詳論する如く、症狀分析の甚だ興味ある題目である。それはさうとして月日と共にこの恐怖はいつとは無しに消えて行つたが、刄物を人目につかない所に置かうとの用心だけは一層嚴重になつて行つた。かういふ事情の下にある患者が2月に出刄を買ひ、それと共に刄物恐怖症が起つて來たのである。

刄物恐怖症の內容の變化（「斬られはしまいか」が「斬つたら大變だ」と變つたこと）は徐々に起つて居るやうである。たゞ8月娘が手術を受けて以來症狀が益々强烈となつて來たが、內容變化は旣にその前に起つて居る。

症狀の特徵並に症狀に關する聯想　患者の言ふ所を綜合すると「刄物は男だけしか持つて居ない」少くとも「刄物を以て脅したり危害を加へたりするのは男に限る」さうである。例へば患者は、鞄などを持つた男を見るとその中に刄物が入つて居はしまいかと想像してその男に危害を加へられることを怖れるが、女が包物などを持つてゐても別に何とも思はない。又患者は言ふ「男なんてどんな立派な風采をして居つても……若い女のあとをつけて行つて殺したりする。」と。其の他刄物を持つた男にあとをつけられるやうな氣がするとか、芝居に出て來るやうな好い男が豆絞りの手拭で頰被りをして出刄庖丁を振り上げてゐる場面を空想するとか、男の腰の高さに出刄の强迫像を見るとか、威勢のいゝ魚屋の若い者を怖れるとか、男性と刄物との關聯を示す聯想は枚擧に遑が無い。その特別な場合として彼女の長男（當時23歲）に對する關係がある。最初出刄恐怖症が最も猛烈だつた頃、患者は長男の顏を見るのが眩しいやうな嫌なやうな怖しいやうな氣がしたといふが、その理由は長男は小い時

から短氣で無鐵砲だからどんなことをされるか解らない（曾て夫の死後間も無くこの長男に Schamhaare を引つ張られたことがある！）との恐怖がある一方、斬りたい衝動に驅られ、殊に喉佛の高くなつてるのを見るとか裸になつて寢てるのを見るとかする時にこの衝動が强くなるからである。從つて長男と對座する時は（殊に二人きりで居る時）氣持が落着かず、長男が出て行くとホッとする。ホッとすると共に何とも言へぬ淋しさに捉はれるのが通常である。而も長男とは、他の男性に比し最も屢々會ふわけだからその苦痛も亦最も大である。長男を斬りたい衝動とそれに對する恐怖とはその後次男や娘にも及んで行つたが之等の人からは危害を加へられはしまいかとの恐怖は感じない。

かくの如く患者の刄物恐怖症は、換言すれば男性恐怖症とも言ひ得るのであるが、この男性恐怖の理由として患者は「斬つたりするのは男の方が多いから」（即ち男性恐怖は刄物恐怖症の結果である）と稱して居るが、果して之は本當のことを言つてるのであらうか。患者は一般に男性を刄物に關聯せしめて恐怖する一方、刄物に關係無く、むしろ性的危險に關しても恐怖して居る。海軍兵上りの男を下宿に置いてる間警戒したのは彼の言動から看取した性的野心に對してゞあり、或晩の出來事を恐怖したのはその理由を説明するまでゞもない。患者は又、電車や、その他の人混みの中で男の傍に行くと性的衝動が起り（時として Scheide が nässen することがあるといふ）、その人に erotisch な眞似をしやしまいか、寄り添つて行つたら大變だと思ふことがある。或は狂人になつて長男の寢床に入り込みやしないかを怖れ、殊に長男が裸體になつた時など縋つて行きたい衝動とそれに對する恐怖とに襲はれる。その他後に誰か怖い人が居るやうな氣がすることがあるが、その氣持は曾て娘時代に男に後をつけられた時のそれと同じであるといふ。或は「隣家の細君を殺してその主人を奪つたら」とか「表の家の主人に變な要求を出されたらどうしよう」とか「亡夫の友人が家に入つて來たら」とか空想上の危險に對してまでも恐怖してゐる。

この性的危險に對する恐怖が他の恐怖に關聯してゐる例は動物恐怖症に於いて更に顯著に現れて居る。分析治療開始後３ヶ月餘を經た時のことであるが、或日近所の大きな犬（牡）が放尿する所を見てその犬にかぶさりたい衝動を感じたが、お勝手に歸つて來てから「或所の奥さんが犬と通じて犬の子を生んだ」といふ話を思ひ出し、その後犬に對する嫌忌症を生じ、遠吠を聞くのも足跡を見るのも嫌になつた。それと同時に「犬のやうな顏になりはしまいか」「犬の眞似をしやしまいか」「長男（或は G）の顏が犬に見えやしまいか」「犬に自分の腰の所に後から縋られはしまいか」「肩の所に後から前脚をかけられはしまいか」「犬が羽織袴を着けて（或はお婿さんになつたと言ひながら）家に入つて來やしまいか」「犬と例の海軍兵上りの男と一所に家に入つて來やしまいか」「犬が寢床の中に入つて來やしまいか」等々の恐怖症が時として强迫像乃至實感を伴つて患者を襲つて來た。この恐怖症に惱まされつゝある間に、或日馬が澤山居る傍を通つた時「馬に自分の Genitalien を踏まれはしまいか」との恐怖を有つて以來「馬に顏を嚙られはしまいか」との恐怖やその他理由の無い馬恐怖症（嫌忌

症)――殊に馬の Penis を見るのが嫌――と馬を對象とする性的衝動とに苦しまねばならなかつた。此の他、牛、狐、猿、熊、蛇等に對しても些細な動機から恐怖症(嫌忌症)を示したが、その症狀と動機とは犬、馬の場合と大同小異である。之等の詳しい考按は後に讓るとして、症狀の上から、本患者に於いては性的危險に對する恐怖症と刄物恐怖症、動物恐怖症とは平行して現れてゐるとの事實を看取することができる。

こゝで一つ患者の性生活史を觀てみよう。先づ狹義の、卽ち普通の意味の性生活史を述べる。小學校に行かない前、兄と Genitalien を見せ合つたことがある。又、女友達同志で Genitalien をおつつけ合つたことは屢々ある。かういふ時患者はいつも aktiv な方であつた。そんなことばかりして遊んで居たといふ。11～2歲の頃6歲下の弟に對し aktiv に coitus の眞似をした。12～3歲の頃 coitus の準備行爲を或大人に誘はれて窃視したことがあるが、當時それを理解し得たか否かは記憶に無いが、嫌なことだと感じたといふ。當時大人から unzüchtig な話を聞く機會が多かつたが、coitus の事實に就いては半信半疑であり、且さういふ話を聞くのが嫌だつた。又この頃兄から母の秘藏する obszönes Bild を見せられたが、後で自分一人でも出して見た。16歲に最初の Menses があつたが、かねて聞いてはゐたものの信じなかつたので驚いた。Onanie は當時無かつたが Menses の來ない前綿を以て Menses の際の手當の眞似をしてみたりした。

17～8歲頃には男女關係の話などを聞くのが大嫌であつた。現在娘がさうであるが、所謂「男嫌ひ」であつた。當時近所の男に誘はれたが振り切つて逃げて來た。「きかない娘だナ」と言はれた。19歲の頃夜一人道をしてる時男に後をつけて來られたことがあつたがうまく逃げた。男を怖いと思つたのは此頃からである。coitus の事實を知つたのも此頃である。

21歲の時、12歲上の男と結婚したが、性生活は夫からも控へ目過ぎると言はれた程消極的であつた。夫には Impotenz 等のことは無かつた。患者が frigid であつたか否かは聞く機會を得なかつたが、夫の死亡後の狀態から想像し、患者が話さなかつたことは障碍が無かつたものと見て差支あるまい。coitus a tergo の經驗はあるが、それが特に lusterregend であつたか否かは聞き洩した。

42歲の時夫が病死し、その後寡婦として暮してゐるが亡夫への思慕は切なるものがあつた。しかし再緣したいとは思はなかつた。昭和3年(48歲)5月から Menopause に入つたがその前後から盛に Onanie をやるやうになつた。その際の空想は常に夫を對象とするものであつた。Onanie は翌年9月婦人科醫を訪れるまで續いたが、現在の病氣が起つた時は Onanie の故かと思つたといふ。發病後も性的衝動は强く起つて居るが、之にはいつも「さういふことをしたら大變だ」との恐怖がつきまとふやうになつた。その具體的な例は前項に述べたがこゝで患者は發病前後から Genitalien に對し非常に敏感になつたことを特記しておきたい。之は negativ な形、卽ち嫌忌或は羞恥の感が强いといふ形でも現れてゐるが、positiv 卽ち露骨な願望或は興味となつても現れてゐる。犬や馬に對し嫌忌症を示したのもその源をたゞせ

ば之等の動物は Genitalien を露出してゐるからである。又患者は娘と一緒に錢湯に行くが娘はいくら注意しておいてもそれを守らない。それがたまらなく嫌だといふ。又近所の奥さんでよく風呂で一緒になる人が平氣で Genitalien に關した汚しいことをするのを見てから、その人の顏を見るのも嫌になつた。患者は寢る時の身仕度にも深く注意し、電燈を消し、露出を極度に警戒した。他方 positiv な現れとしては Onanie が盛だつた頃男性全體としてゞはなく、その Genitalien だけをその形のまゝで欲したことがある。又下宿人を朝起しに行つた時 Erektion を想像したこともあつた。犬嫌忌症のあつた頃、家に居てお勝手に脊を向けて坐つて居る時、或は人ごみの中に居る時後方から Penis が入つて來るやうな感覺を Vagina に有つた。此外之等に類したことは無數にある。

要之患者の性生活は小兒期から前思春期にかけて positiv に現れ、思春期から結婚生活中は Negativität を示し、夫の死後は Positivität と Negativität とが混合して現れてゐる。

廣義の性生活に就いては後に述べる。

性格竝に生活史　患者が生れた頃父は巡査をしてゐた。その父は一時巡査を罷め、金貸を始めた（それ程家は裕福であつた）が失敗し、また巡査になつた。しかし今度は田舎に勤務するので母と同胞と患者とは父と別居した。之が患者の7～8歳の頃である。當時兩親に對してどういふ感情を有つてゐたか餘り記憶に無い。父とはその後時々一緒になる位のものであつたが、その時の印象は「父は怖い人、從つて父に對しては他人のやうな遠慮があつた」といふのに盡きる。父は頗る短氣な人で、怒ると物を毀したり暴れたりするので、來ると「早く田舎へ歸つてくれゝばいゝ」と思つてゐた。母に對しては全體としておとなしい、優しい母だと思つてゐたといふ記憶しか無い。尤も患者が餘りきかなかつたので（母を毆つたこともあるやうだといふ）ひどく叱られたことはあるが。父が田舎へ勤務するやうになるまでの患者は比較的順調にあつたわけで、自然我儘に、殊に士族の娘だといふので氣位が高く育てられた。小い時から非常に「きかない」娘で、友人や弟妹を苛めてばかり居り、折檻の爲押入に入れられると着物を裂いたりした。友人は女が多かつたが、いつも餓鬼大將であり男の子のやうな遊びばかりしてゐた。

家庭の事情で尋常科（四年課程）きりで學校を止め、子守や女中にやられたが、主人の家族に尊稱をつけて呼ぶのが嫌で、早きは 20 日、永くとも 5 ケ月位でサッサと歸つて來た。患者にはかういふ直情徑行的な所がある。又口惜しがり、負けず嫌ひで友人が裁縫の稽古に通ふのを見て羨望に耐へず、母にせがんで家庭の事情を押切つて裁縫に通はして貰つた。之が 17 歲の時である。きかない代り仕事はミッシリやる方で、又几帳面、節約、整理好き、仕事は溜めることが嫌ひ、物持ちよく、愚圖々々しない。しかし執念深く一旦憎いと思ふと一生も忘れない方である。

21 歲の時結婚。夫は印刷業をやつてゐたが患者は內職として小間物などを商つた。姑の他に小姑多く、而も夫を初めその同胞何れも性格異常者で（姑は後に精神病を發してゐる）

患者の苦勞はなみなみならぬものがあつた。自殺を考へたこともあつたといふ。之等の境遇の爲患者の性格は妙にいぢけて表面柔順を裝ひながら內心反抗的な氣分が濃厚になつて行つた。子供は7人生んだが死產或は生直後死亡で3人を失ひ、長女を15歲で失つた。この時の悲しみは非常なもので、その後自分が娘になつた夢をみることがあつたといふ。現存の長男は、死產、生直後死亡と續いた後で生れたもの故、愛は非常に深かつたがその育て方はかなり嚴しかつた。いつか折檻した時「お母さんに殺される」と叫んだといふ。かくの如く患者は愛憎兩極に走る感情 (Ambivalenz) の持主である。之と同樣なことはその他種々の方面に現れてゐる。例へば患者自身では刄物を使つて魚を料理したり、薪割したり、家族の顔を剃つてやつたりすることが好きで、魚の料理など他の家の分までしてやつたりした程であるが、小い子供が薪割などするのを見ると危くて足の底がゾクゾクするといふ。卽ち危いことが好きでありながら他面にはそれを逃避する傾向が强い。この他執念深いが憐愍の情も深く淚もろい所がある。一寸した恨も忘れないが一飯の恩にも報いる方である。快活な所もあるが取越苦勞もする。要するに感情が激しい性格である。

夢 此處に揭げる夢は患者が報告したものゝ中比較的確實な根據を以て解釋し得たものだけである。夢の內容及びそれの聯想は患者が述べたゞけのものもあるが、訊問によつて補つたものも少くない。

夢(1)〔昭和 5. 12. 7. 夜〕 左下齒の齦が刄物(鑿?)で肉を剝がされるやうに痛む。見ると枕元に色の白い脊のスラリとした男(下宿人の一人Sらしい)が立つてゐる。その男が齦を刔つたに違ひ無い。その男は何か女のことで失敗して來たらしい樣子だ。私は「その女ばかりが女でないから他を探したらいゝでせう」と言つたら彼は「さうしませう」と言つた。起きて便所に行かうと思つたら其處に鼻紙が落ちてゐる。鼻紙にはベットリと赤黑く血がついてゐた。この血は齒から出たのだと思つた。その男が「便所に行くなら之も持つて行け」といふので、「何だ、人を痛くしておいて之を持つて行けなんて、白つぱくれてゐる」と思ひつゝその血の着いた鼻紙を便所に棄てゝ來た。歸つてみるとその男は旣に居ず窓の外にGが居る。其處へ夫(まだ生きてゐる所だ)が來て「Gも關係があるんだから捕へなけりやいかん」と言つて出て行つてGを捕へて來た。大きい方の息子も傍に居て「人だなんて解らないもんだネ」と言つた。その後は不明。

聯想。 先づその夢を見た日の出來事を摘記しよう。晝間娘と菜洗ひをやつた。勿論庖丁を使つたのであるが非常に嫌だつた。菜洗ひをやつてる間に月經の時のやうに下腹が痛んだので、娘と「今頃月經があつたら惡いネ」などと話し合つた。夕飯後Gが遊びに來た。(當時彼は旣に下宿を出てゐる。) G が來たら S が外出した。G が未だ居る間に患者は床に就いた。寢る時娘が「齒は治つたの」と聞いた。蓋し患者は數日前から齦(夢と同じ齒)が痛み、それはもう治つてゐたのである。G が歸つてから眠り、一度目を覺ました所へ S が歸つて來た。その後で再び眠つてみたのが前記の夢である。扨て夢に現れた男は、顔はよく解

らないが S の恰好に一致する。S が女に失敗したといふのは、患者が窃み見た S の日誌に書いてあつたことである。S は無邪氣に見える男で、女のことなど未だ問題にしてゐないやうに患者は思つてゐたが、日誌を見てからは油斷ができぬと思つてゐた。「油斷ができぬ」との意味は、失戀の擧句の兇行を怖れたといふことである。次に鼻紙であるが、患者はこの紙を曾て Menses の際にも coitus の後でも用ひたことがあると述べてゐる。又ベットリと着いた血に關しては眞先に Menses の血を聯想してゐる。鼻紙を便所に棄てることは Menses 及び coitus の際の日常行爲であつた。G といふ下宿人は露骨に性に關する話をする男で患者はいつも「嫌らしい」と思つてゐた。「Gも關係がある」といふ意味に關しては、患者自身では「Gが日誌を持つて來て見せたのだからそれで捕まつたんだと考へたが、それが夫に捕まつたことは理窟に合はぬ」と述べてゐる。「人だなんて判らないもんだネ」といふ言葉の意味は、Sが見かけによらず日誌に女のことを書いてゐたことを指すと解釋してゐる。この夢全體に就いては例の海軍兵上りの男の事件を聯想してゐる。

解釋。 後章でまとめてする。

夢(2)〔5. 12. 11. 夜〕 車井戸で水を汲む所。車に油が斷れたにも係らず釣瓶が樂に上つて來た。見ると綱が切れさうになつて居て其處を繃帶でつないである。「よく切れないで上つて來た」と安心した。

聯想。 私の家で常用の井戸は共同なものだからよく綱が切れる。

夢(3)〔6. 1. 21. 夜〕 夜手探りで車井戸から水を汲んでゐる。所が綱に細い所があつたので、危い、と思つて注意しながらやつと汲み上げた。汲み上げてから綱を繕つた。(この他にも井戸の夢は屢々みる。何れも釣瓶が重くて自分の身體が井戸の中へはまりさうになる所か、切れさうな綱で一生懸命汲み上げてる所に限られてゐる。)

夢(4)〔6. 1. 26. 夜〕 私がお勝手に居ると向ふから犬が驀に馳けこんで來た。まるで一足跳びのやうに勢よく馳けて來てお勝手に入り込んだ。そして私と流しに置いてあつた茶碗とに觸つてから「こゝに來るんぢやなかつた」といふやうな、さも惡いことをしたやうな恰好をして匆々として出て行つた。(犬が勢よく入つて來て直ぐ戻つて行つた夢は前にも一度みたことがある。)

夢(5)〔6. 1. 28. 夜〕 娘と二人で散歩に出た。道の脇が低くなつて居り、其處に大きな川がある。私は落ちはしまいかと怖々歩いてゐるのに、娘は何處から降りて行つたかその川に入つて行つた。川の中には家もあり、池のやうな所(即ち楕圓形になつた水溜)もある。娘はその池の周りを歩いてゐる。私は上から「危い」と叫んだ。其處へ 50歳 位の男の人(知人の夫らしい)が來て「其處は危いですよ」と言つた。娘は其處に入らず、廻つて歩いただけで上つて來た。それから二人で或家に行つた。座敷に上ると主人(それは前出の50歳位の男の人であつた)とおかみさんと娘とが居た。おかみさんが「あなたに之上げませう」と言つて天秤棒のやうなものを差出した。私は「そんなもの要りません」と斷つた。そのう

ちに家の人が障子をあけた。すると其處にも川のやうな池がある。娘と其の家の娘と二人でその池へ入つて行つた。その池は大へんぬかる。で「危い」と思つたが、よく見ると池には蔦のやうなものが網の目のやうに張つてある。之なら大丈夫だと思つてる中に二人とも無事に上つて來た。

夢(6)〔6. 3. 12. 夜〕 井戸で水を汲む夢。やはり重い釣瓶でやゝもすれば身體の方が引つ張り込まれさうになるのをやつと汲み上げる所。殊にこの夢では井桁が破れてゐるので餘計危いと思つた。

夢(7)〔6. 3. 19. 夜〕 道幅の狭い、左は人の屋敷、右は沼のやうな所を行く。向ふからオートバイが來る。危く轢かれさうになつて「殺される」と叫んだ。

聯想。(何も無いといふが耳を眞赤にして恥しさうにしてゐる。)

夢(8)及び(9)〔7. 1. 2. 夜〕 沼の周りを木履を履いて歩いてゐる。道幅が狭く且路面が沼の方に向つて傾斜してゐるので陷ちはしまいかと非常に怖かつた。(續いて)階段を上つて行くともう少しで上りつめるといふ所で階段が自分の方へ倒れさうになつて來るので非常に怖かつた。(この夢も夫の死後屢々みる。)

聯想。(全くの自由聯想として)半ヶ月程前夫と beischlafen する夢をみた。之は夫の死後初めてのことだ。

夢(10)〔7. 2. 27. 夜〕 やはり綱の切れさうな釣瓶で水を汲んでゐる所。

夢(11)〔6. 3. 1. 夜〕 長男と田舍道を歩いてゐる。路傍に肥料溜がある。その上に藁などが敷いてある。息子が其處へ陷ちた。「注意しなさいと言つてるのに入つてしまつた」などと叱言を言つてる中に息子はわけなく上つて來た。大した汚れもせず、ブラッシュでズボンの裾を拂つたゞけだ。

聯想。 この日息子が役所から歸つて來て洋服を脱いでる後から跳びつきたい衝動に驅られ、そんなことをしたら大變だとの恐怖に捉はれた。肥料溜は發病前から氣味惡いと思つて居たが、發病後は殊に嫌だつた。私が育つた裏邸に肥料溜の大きいのが二つあつた。私が17~8歳の時、兄が醉拂つて其處へ陷ちたことがある。その時から肥料溜が怖いと思つたらしい。

分析經過 會見の總回數は 94 回、期間は昭和 5 年 8 月20から 7年10月 14 日に至る 2 ヶ年餘である。分析の方法は自由聯想法 (freie Assoziation) を主とし、補助的に訊問法 (Nachfrage) をも用ひた。即ち話題は患者をして自由に選擇せしめ、余の發語は話を進行せしめるだけに止め、患者の言ふことが余に理解し得なかつた場合、或は患者が言ひ足らなかつたやうに思はれる場合にのみ問を發した。問答は總て患者の面前で速記した。

最初の間の話題は殆ど病狀に關するものばかりである。患者は實に雄辯に病苦とその經過とを述べて居る。次いで話題は家族或は向ひの實家のことに移つて行つた。之とても普通よく見られる實家や同胞との間の確執の話であり、而も何等の躊躇も無く語られるので患者の

無意識界を洞察すべく何等の手懸りも得られなかつた。之までに7回の會見を重ねてゐるがこの邊で患者はもう何も話す材料が無くなつてしまつたといふ。此處に於いて數回に互つて日常生活や患者のそれまで述べた事實の中から例を拾つて抵抗 (Widerstand)、無意識といふが如きものに關し、分析學的な考へ方を一通り說明した。しかし之等の努力も患者の聯想を進むべく大した效果は無かつた。患者はその教養の程度から言つても内省の能力が極めて低いかの如く思はれた。この間に於ける患者の余に對する依頼心と治癒への意慾とは非常なもので、治る爲に必要とあらばどんなことでも話してしまふといふ態度が明瞭に看取された。にも係らず話せないのである。

乃で余は手懸りを夢に求めた。しかし夢も亦或は全然忘れられ、或は手のつけ所も無い程斷片的のものであつたり、或は何等の聯想も得られない爲に(後になつて症狀の全貌が明かになつてから再び之等の夢をとり上げてみると、多少の手懸りとなり得るものも少くなかつた。しかし餘りに斷片的であり、之等の夢から全貌を組立てることは無理である爲に、之等は前記の夢の記錄から省略した。)荏苒日を送ること 3 ケ月以上、會見の數にして二十數回こゝに初めて有力な手懸りとなつた夢が物語られた。之が前記夢(1)である。この夢に就いての考按は後章に讓るが、こゝでその夢を語る時の態度に就いて一言したい。最初患者の報告した部分は「脊のスラリとした男に刄物で顋を痛くされた、血の着いた鼻紙をその男の命によつて便所に棄てゝ來た、夫が來て G を捕へて來た」といふに過ぎない。そして「その男は何か女のことで失敗して來たらしい」といふ所は後から「忘れてゐましたが」と言つて附け加へたのである。又「人だなんて解らないものだと息子が言つた」所等は訊問を受けてから漸次聯想されて來たのである。

この夢を話したことを契機として話題は患者の性生活に入つて行つた。而も今まで話す材料が無いと言ひ張つてゐたのに今度は極めて活潑に聯想が進んだ。性生活が明かになるに及んで刄物恐怖症の輪郭が次第にハッキリして來たわけであるが、娘に關した下宿人の戀愛事件が如何にして刄物恐怖症の動機になつたかを明かにすることは第二の難關であつた。患者は症狀に就いて語る際に幾度か刄傷事件或は刄物に關した思ひ出を語つた。しかし「戀愛事件 — 刄傷事件」といふこの關係を明かにするが如きものは何一つ思ひ浮ばなかつた。所が會見70回目に至り「5〜6月頃(昭和5年)朝下宿人を起しに行く時 Erektion の有樣を空想することがあつた」由を打ち明け、それに續いて「數年前或下宿屋のおかみさんが息子のやうな若い下宿人と通じ、それから刄傷事件が持ち上つたといふ話を聞いたことがある」といふことをスラスラと話した。この話は時々思ひ出すことがあつたといふし(例へば妹から或洋服屋の後家さんが下宿人と關係したといふ話を聞いた時)又前に刄傷事件、刄物に關係ある事を話した際には何かもつと聞いたことがあるやうな氣がしたといふが、「何となく」話せなかつたさうである。而してその理由として患者の擧げる所を拾つてみると「その事件は騷ぎは大きかつたが傷は大したものぢやなかつたので大切なことではないと思つてゐた。」

「自分に關係の無いことだから話さなくともよいと思つた。」「私は口下手で、思ふやうに話ができぬ。」等と言つてゐるが、患者の場合に之等の理由が正當なものであるか否かは説明するまででもあるまい。かくの如く分析者の前では幾多の機會があつたにも係らず思ひ付かないといふのは、分析者に對する無意識的抵抗の現れであり、更に之はそれを屁理窟によつて合理化せんとする態度と共に、分析の際に常に現れる現象の最も解り易い一例である。

尙分析開始後、會見の際に於ける患者の態度動作に現れた變化に就いて一言したい。最初の毅然とした打ち解け難い態度はかなり永く續いた。所が性生活の話をした後は、極めて徐々にではあるが、その態度が極めて koketisch になつて來た。例へば甘へるやうな口調で話したり、流し目を使つたり、袂で口もとを蔽うたり、妙に身體をくねらせたり、その樣恰も處女のはにかみにも似てゐる。この變化と前後して「先生のお話を聞いてると胸がスーッと輕くなつて行く」とか「こゝに來るのが樂みだ」とか（分析者から獨立せねばならんとの說明に對し）「さう言はれてガッカリした」とか言ひ、分析者を過度に信頼する傾向を著明に示すやうになつた。之等の現象は感情轉移愛（Übertragungsliebe）の强きことを示すものであり、如何に患者にそれを說明してやつても理解されないらしく、之は最後まで揚棄されずにしまつた。

IV. 考　　按

1.　症候の起源及び解釋

先づ刄物恐怖症から始めよう。病歴の示す所によると刄物恐怖症の萠芽が現れたのは早くとも夫の死後である。之が海軍兵上りの男の事件により强められ、更に娘に關した戀愛事件によつて病的と言ひ得る程著明なものとなつて來た。卽ち患者は緊急缺くべからざる品物でありながら、そして患者は買ひたいものはサッサと買つてしまふ性質でありながら、「何となく」嫌な爲に買ふ氣にならなかつたことは確に病的制止(Hemmung)と言ひ得る。出刄を買つたことは症狀强化の動機(量的方面)にはなるが症候の起源(質的方面)を考察することに對しては大なる貢献をなすものではない。この起源と前出の症狀の特徵等とを照合する時は、刄物恐怖症は患者の性生活と密接な關係があるやうに思はれる。乃ち次のやうな假定が必然的に湧き上つて來る。患者は性的願望（狹義の）を滿足させる道を塞がれてゐる。のみならず月經閉止といふ第二の生理的な運命に遭遇した。（月經閉止期にこの慾望が盛になることは周知の事實である。）他方患者には性的なものを極度に忌避する傾向がある。この傾向が如何にして生じたかは後に詳論するが、之は人間の無意識的精神界に於ける良心的なるもの、卽

ち上位自我（Über-Ich）から來てゐるものである。本能的衝動と上位自我との軋轢から良心不安（Gewissensangst）が生ずる。患者は之を無意識の中に感ずる（內知覺、innere Wahrnehmung)が、それを防衛する手段として內知覺を外知覺(äussere Wahrnehmung）に變更した。男性恐怖はかうして出來上つたものである。卽ち患者は男を欲するが故に――欲することが良心の苛責を受くるが故に――男が怖いのである。患者が怖れてゐるものは實は內心の慾望なのである。內知覺を外知覺として知覺することを投影（Projektion）といふ。投影の機制によつて發病の準備[3]は完成したといふべきである。然り、患者の心境が男性恐怖に止つてゐる間は臆病になつた（男性の侵入を恐れた）に過ぎない。下宿人から要求されるに及んで抑壓されてゐた衝動は刺戟され、その結果は漸く病的性質を帶びるに至つた。刄物に對する警戒が增したことがそれである。娘に關する戀愛事件は、患者も亦下宿人と戀愛關係に陷り易い心境にある（娘と同じく）ことを考へるならば、患者にとつて他人事とは思はれない出來事である。（或下宿屋のおかみさん云々の話に非常に抑壓を加へたことを想起せよ。）乃ちこの事件は前の事件と同じ意味を有つものである。こゝに至つて軋轢は遂に發火點に達し、「症候」が現れて來た。然らば刄物恐怖症は如何に解されるか。「刄物」は何の變裝なのであらうか。

男性に對する愛慾の中心は、本例の如く結婚生活を經て來た者にとつては、その Genitalien に對する渴望である。患者が「男性の Genitalien をその形のまゝで欲した」と明言してゐることは之を裏書する。とすれば Genitalien 恐怖もあり得る筈である。患者が總ての（男性、女性、動物の）Genitalien に對し特に敏感になつたことは明かに男性恐怖[4]の發生と同一機制をとるものと考へられる。他方現在の症候群に於いて、男性と刄物とが不離の關係にあること、刄物の中でも特に突く性質を帶びたもの（出刄)が最も怖いこと、殊に男の腰の高さに刄物の强迫像を見たこと等を併せ考へる時は刄物を男性々器の象徵（Symbol）と考へたい。從つて刄物で危害を加へることは coitus の象徵であり、血は Sekret の意味を有つことになる。要約すれば、患者は男性の性器を欲するがこの慾望は、男性思慕が男性恐怖となつて現れたと同一筆法によつて、

3）敢て準備といふ。蓋し症狀と稱する爲には恐怖の對象も亦變裝される必要があるからである。(Freud, S. : Hemmung, Symptom und Augst. Ges. Schr. Bd. XI, S. 41.)

4）性器に對してはむしろ「嫌忌」と言つた方がいゝかも知れぬ。しかし神經症の場合には恐怖と嫌忌との境が明瞭でない場合が多く、又發生の機制から言つても兩者は全く同一であることが多いから、こゝでは恐怖＝嫌忌として取扱つておく。Phobie と言つておけばこんな斷り書をしなくともすむんだが。

性器恐怖として現れると同時に更に象徴化の機制によつて刄物恐怖症として現れたものと解釋される。患者が斬られること、或は血を恐れたといふのも、實は「斬る」或は血によつて象徴されてゐるものを恐れたに他ならない。「他人を傷けはしまいか」と怖れたことに對する説明は後に讓る。

動物恐怖症に於いては、患者は動物に對してさへも慾望を有することを示すものでこの恐怖症の解釋は刄物恐怖症の場合と全く同一である。たゞ刄物恐怖症の際の機制は象徴化であつたが、動物恐怖症にあつては代理形成 (Ersatzbildung) と謂ふ方がいゝ。こゝで犬恐怖症に就いて附加しておきたい一事がある。最初の症候は單に犬が嫌だといふのであつたが、次第にそれが「犬が羽織袴で家の中に入つて來はしまいか」とか「自分の顔が犬のやうになりはしまいか」とかいふ内容を持つ嫌忌に變つて行つた。之に就いては次のやうな解釋が下される。犬に對して性的願望を有つことは、謂はゞ身分が違ひ過ぎる非難がある。之を防ぐには犬の身分を人間にまで昇格させるか自分を犬に下落させるかすればいゝ。かういふ企圖の下に以上のやうな内容を有つに至つたのである、と。分析學で謂ふ「本能代表者が抑壓によつて意識界の影響から除外されてゐる場合には……無意識界に在つて系統立てられ、子孫を作り……謂はゞ暗闇の中で繁殖して途方も無い表現形をとる[5]」場合の興味深き一例である。

以上の想定によつて「人に斬られはしまいか」とか「犬が羽織袴で家に入つて來はしまいか」とかいふ極めて稀な、或は全然無い可能性に對し、それを大きな可能性であるかの如くに恐怖することの説明が得られた。可能性はやはり大きいのである。但しそれは實在的危險 (reale Gefahr) の可能性ではなく、性的危險といふ内在的危險 (innere Gefahr) のそれである。

本例に於いてはその他種々の恐怖症があるが、之等は一括して言へば危險な事態に對する恐怖症である。主症狀たる刄物恐怖症が以上の如く解釋された後に於いてその他の恐怖症を觀る時は「刄物による危險」が「一般危險」へ移動 (verschieben) して行つたとの感が深い。原因に關係の深い症狀が關係の淺いものへ移動して行くことは症候形成の際に屢々見られる所であり、現に犬恐怖症の際にそれが著明に見られる。例へば「犬に前脚をかけられはしまいか」との恐怖はその起源が原因に深い關係を有つことを容易に洞察せしめるが、犬の足跡を見るのも嫌だとなつては、原因の何物たるかを看破することができぬ。しかし一般危險恐怖症が、移動だけで説明し盡されるか否かは後に詳論する。

5) Freud, S.: Die Verdrängung. (Ges. Schr. Bd. V, S. 469.)

次に恐怖症以外の症狀に就いて述べよう。先づ出刄を買つた翌日、その出刄の形を思ひ出した時に足の方からのぼせて來るやうな氣持になり、思はず後に反つてしまつたといふが、その時の氣持を詳しく聞いてみると「腿の邊から熱くなつて來るやうに感じた」と言ひ、又「その時の氣持は犬に縋られはしまいかと思つた時の氣持と同じである」と答へたことや、更に出刄の意味を綜合してみると、この後弓反張は coitus の際の姿勢の象徵化されたもの、即ちヒステリー弓 (arc de cercle) と解釋される。蛸を食べた後の症候群に就いては之等の症狀が不安神經症の症候群に或程度まで一致すること、而してそれは coitus の際の身體現象を模倣してゐると解釋されること[6]から、蛸も亦刄物と同樣の象徵の意味を有ち、全體としては刄物を買つて後方に反つたと同樣に解釋されるのではあるまいかと想像される。

2. 夢の解釋

夢の要素の一つ一つを解釋して行くことは餘りに紙數を費ひすし、又さうすることは本稿の主目的ではないから、こゝでは大ザッパな、症候解釋の參考に止める程度の解釋を附しておく。

夢(1) 刄物の意味が解りさへすればこの夢の解釋は易々たるものである。むしろこの夢によつて刄物の意味が確められたと言つた方がいゝかも知れぬ。即ちこの夢の前後の關係から刄物が何を象徵し、「ロを剔る」ことが如何なる行爲を現してゐるかは夢の記錄を見たゞけで解る。尙この夢によつて、患者が如何なる願望を下宿人に對して抱いてゐるかも看取することができる。夢に於いて刄物が Penis の象徵とされることは殆ど定說[7]となつてゐるが、この夢はそれを證據立てるものと言つてもよからう。

この夢をみた日の出來事だけでこの夢を解釋せんとする試みは、その一部を滿足させるに過ぎぬ。少くとも症候解釋に於ける刄物の意味を沒却し、他の夢との關聯を放棄しなければならぬ。

夢(2)(3)(5)(6)(8)(10) 何れも井戶、池、川に自分或は娘或は釣瓶がはまりさうになる所か、はまるまいと努力してゐる夢である。この一聯の夢は大體同じやうな內容のものが頻繁にくり返されてゐるといふ點、及び症候とも關係してゐる所に重要さがある。この解釋は、症候の場合と同じく危險の移動といふことで滿足しておき

6) この詳細は前報に述べた。(當業報、I 卷、106 頁。及び II 卷、60頁。)

7) Freud, S. : Ges. Schr. Bd. III, S. 73 u. Bd. VII, S. 156.

たい。[8] 夢(3)は患者自らこの通りに解釋した。子供がはまるといふのは、自分がはまる(願望充足)のをもう一段歪ませ、自己辯護をしてゐるのだらう。

夢(4) 症候解釋に於ける犬の意味から解釋し得る。一旦お勝手に入つて、茶碗に觸つて(何れも象徴化されてゐる)「惡いことをした」やうな顔をしたといふが、之は當然の結果である。實はこの夢の前半を聞いた時、余は「お勝手に入りさうになつたが入らずに出て行つたんぢやないか」と想像した。蓋し井戸の夢ではさういふ結果になつて居るから。所が實際は既記の通りだ。しかし實際の夢と余の想像とでは本質的に異るものではない。何となれば、してはいけないことを途中で止めたのと、してしまつて後悔したとの差に過ぎないから、企圖或は願望を抱いたといふ點に關しては本質的な差とはならない。

夢(7)(9) 何れも危險に對し恐怖を感ずる夢である。症候に於ける危險の意味をそのまゝ適用すれば之等の夢が理解される。(9)が(8)に續いてみられたことは沼にはまることも階段に壓し潰されることも同一行爲を、手段を變へて現したに過ぎないものだとの解釋に導く。尚階段を上る夢は coitus の象徴であると言はれてゐるが、[9] 患者がこの夢を語つた後で coitus の夢を自由聯想したことは偶然とは言へないかも知れぬ。

夢(11) に就いては後に詳論する。

精神分析學の夢の解釋[10]に於いて最も特徴ある點は夢に意味ありとなし、その意味を實際にみられた夢そのまゝ(夢の顯在內容、manifester Trauminhalt)の蔭に潛んでゐる夢の意想(latente Traumgedanken)に求め、夢は無意識的願望の滿足であるとし、而してこの願望は性的なものであると結論してゐる點である。本例に於ける結果を見るに何れも本說の正當なることを裏書してゐる。但し之は患者の報告した夢の一部であり(全体で約50位報告してゐる)、全體の約 4/5 は此處に掲げたもののやうには解釋し得なかつた。その主な理由は患者は夢の一部をしか覺えてゐてくれないのと、夢に現れた事物に關する聯想が極めて貧弱なのとに因る。例へば最初に報告してくれた夢は「徑5寸位の大きな栗を三つばかり拾つて袂に入れた」といふのであるが、この

---

8) 夢に於いて水に入ることは水から出ることと同じであり、水から出ることは出產の象徵であるから(Freud, S. : Ges. Schr. Bd. III, S. 120; Ges. Schr. Bd. VII, S. 162)、この一聯の夢は出產の夢とも考へられる。しかし本例に於てはさう假定し得る、他の有力な根據が見つからぬ。

9) Freud, S. : Ges. Schr. Bd. VII, S. 158.

10) Freud, S. : Die Traumdeutung. (Ges. Schr. Bd. II) ; Ergänzungen zur Traumdeutung. (Ges. Schr. Bd. III) ; Der Traum. (Ges. Schr. Bd. VII, S. 79).

日患者は妹が流産したのを見舞に行つてる。尙病歷によつて患者は前に3人の子供を死産で或は分娩後直ちになくして居り、當時「丈夫な子供が欲しい」と願つたといふことが判つてゐる。現存してゐる子供は3人であるが、之等の事情と徑5寸位（卽ち兒頭大）の栗を三つばかり拾つたといふ夢の內容とから、この夢は分娩に關係あるやうに想像されるが、聯想が不充分な爲に確實な根據を以て假定することができぬ。[11]解釋し得なかつた多數の夢はすべてこの類である。解釋の根據を集め得なかつたことは技術の未熟に歸すべきか、或は患者が分析に適しなかつた爲であるか、或は又夢の解釋を企てることが抑も無理な試みであるのかは今後の經驗が裁決してくれるであらう。

3. リビドー生活

a) 理論の部[12]

フロイド自身でも白状して居る如く、分析學に於ける「本能論は謂はば我々の神話學である」。[13]しかし神經症の理解を深く進めたいと希ふ者にとつては、この神話學にも均しい分析學的本能論から多くの知識を借りて來なければならぬのが現狀である。殊に本例の如く、性生活が疾病の構造に重大な意味を有つと思はれる場合にこの感が深い。分析學に於ける本能論は一種特異なもので、それを解說すること無くしては本病の構造を說明することが困難だから、本例に就いてそのリビドー生活（本能生活）を考察する前に蛇足ながら分析學的本能論の一部を摘記して置かう。

最初に性本能を分析學は如何に解釋してゐるかを述べよう。分析學以外の考へ方に

---

11) 他の二三の夢で、息子や娘が川等に入つた所をみてゐるが、之等は分析學上の定說によつて分娩或は出產の夢らしく想像され、又同一人の夢はそれが當人に完全に理解されない限り同一の意味をくり返すものであると言はれてゐる (Ges. Schr. Bd. VI, S. 49.) から、之等を綜合して根據を作り上げることも可能であるが當分余はさうすることを差控へたい。

12) **Freud, S.** : Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. (Ges. Schr. Bd. V) ; Angst und Triebleben. (Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse); Die Weiblichkeit. (Neue Folge der Vorlesungen.) ; Charakter und Analerotik. (Ges. Schr. Bd. V.; Die Disposition zur Zwangsneurose. (Ges. Schr. Bd. V) ; Die infantile Sexualorganisation. (Ges. Schr. Bd. V) ; Der Untergang des Ödipuskomplexes. (Ges. Schr. Bd. V).

Abraham, K. : Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido. (Internat. Psa. Verlag).

Fenichel, O. : Hysterien und Zwangsneurosen. (Internat. Psa. Verlag).

13) **Freud, S.** : Neue Folge der Vorlesungen. S. 131.

よれば之は兩性の生殖細胞の結合を終局の目標とし、目前の目標としては性感と呼ばれる一種の快感を求めんとする努力と解されてゐるが、かくの如き終局の目的を有しないものでも性慾と呼ばれてゐるものがある。變態性慾がそれである。又生殖細胞の結合を目標とする行爲であつても、之には多くの準備的行爲[14]――その際の快感を前快感(Vorlust)といふ――が前驅し、之等も亦「性的」なる名を冠せられてゐる。こゝに於いて之等のものをも含めて性本能を定義するとなると之はさう簡單には行かなくなる。分析學に於ける性本能の解釋は、この擴張された意味に於いてなされるもので從つて一言には言ひ盡せぬ。しかし强ひて言ひ現せば、「普通の意味の性的快感は勿論、前快感及び變態性慾者の性感をも含むが如き一種の快感を求めんとする傾向」とでも解すべきか。

かくの如き解釋によつて種々の新說が生れて來る。第一には小兒にも性慾ありといふ說で、例へば乳兒が母の乳房に對する態度の如き(おしやぶり、玩弄、滿足の後の催眠等)は成人の正常の性行爲の場合に彷彿たるものがあり、破壞を好む幼兒の樂みはサヂストの快感を想はせ、學齡期に近い男兒、女兒の態度には旣に性別によつて對象愛を異にするのが見られる等のことは、廣義に解した場合の性本能の現れとされるのである。第二には吾人の一擧一動と雖も性的意義を有ち得るといふのである。例へば吾人が物を見るのは生存上必要な行爲であるが、他方、性的對象を眺めて樂むといふこともあり得る。觸ること然り、筋肉を動かすことも亦さうである。こゝに於いて成分本能(Partialtriebe)、器官性感(Organlust)、性感部位(erogene Zone)等の術語が生れて來る。卽ち吾人の各器官は比較的獨立した立場に於いて夫々の性感(器官性感)を有ち得るものであり、かゝる場合には各器官が性感部位として役立ち、器官性感以外にも存する前快感追求の傾向は成分本能と稱せられるのである。之等の術語を新作したこと――といふよりもむしろかういふ術語を作らねばならぬやうな考へ方――は精神分析學の根本的な特徵であり、分析學の正統派によつて死守せられてゐる所である。

扨て小兒性慾と成分本能とが認められたが、之等の諸性慾を整理し、統一された體系に作り上げる道は無いものであらうか。この企ては未だ完全には行はれて居らぬ。卽ち成分本能の多くのものが未整理のまゝ殘されてゐる。しかし次に述べることだけは旣に確實な根據を以て想定されてゐる。我々が生れてから大人になるまでの身體的諸變化に伴つて、性感を獲る手段と對象とが變つて來る。如何なる種類の性感が或

14) 變態性慾といふも正常性慾に於ける準備的のものといふも質的な差は無い。前者は後者の一或は數箇が異常に誇張されたものである。

發達時期に於いて王座を占めて居るかによつて、その時の性的編成(Sexualorganisation)の模様が特徴づけられるわけであるが、普通誰もが經過する時期として次の數箇が認められてゐる。

1) 口器統裁期 (Orale Phase)

2) 肛門・サヂスムス統裁期 (Anal-Sadistische Phase)

3) 男根統裁期[15] (Phallische Phase)

4) 性器統裁期[15] (Genitale Phase)

この第一期は乳兒及びその直後に於ける性的活動の時期で、おしやぶり、滿腹でありながら乳房に縋らんとする態度、滿足の後の催眠、嚙ることの興味等の事實から唇、齒乃至口腔が性感部位の役目を演ずると考へらるゝに至つたのである。換言すれば口器性感が統裁してゐる性的編成期である。この第一期の名殘は成人に於いても唇或は口腔が性愛の技巧の一つとして用ひられる場合、或は可愛い者を嚙つてしまひたい衝動に驅られる場合等に見られる。變態性慾者、變質者、精神病者に於いてはこの衝動が實行となつて現れることがある。しかし口器統裁期(その他の編成期に就いても同樣であるが)を想定するもつと大きな動機は他に在る。それは吾人の諸種の心理現象(正常的にまれ病的にまれ)を之等の編成期に關係せしめて說明せんとする試みであり、之亦精神分析學の大きな特徵となつてゐる。之が果して正しいものであるか否かは充分吟味すべき價値あるものであり、本稿の目的の大半も其處に存するのであるが、順序として定說を紹介して行かう。先づ口器統裁期に就いて言へば、吾人の心理現象としての攝取 (Introjektion)、例へば模倣であるとか新知識の獲得であるとか貪慾であるとかは口器の機能たる攝取の轉化したものであるとの說明である。病的現象としては鬱憂症 (Melancholie) の發生過程が攝取に基いてゐるとの說明がある。[16]

第2期はその後の身體的發達に伴つて起る編成期である。卽ち幼兒期に入つて肛門括約筋が發達して來ると子供は排便を拒むことに興味を覺えて來る。この排便を拒むのは恐らく糞塊が直腸の後端の粘膜を刺戟することに一種の快感を覺える爲だらう、又溜めておいて一時に排泄するのは肛門に同樣な快感を與へるからであらうと想像される。卽ち肛門が一つの性感部位となり、肛門性感を享樂する爲に子供はかゝる行爲

---

15) この第3期及び第4期を一括して性器統裁期とし、前者を前期の性器統裁期 (Frühe genitale Phase) 又は幼兒的性器統裁期 (infantile genitale Phase)、後者を最終的性器統裁期 (Endgültige genitale Phase) と稱することもある。性器統裁期に對し第1期及び第2期を性器統裁期以前の編成期 (Prägenitale Organisationsstufe) と總稱する。

16) 鬱憂症に於ける攝取過程の實例に就いては別載丸井敎授の論文參照。

第3期は男性の性器だけ、卽ち女性に於いては Klitoris 或は架空的な Penis が性的編成の牛耳を握つてゐる時期である。幼兒が Onanie を行ふことは我々の日常目撃する所であるが、之は明かに性器に於ける性感と稱して差支ないものであらう。しかし成熟した場合のそれとは異り、未だ女性性器が承認を受けてゐない。といふのは男兒は未だ女性々器の存在を信せず、女兒も亦やがて男兒の如くに成長するであらうとの期待を棄てない。謂はゞこの時期にあつては心理的には男女の區別が無く、性器亢奮の模樣から言へば何れも男性である。やがて兩種の性器があることが彼等に判つて來るとこゝに去勢コンプレックス (Kastrationskomplex) が生ずる。卽ち男兒に於いてはそれまで Onanie 或は遺尿に際して去勢を以て脅かされてゐたものが、女性の性器を認識することによつて威嚇を事實として確信するに至り、Penis を失ひはしまいかとの不安、所謂去勢不安(Kastrationsangst)が生じ、女兒に於いてはそれが、男兒に比しての劣等感から男兒の如くありたいとの羨望(Penisneid) となつて現れて來る。之等去勢不安或は男根羨望の强さは Penis 評價の高さに比例するものであり、前者の意義が深ければ深い程第3期の想定が重要になつて來る。然らばこの去勢不安或は男根羨望は如何なる意味を有つものであらうか。去勢不安に就いては前報[18]に詳論したし、又本例は婦人患者であるから、こゝでは男根羨望を主として述べることにする。女兒に於ける男根羨望は實際子供を觀察することによつて確められる事實である。我々は日常屢々「私もあゝいふのが欲しい」と口に出していふ女の子さへ目撃する。精神分析の病歴では幼時の體驗として、或は幼時の空想として、性的惡戯に於いて男兒の役目を演じてゐる婦人を經驗してゐる。かういふ子供はよく男の兒の眞似(遊戯或は服裝など)もしたがるものである。してみると女兒の男兒模倣は彼女の男根羨望から來てゐると考へられないこともない。之を推し進めれば、男子模倣を以て女權擴張なりと信じてゐる婦人連の運動もその根元は男根羨望にありと言ふこともできる。かくの如き、男性たらんとするが如き無意識的存在を婦人の男性化コンプレックス (Männlichkeitskomplex) といふ。男根羨望の一つの結果である。之と反對に女なるが故に劣等なりと觀念し、徒に萎縮してしまふ女性もある。之を去勢コンプレックスに因る神經症的反應(neurotische Reaktion) といふ。正常の反應たる女性が男性を思慕する過程も精神分析學では男根羨望に結びつけて考へてゐる。精神分析上の經驗が主として示した所によれば、異性に對して特別な愛情を覺えるのは旣に幼時に始まるといふ。之は男兒に於いて特に著明であつて、母の愛を獨占せんとし、母を愛せんとする父を敵視する態度となつて現れ

18) 早坂(長):當業報、第II卷、64—66頁。

る。之をエヂプス三角關係 (Ödipussituation) といふ。女兒に於いても母に代つて父を愛し、母を排せんとする態度が見られる(之をエレクトラ三角關係ともいふが、普通エヂプスの名に含めておく。)が、女兒に於いては最初からさういふ態度を示すものではない。卽ち女兒も亦最初は母を愛慾の對象にとる。之は授乳、その他女兒の愛慾を滿足させてくれるものは母であるのによる。この時期は分析學上エヂプス前期 (prädipale Phase) と呼ばれ、この時期に固定を殘してゐる症例も報告されてゐる。扨てか程まで母に愛着してゐる女兒が母を離れ父に向つて行くには共處に女兒獨特の動機が無ければならない。この動機を分析的經驗に基いて求めて行くと、豫期したことながら女兒の去勢コンプレックスに存することが解つたのである。卽ち男根期に於いて女性々器を貶し、男性々器に羨望を感ずることが、母からの離反と父への愛着との動機となると考へらるゝに至つたのである。かくして女兒に於いては去勢コンプレックスの結果としてエヂプス關係に入つて行く。換言すればエヂプス期は男根期の末期に相當することになる。(男兒に於いては男根期がエヂプス期のクライマックスであり[19]、去勢不安によつてエヂプス關係が凋落の途につく。) 尙婦人の子供を有ちたいとの願望も、子供は男性々器の象徵であるとの持論を以て說明されてゐる。かく考へ來る時は、去勢コンプレックスは精神分析學の根底をなす假定であると言つてもいゝ[20]。こゝに第3期想定の非常な重要さがある。

第3期を過ぎて最終階梯たる性器的編成期に入る迄の間には潛伏期 (Latenzperiode) と言つて性的傾向を露骨には現さない時期がある。この期間は環境その他の影響によつて非常に差があるが、大體 7~8 歲から思春期までと稱せられてゐる。潛伏期を生ぜしめる動機は勿論兩親その他の者の感化であるが、之を術語で言ひ現せば上位自我が發達するからである。上位自我は如何にして發達するかといふに、男兒に於いては之も亦去勢コンプレックスに關係して說明される。卽ち去勢不安の爲に男兒は性的なことを放棄するに至るのである。女兒に於いては去勢不安が無いから甚だ說明がしにくゝなつて來るが、今の所愛情喪失の不安 (Liebesverlustangst)、卽ち保護者から愛して貰へないことを怖れる最も幼稚な不安を以て說明されてゐる。かくの如く女兒に於いては性的なことを禁止すべき有力な動機が缺けてゐる。之が女性をして永く性の羈絆から脫却せしめないでおく原因であり、潛伏期に入つても、男兒と異り、脫性化 (Desexualisierung) の能力低く、年長の男性に對して媚惑的な態度を示し(無邪氣な

19) Fenichel, O. : l. c. S. 19.

20) 尤も男根羨望說の一部はフロイド自身でも不完全なことを認めてゐるが。(Neue Folge der Vorlesungen. S. 188; Ges. Schr. Bd. V, S. 429.)

形、甘へるといつた程度のものであらうが）所謂感傷愛（Zärtlichkeit）として之を思春期までも持ち越すのである。感傷愛は目的達成を阻止された（zielgehemmt）エヂプス的衝動であると稱せられる。

思春期に於いてはその指導的性感部位は性器であり、而も女性に於いては Vagina であらねばならぬ。この最終階梯たる性器的編成期に就いては多くを語る必要があるまい。

b） 本例に於ける考察

本例の症狀から、又性格上の特徴から、この患者が口器性感乃至口器統裁期に深い關係を有つとは考へられぬ。

之に反し肛門性感とサヂスムスに就いては論ぜらるべきことが澤山ある。先づ患者は本病發病後人混みの中などで coitus a tergo の感じを持つたと言ひ、犬恐怖症に於いては後から前肢をかけられはしまいか（即ち犬の Begattung の如く）と怖れ、双物を持つた男が後に居るやうな氣がしてならないといふ。即ち性的行爲には「後方から」といふ特徴が結びついてゐることは肛門性感に關係がありさうに思はれる。次に患者の性格に几帳面、吝嗇（節約）、我儘の所謂肛門性格を備へてゐることは、定說によつて肛門性感への固定を想はしめる。又患者は會見を打切る近くに於いて「長男が大便して來た後で其處へ大便しに行くのは、大便と大便とが觸るやうな氣がして嫌だ」といふことを、非常な躊躇の後で「まことにお恥しいことですが」と冒頭して打明けたことがある。患者にとつて長男が性的對象であることは疑の無い所であるが、その對象の一部と糞便を以て觸れ合ふことに、他の性的事象に對すると同樣の態度を以て臨むことは、糞便も亦性的意義を有つてゐると考へられる。とすれば糞便の供給所（と心理的には考へられる）たる肛門にも性感部位たるの役割を負はせてもいゝかも知れない。更に夢（11）に於いて肥料溜から子供が出て來るのは、Scheide と肛門とが混同されてゐるとの解釋を許すかも知れない。

しかし仔細に吟味してみると、夢に肥料溜が現れて來たのは唯一回であり、その他 50 近くの夢に、それらしいのさへ見つからぬといふことは、この夢に於ける糞便を重要視することを躊躇せしめるものである。むしろその他の夢に屢々井戸、池等が現れてゐるから、この夢に現れた肥料溜は單に一つの危險な箇所と考へておきたい。長男が其處に陷ちて再び上つて來たといふ所を分娩に關聯せしめて考へることの可能性に就いては既に詳論した所に從ふ。長男の糞便に自分の糞便が觸るのが嫌だといふことも、他の點で糞便が大きな意味を有つことが證明されてゐる場合ならばいさ知らず

之だけではやはり長男の方が問題なのであつて、それに糞便が結びついて來た契機に就いてはやはり證明の材料が不足だといふより他は無い。(11) の夢といひ長男の糞便が問題となつたことといひ、之等の話題が分析操作の比較的後期に出て來たことはもつと操作を續行したならば證明の材料が集つたかも知れぬとの感を深うせしめる。先を續けよう。性格に肛門性格が見られるといふことから本例に肛門性感への固定を假定することは、目下の余の立場から言へば逆な行き方だ。余は、緒言にも述べた通り、定說を實例によつて吟味したいのであるから、幼兒の肛門性感の事實を證明し、かういふ實例が多數集まつた所で肛門性格成立の說明を吟味してみたいのだ。所が患者が幼時肛門性感者であつたか否かは患者の記憶に無く、又近親者から知る術も無かつた。從つて肛門性格と肛門性感との關係に就いては、本例の關する限り何とも決し兼ねる。最後に「後方から」との特徵であるが、本例に於いてはなる程「後方から」即ち「肛門へ」と考へたい所であるが、coitus a tergo の感じといひ、犬の如き Modus といひ、部位は決して肛門ではなく Vagina である。即ち肛門性感とすべきではなく立派な性器性感である。しかし症狀に於いては部位が明示されず、單に「後方から」となつてゐることは、肛門性感の特徵が現れつゝあるものである。要するに本例に於ける性格或は症候の特徵の上に肛門性感から由來してゐると思はれる現れは、性格中に所謂肛門性格が見出だされたことと、「後方から」といふ點にそれに近い特徵が示されたに過ぎない。

サヂスムスが本例のあらゆる方面に浸潤して居ることは極めて明白な事實である。患者が小い時から所謂「きかない」子であり、長じては好んで刄物を用ひ、子供を嚴しく折檻したりしたことは病歴に明かである。現在の顏貌にも殘忍性を想はせるものがある。症狀の上では coitus を「斬る」といふ象徵で現して居り、又發病直前、戀愛事件といふと眞先に刄傷事件を豫想することは、サヂスムスといふ素質と必然的な因果關係があることを信ぜしめるに充分である。余はこの素質無くんば coitus が殘忍性を帶びた形で現れて來ることは無かつたであらうと考へるものである。[21] 何故サヂスムスがかくも優勢になつたものであらうか。この點に關しては體質 (Konstitution)

---

21) 曾て或下宿屋の主婦が下宿人と通じ刄傷沙汰になつた事件があつたとの追想は、性的なものと刄傷とを結びつける好條件であるが、刄物恐怖症にかういふ追想がつきものだとは考へられないから、この追想を以て本例の動機を說明することには一般性が無い。といつてこの追想が本例に無意味であるといふのではない。むしろ非常に有意義であると考へる。たゞ有意義ならしめた素因としてサヂスムスを認めるのである。謂はゞこの追想はサヂスムスといふ素質と相俟つて重複限定 (Überdeterminierung) の因子をなしてゐると考へるのである。

即ちどうしても說明のつかぬ要素が一役買つてゐることは認めねばならぬが、患者の父が殘忍性を帶びた性格の持主であつたことを想起すれば（普通之は遺傳と解せられるが、幼兒に及ぼす環境の影響が重大なことを知れば、遺傳だけでは片付けられぬ問題である。）父との同一視（Identifizierung）によつてサヂスムスの優勢を說明する可能性も生ずる。何故父との同一視が起つたか、之とエヂプス・コンプレックスや去勢コンプレックスとの關係はどうなるか等問題は百出して來るが、この邊の所は余の知識も經驗も貧弱であり、もつと研究を積んだ上で改めてとり上げて論じてみたい。

第三に本例に於ける男根統裁期を見よう。患者は 13～4 歲の頃女友人の性器を見て「みつともない」と感じたといふ記憶を存してゐる。この考は今でも有つてゐる。だから娘にも極力隱すやうに注意するが、娘はそれを守らないので憎らしくなるといふ。他方男性々器に對しては、その佯らざる告白に於いては「その形のまゝで欲した」と述べ、小兒期には性的惡戲に於いて女友達を相手として aktiv な役割を演じたといふ。之等は患者が幼時男根期的享樂に耽り、長じて尙それを棄てないことを現すものとして疑ふ餘地無き所である。尙病氣の經過中恐怖症の內容に變化が起り「刄物を以て人を傷けたい」衝動に驅られると共に「さういふことがあつたら大變だ」と恐れるやうになつたといふが、この恐怖症の內容を象徵されない形で言ひ現せば「Penis を以て aktiv な役割を演じたい」「演じたら大變だ」となり、こゝにも定型的な男根羨望の現れを見るのである。本例に於いて男根統裁期を假定することは、恐怖症の中心を說明する手段として缺くべからざるもののやうに思はれる。

次にエヂプス・コンプレックスは如何。患者の記憶によればやゝ長じても父に對し恐怖を感じ、母に對し愛情を示してゐたやうである。しかしその他の血族姦關係（Inzestsituation）[22] に於いては positiv な關係を示してゐるやうである。しかし之も仔細に檢してみると果して眞の血族姦的體驗――即ち性別による愛慾から發した行爲――と言へるか否か疑問である。何となれば患者は他の女友人との間にも性的惡戲を行つてゐるから、單に性器に於ける性感を享樂する爲のものであり、即ち男根期的行爲とも考へ得るからである。もし友人との同性姦的行爲に失望して兄弟を擇ぶやうになつたといふことが病歷に於いて明かに示されて居れば、この血族姦的行爲が大いに意味ある（「女兒は去勢コンプレックスの結果としてエヂプス關係に入つて行く」との假定を實證する上に於いても）ものになつて來るが、本例に於いてはこの間の事情が全く不明

22） エヂプス關係と雖も一つの血族姦關係である。しかし普通後者は前者を除外したもの、即ち主として同胞間の關係をいふ。この意味に於ける血族姦關係の神經症成立に對する意義は勿論エヂプス關係と同一である。

である。(こゝにも患者が餘りに老年であるとの憾が深い。) 從つてエヂプス・コンプレックス乃至血族姦コンプレックスの證明は後年の愛情關係から間接的に求めるより他は無い。

本患者は所謂「男嫌ひ」であつた。思春期に入つて尙異性に對し嫌忌の情を以て臨むことは正常の現象とは言へぬ。余は之は(患者は同性愛者でもないやうだから)反動であると觀る。卽ち幼時に性的活動が旺であつた結果、潛伏期に入るに及んで反動的にその活動に對する嫌忌感を生じたものと考へるのである。本例に於いては、なる程幼時の性的活動は兩性的であつた。しかし結果から觀る時は、その中の男性的活動が克服せられ、女性的活動だけに統制せられ、それが意味を有つに至つたものと考へざるを得ない。不明なのは男性的活動が克服される過程だけである。患者が結婚生活に於いて消極的であつたことも「男嫌ひ」と同樣に解釋される。殊に夫といふものは極めて近親な關係を有つものであり、この意味で第二の父、第二の兄として心裡に存するものである[23] (殊に本例に於いては父も短氣、夫も短氣であつたから兩者は同一視され易い) から、結婚生活に於いて消極的であつたことはエヂプス・コンプレックスの反動的表現として考へるのに好都合である。尙夫の死後現在の土地に歸つて來て第一に感じたことは血族の者が總て患者に對して冷淡であるとの印象であつた。にも係らず患者の本心を聞いてみると、怨む氣持は母、妹、弟嫁に對してのみ向けられ、弟に對しては寬大な態度を示してゐる。之エヂプス三角關係乃至血族姦的關係の名殘でなくて何であらう。發病前後に於ける男性恐怖は、謂はゞ「男嫌ひ」の病的に誇張されたものである。就中長男に對する心的態度は、血族姦コンプレックスの病的復活である。かくの如く本例に於いては、幼時に於けるエヂプス關係成立の模樣は不明であるが、後年の愛情關係からすれば、エヂプス・コプレックス乃至血族姦コンプレックスが未だ解消されず、而もそれが病因として大いに意味あることを知るのである。

本例に於ける潛伏期は比較的截然としてゐる。卽ち 12~3 歲の頃性的事象に對して嫌忌感を生じて居たことは、それまで性器的(男根期的及び最終期的)生活に耽つてゐたことに對し著しい對照を示すものである。かくの如き事實を反動形成 (Reaktionsbildung) といふ。而も本例に於いては性格の上にまでそれが現れてゐることは注目に價する。しかし結果は反動形成に止り、昇華 (Sublimierung) 乃至脫性化 (Desexualisierung) に至つて居ない。之は何に由るのだらう。やはり女性に於ける去勢不安の缺如──男性に於ける去勢不安の重要さも、余には尙疑問なのであるが──に歸すべ

23) 我國の古語でも「いもせ」といふではないか。

きであらうか。之等の問題に就いては多數の經驗を俟つて改めて吟味することにする。

患者の性慾が最終的性器統裁期にまで發達してゐることは明かである。患者の性生活はそれを證明する。女性のこの階梯に於ける特徴は受動性 (Passivität) を示すことであるが、症候發現の最初「刄物を以て斬られはしまいか」「危害を蒙りはしまいか」「動物に何かされはしまいか」と恐れたことはまだこの特徴を保存して居るものと言へる。arc de cercle が變裝された coitus の受動的行爲の表現であると解されたこと、種々の身體症狀が不安神經症の症候群――それも arc de cercle と同義に解される――の一部らしいことは、本例が最終的階梯まで發達したリビドーによつて成立したものであることを證明する助けとなる。

4) 病名並に本病の構造

本病の最も原始的な解釋は、負因者(患者の父系からも母系からも精神病者を出してゐる。) に來た强迫神經症であるとなすことだらう。しかしそれは本病の構造を論じたものでなく、事實を記載したに過ぎぬ。近代の神經症の病理學は、因より果に至る道程を記載するよりは、其處に行はるゝ力學的關係 (Dynamik) を論じ、それによつて生ずる心的局所關係 (Topik) と力の量的關係 (Ökonomik) とを觀察することに重點を置き、以て疾病の構造を益々纎細に益々有機的に解釋しようと努むるに至つた。精神分析學では、精神々經症卽ち精神性に成立する神經症 (Psychoneurose) の成因を次のやうに考へてゐる。[24]

神經症の原因＝リビドー固定による素因＋偶發的 (外傷的) 體驗[25]

（リビドー固定による素因＝）性的體質 (有史前の體驗)＋幼時の體驗

卽ち或人が心的外傷を受けると種々の反應を起して來るがその反應の模樣は一に性格その他の素因に關つてゐる。然らばその素因は如何にして生じたかといふにその一部は確かに先天性のもの (體質) によるだらう。しかし先天性のものと限られたわけではなく、その人の生活史を幼時まで遡つて調べてみると後天性の要素を看過することができぬ。更にその後天性のものを詳しく調べてみると、その後半は幼時の體驗の反復或は反動 (勿論兩者の混合或は移行が多いであらうが) に他ならぬことを知るのである。卽ち之まで普通素因と考へられてゐたものの中には、實は結果が混つてゐた

24) Freud, S. : Ges. Schr. Bd. VII, S. 376.

25) 外傷といふと瞬間的に働いたものをいふやうに聞えるが、こゝでいふ外傷とは人生の行路に橫はる障碍物といふが如き廣義のものである。

ことになる。この混入物を除去してみると、素因としては先天性のものと幼時の體驗とだけしか殘らぬことが判る。幼時の生活史の何處までが先天性のもので出來上つたものか、どこまでを後天性のものに歸すべきであるかは到底分析し得ない所であり、こゝに兩者を合したものを素因として考ふるに至つた。分析學上の經驗によると、神經症の際の心的外傷は總て性的事件（少くとも性的な事に還元し得る事件）である。從つて幼時の體驗に於いても性的體驗が重要視される。詳しく言へば、前章に述べた如く、吾人は幼時に種々の性的編成期を經て來るが、その中の或時期が當人にとつて特に快適であつた場合には（特に快適ならしめる條件は先天性のものと後天性のものとに係つてゐる）その人は永くその階梯に止るか、或は一旦其處を立ち去つても何か不快な事件に遭遇すると再び其處に戻つて來易い危險に曝されてるわけである。かくの如き場合にはその人はその階梯に「固定してゐる」(fixiert) と言ひ、その階梯を固定點 (Fixationsstelle) といふ。かくして外傷によつてリビドーが當面の事件を離れた場合には、幼兒的な手段によつて滿足を得ようとし、症候の上に種々の固定點の特徴を現すやうになる。この過程を退行 (Regression) と名づく。かういふ考へ方に基いて前記の如き公式が生じて來たのである。素因の中に後天性のものをも算へ入れたことは神經症の豫防として幼時の教育（環境の影響）を重要視せしめるものであり、分析學の一つの大きな貢献である。

扨て素因をかく考へ來れば、神經症の病名は素因の如何によつて命名することが最も合理的である。之に關しては經驗上躁鬱病は口器統裁期に、强迫神經症は肛門・サヂスムス期に、ヒステリーは性器統裁期（詳しく言へば男根期に屬するエヂプス・コンプレックス[26]）に固定があるとの結論が得られてゐる。

こゝに謂ふヒステリーとは、精神的苦惱が身體的苦惱に轉換したと考へらるゝ轉換ヒステリー (Konversionshysterie) と、身體症狀を發する代りに不安を生じて來る不安ヒステリー (Angsthysterie) との二つを指すのであるが、前者はしばらく措き、不安ヒステリーに就いて少しく述べておかなければならぬことがある。抑も不安ヒステリーとは恐怖症の或場合に附せられた精神分析學的病名であり、それが神經症列に於ける位置は强迫神經症に屬せずしてヒステリーに屬するものとせられてゐる。その根據は如何。それを論ずる代りに强迫神經症及びヒステリーの特質[27]を列擧しよう。先づ兩者共その症候は本能の活動と之を抑壓する力との精神軋轢から來る妥協產物である。妥協であるが故に本能活動の滿足の現れ（但し變裝されての）も見られるし、懲罰、防

26) Fenichel, O. : l. c. S. 21.
27) Fenichel, O. : l. c. S. 101–108.

衛、贖罪等の意味も加味されてゐる。しかし兩神經症は次の諸點に於いて異つてゐる。

1) 抑壓されて症候を形作つてゐる表象內容は、强迫神經症に於いては意識されてゐる。例へば Onanie から强迫神經症となつた場合でも Onanie をやつたといふ記憶を立派に存してゐる。たゞ Onanie に關する表象が症候に變つたのだといふことが意識されないだけのことだ。之に反しヒステリーでは表象內容が意識の埒外に追はれてゐる。例へば性的慾望に燃えてゐるといふことが當人には氣付かれてゐないのだ。この意識範圍が强迫神經症では廣く、ヒステリーでは狹いといふことが兩者の一つの重要な差である。

2) 前に症候は妥協の產物であると言つたが、この妥協成立に際して强迫神經症では防衛、贖罪の意味が强いが、ヒステリーでは滿足の意味が濃い。例へば洗滌强迫は惡心に對する淨めと解釋されるし、ヒステリー弓は coitus の遂行を意味する。

3) 例へば同じく强迫性恐怖といつても、ヒステリーの場合には外部から危害が加はりはしまいかと恐れるに反し、强迫神經症ならばさういふ危害を自分が他人に加へはしまいかと恐れる。卽ち强迫神經症に於ける恐怖の對象は外部に存するのではなく內部に存する。勿論無意識界に立入つて考へれば、ヒステリーも亦內在的危險を恐れるのであるが、症候の上では外物恐怖である。(こゝにも意識範圍の廣さが關聯して來る。) かくの如く症候が內部の過程に關して起つてゐる場合を**フェニッヘル**は「內攻」(Verinnerlichung) と呼んでゐる。內攻が大きいことは上位自我が或意味に於いて强く働いてゐることを現す。2) に述べた贖罪の意味が强いこともさうである。この上位自我の役目が顯著に現れてゐるといふことも强迫神經症をヒステリーから區別する重要な手懸である。

4) ヒステリーの症候は懲罰であると同時に滿足である(例へばヒステリー弓)。强迫神經症では、滿足を意味する症候と贖罪を意味する症候とが交互に速かに現れて來る。本例の如く「斬りたい」衝動とそれを防衛する意味の症候とに惱まされる場合はその好例である。强迫神經症に於ける二時性 (Zweizeitigkeit) も亦ヒステリーに於ける同時性 (Gleichzeitigkeit) に對し、兩者の差を認めしむる重要な手段を呈供するものである。

5) しかし何と言つても兩者の根本的な差はその固定點の差に在る。この詳細は前に述べた。

6) 强迫神經症者の性格には反動形成が著明である。卽ち過度に道德的 (übermoralisch) である。ヒステリー患者にも反動形成は見られる。例へば憎い人を却つて愛するが如き。しかしヒステリーの場合には、それは一つの對象に限られてゐるか、或

は短期間に限られてゐる。強迫神經症では「一般の人に對し、永久に優しい人であらう」との、即ち性格上の反動形成である。

7) ヒステリー患者では自由聯想が行はれ易いが、強迫神經症ではそれが困難である。等々。

之等の點を考慮して一般に恐怖症を觀ると、多くの恐怖症は性器的性慾から發するものであり[28]、その他の點に於いてもヒステリーの特徴を多く具へてゐるから、之はヒステリーに屬せしめるのが合理的であるとせらるゝに至つた。こゝに多くの恐怖症に對して不安ヒステリーといふ病名が附せられた根據がある。

扨て本例に於ける双物恐怖症並にその他の恐怖症はヒステリー性のものであらうか強迫神經症に屬するものであらうか。それを決定する爲に、前記の兩者區別の方針に從つて次の諸點を吟味してみよう。

1) 抑壓された表象內容はこの場合には coitus 願望である。患者は「夫戀しい」と思つたとはいふが、再婚などとは考へたことも無いし、まして長男や下宿人を對象としてとは絕對に考へたことが無いといふ。そのくせかなり露骨な夢をみたり、下宿人の Erektion を空想したり、長男に縋りつきたい衝動に驅られたりしてゐる。之等は表象內容が抑壓されてゐることを現す。即ちヒステリーの特徴である。

2) 症候が防衛を多く意味するか、滿足を意味するかといふ點に關しては、恐怖症であるから防衛の意味が強いこと勿論である。この點から言へば強迫神經症の症候と言へるが、滿足、防衛を云々するのは轉換ヒステリーの場合であつて、不安ヒステリーに就いてはこの區別の標準はあてはまらない。

3) 症候の內攻といふ點から言へば、本例の双物恐怖症は「斬られはしまいか」との內容を有つ間がヒステリー性のものであり、「斬りはしまいか」となるに及んで強迫神經症の症狀に變つたものであると言はねばならぬ。動物恐怖症には內攻は見られぬ。

4) 同時性、二時性といふ點でも 3) と同樣のことが言へる。

5) 本例の症候が性器的性慾活動のエネルギーによつて作られてゐることは症候解釋の所で述べた通りである。この點から言へば本例はヒステリーとすべきであるが、問題は危險に關する症候がサヂスムスといふ性器統裁期以前の性慾活動の表現をとつてゐる點である。轉換ヒステリーに於いても嘔吐、便秘等の如く性器統裁期以前の編成期の特徴が現れることがあるが、之等に關しては「性器統裁期の種々の特徵、對象に對

28) Freud, S.: zitiert nach Alexander, F. (Zur Theorie der Zwangsneurose und der Phobie. Internat. Ztschr. f. Psa. Bd. XIII, S. 34.)

する性器的關係（性別があること、兩極性が無いこと、性慾をサヂスムスで解釋してないこと等）が失はれてゐない場合には、性器統裁期以前の階梯への固定は單に症候發生の局所（Lokalisierung）の選擇に資するに過ぎない。過程そのものはあくまでも性器的である。」云々と言はれてゐる。[29] この意見に從つて本例を見れば、患者が性別を固執してゐる限りヒステリーと稱すべきである。實際本例は「斬られはしまいか」との恐怖だけが男性に關し、その他は對象の性を問うてゐない。そして又「斬られはしまいか」との恐怖に關する限り、他の點でもヒステリーの特徴に合致してゐる。之に反し「斬りはしまいか」「危害を加へられはしまいか」「危害を加へはしまいか」との恐怖は强迫神經症の特徴に一致してゐる。約言すれば本例に於ける危險に關する恐怖症は「男に斬られはしまいか」との內容を有つ限りヒステリー性のものであり、その際に現れたサヂスムスの片鱗は所謂症候的退行を現すに過ぎない。後期の恐怖症は强迫神經症に屬するものである。[30] 尙本例に於いては、前にも述べた通り、サヂスムスへの固定があることは承認できるが、肛門性感への固定は確かな證明をすることができなかつた。動物恐怖症に就いては、問題無くヒステリー性のものと言へる。

6）性格の點では本例は强迫神經症の特徴を具へてゐる。

7）自由聯想の難易などといふことは全く人爲的のものであり、極端な場合ならいさ知らず、本例に於いては病名決定に資することができぬ。

かく考へて來ると本例の恐怖症の中、危險に關する症候の前半はヒステリー性のものであり、後半は强迫神經症に屬するものである。換言すれば、本例の恐怖症はヒステリー性のものに始まり、その後退行が進んで、已に强迫神經症に移行しつゝあるものであるといふことができる。本例を經驗し、又成書を讀んでみると、[31] かくの如き移行は恐怖症の場合には極めて多いのではあるまいか、或は又恐怖症はヒステリーと强迫神經症との中間に位するのではあるまいかとの印象が深い。赤面恐怖症に就いても

29） **Fenichel, O.** : l. c. S. 26—27 u. 110.

Nunberg, H. : Allgem. Neurosenlehre auf psa. Grundlage. S. 222.

30） 前に本例のリビドー固定點を考察した際に、刄物は男性々器の象徵であり、從つて「刄物を以て人を斬りはしまいか」との恐怖は男性コンプレックスの一つの現れに相當すると解しておいたが、それによれば「斬りはしまいか」との恐怖は男根期への一種の退行、即ち性器統裁期に於ける症候とすべきである。男根器への退行を示したものにもやはりヒステリーの名を附していゝものであるか否か、もし不可とすればエヂプス前期の男根期に固定を殘す神經症は何と命名すればいゝか、又「危害を加へはしまいか」との恐怖の解釋に於いても、この「危害」は症候的退行（ヒステリー）とすべきか眞正の退行（强迫神經症）とすべきか、甚だ迷はざるを得ない。實に恐怖症を繞つてヒステリーと强迫神經症との關係は多くの謎を含んでゐる。

31） **Deutsch, H.** : Psychoanalyse der Neurosen. S. 100 u. 134—135.

同様な見解に達し得ることを、當教室の山村氏[32]は既に述べてゐる。動物恐怖症は明かにヒステリー性のものである。

次に恐怖症以外の症狀に入らう。ヒステリー弓に就いてはとりたてゝ言ふことも無い。問題は胸部及び腹部の不安感、動悸、眩暈、熱感等であるが、之は不安神經症(Angstneurose)の症候群[33]に一程度まで一致する。之と「無理な禁慾」(erzwungene Abstinenz)の事實とを照合する時は、本例は不安神經症をも合併してゐるのではあるまいかと考へられる。不安神經症があるとすれば、今まで詳述した種々の恐怖症も不安神經症の症狀ではないかとの疑も起る。しかし不安神經症の恐怖症は心理的還元を許さないものであり[34]、本例に於いてはそれを許したのであるから、この疑は問題とならぬ。尙前3篇に詳報した通り、不安神經症の身體症狀は轉換ヒステリーの症狀と解し得る。恐怖症といひ身體症狀といひ、何れも心理的還元を許すことは、不安神經症の獨立性を稀薄ならしめるものである。前3報に加へ、不安神經症の獨立性を論ずる際の一助としておく。決定的な否定は不安神經症の特因無しにその症候群を發した場合を經驗するまで保留する。

5) 治 療 的 効 果

本例は分析的操作開始と同時に次第に輕快し始め、數ケ月の後には病感を有たぬこともあるやうになつた。しかしその後種々な事件の爲逆轉し、最後には惡化せる狀態のまゝで分析を打ち切らなければならなかつた。分析療法は再發防止を以て本來の使命とする。從つて分析開始直後の輕快は分析療法に因るものではなく、何か他の原因によるものだらう。何故本例は治療的に失敗したのだらうか。**フロイド**[35]は分析療法が成功する條件として、

1) 患者が一程度の敎養あること(何となれば分析療法は患者の内省を必要とするが故である。)

2) 變質者ならざること

3) 治療への意志が强固なること

4) 患者の年齢が50歲前後より若きこと(何となれば分析療法は一種の敎育療法

---

32) **山村(道)**: 當業報、第II卷、102頁。

33) 不安神經症に就いては余の前著3篇に詳述した。(當業報I卷、43頁及び95頁。II卷、47頁。)

34) **Freud, S.**: Ges. Schr. Bd. I, S. 313.

35) **Freud, S.**: Über Psychotherapie. (Ges. Schr. Bd. VI, S. 18—20.)

であるから、被教化性を有する患者でなければならぬ。50歳前後では被教化性が非常に薄くなつてゐる。尙患者の生活史が古ければ古い程分析すべき材料が多過ぎて明瞭性が失はれてゐるから餘分な努力をせねばならず、治療が著しく永びく缺點もある。）等を擧げてゐるが、本例はこの中 1) と 4)とに缺けてゐる。之は治療的効果を期待する上に致命的な缺點である。[36)]

尙本例にとつて惡い條件は、現實的な原因があることである。フロイド[37)]も引用してゐる通り、例へば夫の Impotenz に惱む婦人患者に „Rp. Penis normalis, dosim Repetatur!" とは書けない。しかし注意すべきは、この現實的な原因を除くことが治療への唯一の途と考へることの短見である。たとひ患者が再婚した所で心理的な原因が除かれない限り、患者は幸福にはなり得ないであらう。惡く考へれば、再婚は症候を惡化させる危險さへある。

V. 總　　括

50 歲になる素人下宿屋の主婦が夫の死後刄物に對し特に警戒するやうになつて來たが、或晚下宿人たる一青年が患者の寢室に入つて來た時以來この警戒は一層嚴重となり、その後患者の娘に關する下宿人の戀愛事件が起るに及んで刄物恐怖症と言ひ得るまで亢進した。その後或日のこと出刄庖丁を買ひ、その翌日出刄を思ひ出した瞬間恐しさの餘り身體を後方に反らしてしまつた。それ以來目茶苦茶に刄物(主として出刄)が怖しく、之を手にすることもできず、非常な不便と苦痛とに惱まねばならなくなつた。時日の經過と共に「男に刄物で斬られはしまいか」との內容を有つ恐怖症を生じ之が再轉して「刄物を以て誰も彼も切つてしまひたい」衝動と「そんなことをしたら大變だ」との恐怖に變つて行つた。之等の變化の間に一般危險狀況に對し同樣の恐怖を生じ、かくして分析的治療を乞ふに至つたものである。

分析の結果、先づ患者にはリビドーの欝積があり、彼女はその捌口を長男或は下宿人に求めてゐたことが明かとなつた。長男を中心とする男性恐怖はその症候的發現である。分析操作の經過中動物(牡)恐怖症を生じて來たが、之も男性恐怖と同樣に解釋された。又男性に對するリビドー配給がその性器に集中されてゐることと男性恐怖の中心が刄物恐怖に置かれてあることとが併行してゐることは、刄物は男性々器の象徵であるとの假定を根據づけるものであり、之は一つの夢によつて充分に裏書されてゐ

36) 治療だけを目的とするならかういふ症例は分析しない方がよい。

37) Ges. Schr. Bd. IV, S. 419.

る。かくして男性恐怖、動物恐怖症及び「男に斬られはしまいか」との內容の刄物恐怖症は性器統裁期に屬する性慾活動が抑壓されて生じたものであり、ヒステリーの構造を有つものであると言へる。しかし男性々器が刄物によつて象徵され、性交は傷害によつて代理されたことは、性器統裁期以前の編成期に屬するもの（サヂスムス）が症候選擇の方向決定に資して居ることを現し、患者の性的編成が退行の途についたことを豫想せしめるものである。果して病氣の經過中「刄物を以つて人を斬りたい」衝動とそれに對する防衞的症候とを來すやうになつたが、かうなつてはもはや性器統裁的現象とは言ひ得ない。之は眞正の退行であり、病氣は强迫神經症にまで惡化したと言ふべきである。刄物が男性々器の象徵と解されることによつて「斬りはしまいか」との恐怖症は一つの男根期的活動に由來する症候とも考へられるが、之をヒステリー性のものであるとなすのは目下その機でない。要するに本例の恐怖症は、ヒステリーと强迫神經症とが混合したものであり、恐怖症の神經症列に於ける位置に關して一つの示唆を與へるやうな印象を受ける。

不安神經症の獨立性を吟味する企圖の下に本例を觀察する時は、こゝにも亦前報の諸例と同樣獨立性を否定するといふ風に現れてゐる症例を見る。

擱筆するに臨み、恩師丸井教授の懇篤なる御指導と御校閱とを深謝す。

（昭和９年９月脫稿）

紹介

アレキサンダー著『自我心理學の發達』*

醫學士　木村廉吉　譯

實際に觀察される心的過程の構成的ならびに力學的の研究は、最近十年間に急速な發達を遂げた。1921年以來新しい分析的自我心理學が展開したと云ふ事が出來る。抑壓作用の根本過程の、更に深い吟味がこの新しい展開の出發點であつた。中心問題は「如何なる要素が抑壓作用を惹起するものか、又抑壓作用の過程の詳細はどんな風にして起るか」と云ふ點となつた。そして恐怖がすべての抑壓作用の背後に働く動力なる事が直ちに明かとなつた。しかしこの恐れの特有な點は、それが決して外部の實在的危險に對する理性的或は全意識的の恐怖ではなくて、罪を感ずる良心として意識の上に現れる恐怖だと云ふ事實である。この現象は人格の一部が、通例良心と呼ばれる他の部分への恐怖を呈し、抑壓作用はその恐怖反應を避けるのに役立つと說明すると一番いゝ。換言すれば意識界に入つて自責感を惹起する樣な心的の傾向、願望、あこがれ、考へ等は、この自責感が現實の危險に直面した時經驗される恐怖と關聯してゐるが爲に、意識的人格から排斥されるのである。抑壓を受ける傾向を歷史的に吟味して見ると、その傾向は或る早期、通例は幼時に實際その本人の苦痛や兩親の懲罰或は蔑視をひき起した罪の葛藤を呼びさまし易いといふ事がわかつた。かくて兩親に對する恐れが自分の良心への恐怖に具象化されるのである。發達の間に人格の一部が權威者、通例は兩親の態度、意見、判斷を引受け、この兩親の具象化したものが改めて人格中の他の部分に對して、以前兩親が子供に示したと同じ態度を採るといふ假定が必然生じて來た。この兩親との同一視作用ならびに兩親の像を心的裝置中に合体する過程が吾人が通例社會環境への適應作用と呼ぶ過程なのである。人格の一部分は教育のおきてを受容して社會要求の代表者となり、その部分をフロイドは上位自我 Super-ego と呼

* Alexander, Franz: Developement of the Ego-psychology. (Psycho-analysis Today, 1933.)

んでゐる。人格の全部が社會適應にたづさはるものではなくて、正常人にさへも原始的、非適應性の本能傾向と上位自我の拘束的影響との間の永久不變の不和の存在してゐるのを知る事が肝要である。

上位自我の存在と云ふ事は、文明のあらゆる形態に於ても、社會秩序に缺くべからざる、自らを調節し自らを拘束する力を必ず個人が持つてゐると云ふ事を說明する。もし、上位自我或はもつと通俗的に云ふ良心の如き內的のおきてが無い時には、各個人に巡査を一人づゝあてがつて當然の社會的行爲に服從させる事によつて、やつと社會的秩序が確保されるだらう。社會的行爲は決して外的の刑罰に對する恐怖によつてのみ勵行されるものではない。適應性なる各個人は又、發達の經過中に訓戒や刑罰の威嚇の如き外的の强制から或る程度まで獨立して來る拘束力を持てゐつる。他方又心理學的分析の光によつて、社會規定の內的攝取は少數の極く基本的の調節のみに限られてゐる事が明かになつた。上位自我は實在の權威者に全然取つて代る事は出來ぬから、刑罰に對する恐れがなければ大多數の人は實際の場合ほど社會的には行動しないだらう。

非社會的傾向の中の如何なるものが上位自我の內的拘束機能によつて調整され、又如何なるものがなほ警察力によつて調整されるかと云ふ事を實驗的にためすには、すべての刑罰を廢棄すると云ふ實驗法による他はなく到底出來ない相談である。この狀況の下に如何なる種類の犯罪行爲や非社會的行爲は增加し、又如何なる犯罪傾向はもはや外的調整を要しないかと云ふ統計的研究があれば、集團生活の要求に對して現代人がどの程度にまで本當の適應をしてゐるかと云ふ標準を示すだらう。精神分析學的實驗によれば、吾人現代の文明社會に於て、その刑罰が刑法に規定されてゐなくとも增加しないものは食人行爲、近親愛の實際行爲、親殺し、同胞殺し位に過ぎないだらうと云ふ事が相當見込を以て豫言される。これ等の非社會的傾向は人類發達の初期には著しかつたが、現代文明の下ではそれが實現する危險が無い程充分に抑へられてゐる。例へば食人行爲の如き、各人の發達初期の幼時には疑ひなく存して居るが、充分深く抑壓されてゐて、或る原始文明の下で必要とした樣な特別の禁制をもはや要しないのである。

正常人がその反社會的の本能傾向を馴致したり、改めたりする事が出來るのに反して、精神神經症者はそれにもつと强く固執してゐる。神經症者が、抑壓する力と抑壓される非適應性の力との間の精神葛藤を解決する爲に撰ぶ途は、幻想を以てその願望の實現に代へる事であるが、しかし彼の人格中の意識的の適應部分がその存在を拒否するが爲に彼の非適應性の傾向はその幻想中にも直接には表現されぬ。かくてその結

果として來るものは、その傾向を精神神經症の症候中に假裝せる幻想として表白する事である。

更に又夢の研究は、正常人に於てすらも非社會的傾向の無意識的殘物が働いてゐる事を示した。何故ならば多くの場合不可解で馬鹿らしい夢は、人格の適應部分から斥けられた傾向の假裝的表現だからである。從つて夢は正常人の神經症的症候と考へ得られる。如何なる場合にも夢形成の力學的根據は神經症の症候形成のそれと等しく、實際又夢の分析の技術は、抑へる心的の力と抑へられる力との力學的相互作用の研究に對する最も微妙な手段なる事がわかつた。症候や夢形成のこの顯微鏡的研究は一種の立体心理學に至つた。何故ならばこの研究は、人格の構造の概念を展開し、又構成的に分化せる人格の諸部分の間に起る心的過程を再建したからである。吾人は心的裝置の構成的に分化せる部分を三つに分つ事が出來る。

（1） 相互間に於ても亦外部の實情とも未だ調和せぬ、混沌たる諸本能要求の生來の貯藏所は、その非人格的性質の爲に id と呼ばれる。(das Es)

（2） 自我 the ego (das Ich) は、その實現が外的實現との葛藤をひき起す樣なものを排して id の原始的傾向を改めたり又撰擇や調整の過程によつて調和せしめたりする、人格の整全部分である。

（3） 最後に、心的裝置の第三の部分であり最終の適應作用の結果をなすものは、社會のおきてを具体化してゐる上位自我 the super-ego, das Über-Ich である。勿論このおきては社會環境に係つて居り、又個人の育つて來た文化環境によつて異なつてゐる。

id や殊に上位自我の性質や機能に關して吾人が知つてゐる事にくらべて、意識我に關する吾人の知識が、はるかに及ばぬといふ事は理窟に合はぬ樣に聞えるかも知れぬ。自我は吾人が絕えず認知してゐる人格部分であり、吾人の實在人格として知つたり、感じたりしてゐるものと考へてゐる部分であるが爲に奇妙に聞えるのである。しかし多分、その近きに在ることがかへつて其の科學的研究を困難ならしめる一の理由だらう。自我の助けによつて自我を理解する事の困難さは、古い哲學論で「ナイフを以てナイフを切る事は不可能である」といふたとへによつて云ひあらはされてゐる。心理學では、すべて他人を理解する假定は吾人自身の心的過程の知識であるから、精神分析學も他人の人格を理解する爲に內省と云ふ事を利用しなければならぬが、それだからと云つて精神分析は決して內省的方法ではない。故に自分の人格に近いといふ事は疑ひもなく、自我の機能を客觀的に述べる事の妨げの一つとなるのである。

この困難は臨床上の經驗の際に容易に見られる。病者はしばしば、精神分析者が彼

等病者の無意識中にあつて實在我の外にありと示す厭ふべき傾向を大した異議もなく認める。これ等の咎むべく抑へらるべき傾向は實在人格の外にあるが故に受け容れられるのであつて、病者はかう云つて自ら慰める事が出來る。「この奇妙なものは自分の無意識の中にあるのであつて、自己すなはち自我として感ずる自分の人格部分の中にあるわけではない」と。實際の精神葛藤は、無意識傾向が自我の中に入り病者がそれを自分の實在人格の一部分として感じ出してからはじめて起るのである。

自我に關する吾人の知識が人格の無意識部分に關する知識よりもおくれてゐるといふ事が理に合はぬ樣に思はれる他の原因は、自我が原始的の力の貯藏所たる id よりも亦、高度に分化せる條件反射や反射禁止の一種の複合体たる上位自我よりもはるかに複雜であり又發達してゐるといふ事實である。

自我について確かに云ひ切れる事は、自我は二つの知覺面の形成物であつて、一の面は本能生活の方に向けられ(内知覺 inner perception)、第二の面は外的現實に向けられてゐる(感覺 sense perception)といふ事である。自我の重要な一機能は、内知覺の事實を感覺の結果に突き合せる事、すなはち主觀的要求を外的狀況に調和せしめる事である。自我の傾向は、當時の外的狀況の下に出來るだけ多くの主觀的要求や願望の滿足を見出すことである。意識我は心的裝置中最も應化性のある部分であつて、反射や自働的行動がはるかに固定し豫定されてゐるのに反して、いつでもその狀況に應じた態度をとる事が出來る。機械的の反射は硬化してゐて、一定の刺戟に適應するのみで外界の突然の變化に適應することは出來ぬが、それに反して自我には臨機の適應をなし遂げる能力がある。

全ての心的裝置の機能狀態は大体次の如く云ひ得る。id の中に起る本能的要求や傾向は、要求の充足のかゝはる動力分布を意識我が司つてゐるところから、意識的にならうとする傾きがある。本能的要求の大部分は直ちに意識的となつて、意識的熟慮の過程によつて受容せられたり、排せられたりする。この熟慮は外的狀況の評價と、當の內的要求と意識中に現存する他の相反する傾向との比較とを包含する。例へばもし或る人が自分は實際講義を聽きたいか、芝居見物に行きたいかを定めねばならぬ場合、それは意識的の精神葛藤であつて意識的の判斷によつて解決し得るだらう。しかしかやうな傾向や精神葛藤は抑壓作用とは何の關係も無い。かやうな場合には一の望みが他のもつと重要なものと相容れぬが爲に放棄されるのである。しかし抑壓作用とは、或る傾向が意識的となるのを排する作用である。抑壓作用は、その實現の如何にかゝはらず單に或る願望が存在するだけで堪へ難い意識的精神葛藤を起す樣な場合にのみ起る。一つだけ典型的な例を擧げて見ると、恩人に對する敬意はそれが吾人自身に對する信

をそこなふが故に抑へられる傾きがあるだらう。同様な非社會的傾向は、それに對する感受性はその幼時の經驗の異なるに從つて人によつて樣々ではあるが、意識的になる前にさへ禁壓されてしまふ。抑壓作用は意識的の排斥に反して人格の深い面、すなはち何處か id と自我との境界線あたりに起る禁壓過程であつて、意識的人格が苦痛な精神葛藤に氣付くのを救ふ。

かゝる無意識禁止の過程が、自働的な、ほとんど條件反射と同樣な反射禁止に至る一種の無意識的の內知覺を假定する事は明かである。この無意識的檢閱機能を吾人は上位自我に歸する。よつて抑壓作用は受け容れ難い傾向に對して自働的に反應する、一種の無意識的檢閱に基づいてゐる。この過程は一定の傾向を意識から排除する一種の無意識的選擇判斷と思はれるけれども、その過程は型にはまつてゐて微細な區別をつける事が出來ず、實際上にしかも時には重要な區別があるにかゝはらず一定の感情要素に對して劃一的に反應するものと吾人は假定しなければならぬ。その過程は愼重な判斷と云ふよりは條件反射に比すべきものである。ありふれた例をひいて見ると、子供が最初に抱く、近親愛の色彩を帶びた性的追求に對する抑壓作用は性的抑壓の通型となつて後年までつきまとひ、かくて成人して再び性に目覺める時概して臆病になり束縛を受ける。性的衝動は明かに近親愛的であつた以前の特徵を失つて許容さるべき異性の對象に向けられる今になつても、子供の時受けた樣な脅威を受ける。上位自我は微妙な區別をつける能力を缺いて居り、追求の對象がもはや子供の時と同じでないと云ふ事を認め得ないで性慾一般を抑へつけてしまふ。妙齡の人によく見られるはじらひや禁壓の光景はこの自働的の拘束過程の結果を示す。要するに抑壓作用は常に誇張されてゐて、意識されゝば意識我からは決して排せられぬ樣な傾向をも抑へてしまふ。上位自我のこの重要な、自働的且つ苛酷な禁壓機能は精神神經障碍の最も一般的な原因と思はれる。すなはち精神神經症の症候は過大な抑壓作用の重壓に基因する堪へ難い緊張の力學的の結果である。

抑壓作用の働きについてもつと充分述べて見やう。抑壓作用は、その解除に必要な動力分布をもたらす爲に意識的にならうとする傾きのある力學的緊張を上位自我が內的に知覺するところより發する。もしその傾向が上位自我のおきてに抵觸する時は意識我は恐怖の爲にその傾向を排し、かくて恐怖が抑壓作用の動力となる。上位自我の與ふる暗示によつて行動する自我は、非とされる id の傾向を排し、そこに吾人の云ふ抑壓作用が生ずる。自我が上位自我に對して感ずる恐怖は、自我に抑壓せよと警告する合圖であり、自我に對する上位自我のおどかしは、兩親が子供を教育するに當つて押しつけた壓迫の續きと考へる事が出來る。

自我は二つの指導力に從はねばならぬ。個人は一方には id から、又一方には上位自我の拒絶から起き上る事を要する。自我の傾向は id の傾向を上位自我のおきてと一致する樣な風に變へて二つの力を妥協させるにある。この過程を吾人は、原始的に遺傳された非社會的の慾求の馴致或は美化作用と呼ぶ。美化作用は正常の適應の中に見られるものである。精神神經症的人格は美化作用の能力の比較的少い事を特徴とする。* これ等の病的人格はその元來の傾向に頑强にしがみつき、妙な云ひ草だが、彼等には同時に苛酷な上位自我が發達してゐるが爲にその傾向を處理する事が出來ぬ。つまり彼等は過度に社會的であると同時に又非社會的なのである。(1934年7月)

---

*或る神經症の場合に美化作用の絕對價と云ふものは相當大きい事もあるだらうが、美化されざる滿足の妨害が神經症者の出來る程度以上に美化作用の必要を大ならしめかくて症候が生ずるのである。

フロイド著「不安と本能生活」[1]

（精神分析入門講話續篇第三十二講）（承前）

醫學博士　早坂長一郎　譯

紳士淑女諸君。今度は諸君も朗かであらう。不安のお話は之で打切つたから。しかしそれは糠喜びである。之から言はうとすることにも諸君を喜ばすべき何物もない。余は諸君をもう一度リビドー説或は本能論——之も面目を改めてゐるものが多い——の所へ御案內するつもりである。勿論余は、此の問題に關して大進步をなしたとか、それを知ることはそれだけ骨折甲斐があるとかと言はうとする者ではない。たゞ此の問題は我々がその概念の把握と洞察とに死力を盡した領域であることを諸君に確認して頂きたいだけである。此處にも前に御紹介したことを繰返さねばならぬ多くのものがある。

本能論は謂はゞ我々の神話學である。本能は神秘的存在であり、その不定性は測り知ることが出來ぬ。しかし我々の研究に於いては一瞬たりとも本能を度外視することができぬが、之をハッキリと見定めることは到底不確實たるを免れ得ぬ。本能に關する一般の見解が如何に樣々であるかは諸君も御存じの筈だ。人々は實に多數の、又實に多樣の本能を考へて居る。曰く名譽本能、曰く模倣本能、曰く遊戲本能、曰く社交本能、曰く何々と。人々はそれ等を取り上げ、各々に就いて特別な研究をしてみるが間もなくそのまゝ手離してしまふかの如き觀がある。しかし之等群小の本能の蔭に何か根本的なもの、强力なものが隱されて居はしまいかとの豫想は常に我々の心を動かしてゐた。そして我々は、此の隱されたものに愼重に近づいて行きたいと思つて居た。我々の第一步は實に遠慮深いものであつた。我々は先づ「食慾と愛慾」といふ二大要求に從つて二つの基本本能（本能の種類と言はうか本能群と言はうか）を區別したが、之は恐らく誤つたものではないだらうとは我々の信ずる所である。我々は他の場合には嫉妬深くも、心理學の、他の科學からの獨立性を辯護して居る。しかし此の

1) Freud, S.: Angst und Triebleben. (Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, 1933.——XXXII. Vorlesung.)

場合には我々は、微動だにせぬ生物學的事實、即ち各個の生體は自己保存と種族保存との二つの目的に仕へてゐるとの事實の上に立つてゐるのである。此の二つの目的は互に獨立してゐるやうに見え、我々の知つて居る限り、未だ共通の進路を取つたことが無く、動物界に在つてはその關心が屢々撞着する。此處に特殊の生物學的心理學の必要が起り、生物學的過程の心的隨伴現象が研究されるに至つた。此の解釋の代表者として精神分析學は「自我本能」と「性的本能」とを取り入れた。前者の中には個人の維持、主張、擴大に關する一切のものが算へられ、後者には小兒的竝に變態的性生活が欲する豊富な內容が盛られねばならなかつた。神經症の硏究に當つて我々は、自我を制限的、抑壓的動力として、又性的努力を被制限物、被抑壓物として知るやうになつた以上、此の二つの本能群の差異のみならず、兩者間の軋轢にも手をつけねばならぬことと信じた。我々の硏究の對象は先づ性的本能であつた。そのエネルギーを我々は「リビドー」と名づけた。性的本能に就いて我々は、本能とは何ぞや、如何なる役割を演ずるものなりや、との概念を明かにしようとつとめた。之がリビドー說である。

本能と刺戟とは次の點で區別される。本能は身體內部に在る刺戟源から發し、不變の力の如くに作用する。人は逃亡によつて外的刺戟から脫することが出來るが、本能からは脫することが不可能である。本能には源泉 (Quelle)、對象 (Objekt) 及び目標 (Ziel) の三つが區別される。源泉とは身體的興奮狀態であり、目標とは此の興奮を解放することであるが、源泉から目標に至る途中に於いて本能が心理的に働く。我々は本能を一定の方向に突進する (Drängen) 或量のエネルギーと考へる。この Drängen (突進すること) から Trieb (本能)〔突進するもの〕といふ名前が來てゐる。

能動的竝に受動的本能といふ言葉があるが、之は正しくは能動的及び受動的本能目標と言ふべきである。受動的目標に達するにも多少の能動性が必要であるから。目標は自分自身の身體に於いても達せられることがあるが、槪ね外部の對象が介入する場合が定則となつてゐる。此の對象に於いて本能はその外的目標に到達するが、その內的目標は滿足として感ぜられる所の身體の變化であることに變りはない。身體的源泉に對する關係が本能に特殊性を與へるものか否か、又如何なる特殊性を與へるものであるかは未だ我々にとつて明かになつて居ない。甲の源泉からの本能活動が乙の源泉からのそれに附隨し、それとその後の運命を共にすること、又一つの本能滿足が他のそれによつて代償され得ること、之等は分析學的經驗の論證によればもはや疑を容れぬ事實である。たゞ我々は、それらが特に良く解るものではないといふことを白狀するだけだ。本能の目標と對象とに對する關係も亦變更され得る。その何れもが他の目

標、對象と交換され得る。この場合對象の交換が常により容易に行はれ得る。目標の修飾及び對象の交換の一種で、それが我々の社會的評價を考慮に入れてなされる場合には、之を昇華 (Sublimierung) と名づける。尙我々は、目標到達を制止された (zielgehemmt)本能なるものを區別すべき根據を有つてゐる。卽ち、明瞭なる目標を有する熟知の源泉から發する本能活動であるが、しかしそれは滿足に達する途中に於いて停止し、こゝに永久的對象配給と持續的努力とが行はれるが如き本能である。かくの如きものは、例へばかの感傷愛關係 (Zärtlichkeitsbeziehung) である。之は疑も無く性的要求から發し、而も通例その滿足が斷念されたものである。以上申し上げた通り、本能の特徵と運命とに關して如何に多くのものが尙吾人の理解の埒外にあるかが諸君にお解りのことと思ふ。此處で一寸性的本能と自己保存の本能との間に在る差異に就いて考へてみよう。もしこの差異が兩者の全部に觸れるものであつたら、それは理論的に極めて重要なものであらう。性的本能の特徵は先づその可塑性 (Plastizität)、卽ち本能の目標を交換し得る能力に在る。第二はその代理性 (Vertretbarkeit) に在るのであるが、之は甲の本能滿足が乙の本能滿足によつて代理され得るといふことである。第三はその猶豫性 (Aufschiebbarkeit) であるが、此の好例は前述の目標の到達を制止された本能によつて與へられる。之等の特徵は自己保存の本能にはあてはまらない。後者に就いて吾人は次のやうに斷言したい。自己保存の本能は頑强であり、猶豫がきかず全く前者と異つて絕對命令的であり、抑壓乃至不安に對しても全く異つた態度をとるものである、と。とはいへ再考してみれば、此の例外的態度は總ての自我本能に對してさうなのではなく、唯饑渴の慾に對してのみ言ひ得ることなのである。勿論之は本能の源泉の特性に基くものであるが。印象を混亂させた罪の一端は確かに次のことに歸せられる、我々は、最初「エス」に屬してゐた本能活動が組織化された「自我」の影響によつて如何なる變化を蒙るかに就いて、特別に考慮を拂はなかつたから。

本能生活の性機能に對する隷屬關係を研究することは、我々をしてよりシッカリした根底に立たしめるものである。この點に關しては、我々は旣に全く決定的の認識を得てゐるのであるが、それは諸君にとつてもはや耳新しいものではない。卽ち我々の謂ふ性本能とは、最初から性機能――兩種の生殖細胞の結合――を目標とする努力を指すのではなく、多數の成分本能 (Partialtriebe)、卽ち身體の各所、各領域から發し、各自かなり獨立的な立場に於いて所謂 **器官性感** (Organlust) と稱せられる所の或ものの中に滿足を見出さんと努力するものを謂ふ。性器は之等 **性感部位** (erogene Zone) の中で最後に來るものであり、その器官性感は、之こそは性的 (sexuelle) 快感と呼ぶのに最もふさはしきものである。之等の、快感を求める活動の總てが性機能の最終的編

成に取り込まれるものではない。その多數のものは不要となつて抑壓その他の方法によつて斥けられ、その少數のものは前述の注目すべき方法に於いて本來の目標から反らされて他の活動の强化に利用せられ、更に他のものはワキ役として取り殘され、豫備行爲の遂行、前快感の發生に役立つこととなる。諸君は既に、此の長期に亘る發達中に前驅的編成の多くの時期が認められ、且つ此の性機能史から、性的機能の倒錯と萎縮とが說明されることをお聞きになつてゐる。此の性器統裁以前の (prägenitale) 時期の最初のものをば**口器統裁期** (orale Phase) と名づける。蓋し乳兒の榮養方法に一致し、口器といふ性感部位が統裁し、而も之を此の年齢に於ける性的機能と稱し得るからである。第二期にやつて來るものはサヂスムス的な (sadistische) 衝動と肛門に於ける性感とである。確かに之は齒の發生と筋肉組織の强化と括約筋機能の支配とに關係がある。之等の著明な發達期に就いては、我々は極めて興味ある事實の數々を經驗してゐる。第三に**男根統裁期** (phallische Phase) が現れる。この時期に在つては兩性共に男根と少女に於けるそれに相當するものとが看過すべからざる意味を有つやうになる。最後の性的編成期は、之は思春期以後に來るものであるが、**性器統裁期** (genitale Phase) といふ名稱を附せられる。此の時期に於いて始めて女性の性器が承認を受ける。男性のそれは既に夙く受けてゐるのに。

以上で舊說を全部繰返したつもりであるが、只今申上げなかつたことは全部もはや採るに足らないものであると思召しになつては困る。只今繰返したのは、その後の知見の進步に就いて報告するのに必要な爲である。我々は正にこのリビドーの早期の編成に就いて多くの新事實を經驗し、又舊說の意味をよりハツキリと把握したことを誇ることができる。今から諸君に少くとも二三の問題に就いてそれを御紹介したいと思ふ。1924年**アブラハム** (*K. Abraham*) は、サヂスムス・肛門統裁期を二期に分ち得ることを實驗した。卽ちその前期には絕滅と喪失との破壞的傾向が、その後期には固持と所有との親和的傾向が君臨してゐる。かく後者の中心には、やがて來るべき愛の配給の前驅として對象に對する最初の顧慮がやつて來てゐる。かくの如き小區分を最初の口器統裁期に就いても想定し得べきは理の當然である。卽ちその前期は口器的攝取の階梯である。この階梯では母の乳房といふ對象に對する關係に、未だ兩極性が現れて來ない。第二期は、之は嚙む能力の出現によつて特徵づけられてゐるが、**口器サヂスムス統裁期** (oralsadistische) と稱し得る。此の時期に至つて、初めて兩極性の現象が現れるが、之はやがて次のサヂスムス・肛門統裁期に於いて益々著明となる。此の新區分の價値は、一定の神經症（强迫神經症、憂鬱症）に於けるリビドー發達の素因點を求めんとする場合に特によく現れる。此處でもう一度リビドー固定、素因、退行の

關聯に就いて吾人の經驗した所を諸君の記憶の中に甦らせて欲しい。

リビドー編成の時期なるものに對する吾人の態度は、全体に於いて少しく變つて來た。我々は曾ては一つの時期がその次の時期がやつて來る前に消失するものであることを特に主張して居たが、今や吾人の注意は、前の時期の各々が後期の形態と相並んで、或はその蔭にかくされて後々までも殘るものである、即ちリビドーの經濟關係に於いて將又個人の性格に於いてその永續的な代表者を獲得する、といふ事實に向けられるやうになつた。更に重要になつたことは、病的事情の下に於いては屢々早期の時期への退行が起り、而して一定の退行は一定の病型に特有である、との經驗と研究とである。しかし之等に就いては此處で詳論するわけには行かぬ。之は神經症心理學の各論に亘るから。

本能の轉化並に同樣の過程に就いて我々は、肛門性感即ち肛門といふ一つの性感部位から來る興奮に於いて研究する所が特に深かつた。そして我々は、此の本能活動が如何に多種多樣の變化を受けるものであるかを知つて一驚を喫したのである。吾人の發育の途上、一旦は此の性感部位を見限るが、之を振り棄ててしまふことは恐らく容易な業ではあるまい。此處で我々はかの**アブラハム**のことを思ひ出す。彼は、肛門は胎生學的に原口（Urmund）に相當し、それが腸の後端にまで成長して行つたものなることに注意した。其の後我々は、自分の糞便、排泄物に對する興味を失ふことによつて此の肛門を源とする本能の興味は物品に移行し、所謂贈物として與へられるやうになることを經驗した。蓋し糞便は乳兒がなし得る最初の贈物であり、彼がその褓母を愛すればこそ所有を棄權したものであることは尤もなことである。成長と共に、言語の發達に於ける意味の變化と全く同樣に、此の昔の糞便に對する興味は金錢及び黃金の評價へと轉化するが、尙子供及び陰莖に對する情緒的配給へも貢献をなす。永いこと排泄腔說を棄てない總ての小兒は、小供といふものは糞便の片のやうに肛門から生れるものであると確信してゐる。排便は分娩の原型である。陰莖も亦腸の粘膜管を充たし、刺戟する所の糞便の棒をその前驅としてゐる。小兒が、かゝる陰莖を有しない人間が有ることを知るの幻滅を味つた時、彼には陰莖といふものが何か身體から離れることのできる物に見え、陰莖は疑も無く、かの最初の愛の對象であり、且つその所有を斷念せねばならなかつた所の排泄物と同一視せられるに至る。かくして肛門性感の大部分は陰莖配給に移行するが、此の身體部位は肛門性感的根元の他に恐らく更に有力ならんと思はれる口器的根元をも有つてゐる。何となれば陰莖は授乳に際し母の乳頭がとつた態度をも受け繼いで居るものだから。

之等の深層の關係を知らずして空想、即ち無意識界から影響された思ひ付きや人類

の症候語の眞相を握むことは不可能である。糞便――金――贈物――小供――陰莖は此處では同義に取り扱はれ、又共通の象徴によつて代表される。諸君、余は諸君に甚だ不完全な報告をなし得たに過ぎないものであることを忘れ給ふ勿れ。此處でもう一つ些か早急な嫌ひはあるが、附け加へさせて貰はう。やがて生ずる膣に對する興味も亦主として肛門性感から由來するものである。之は別に不思議は無い。何となれば、**ルー・アンドレア・サロメ**（*Lou Andreas-Salomé*）の穿つた言葉を借りて言へば、膣そのものが後腸〔胎兒直腸〕から「借家してゐる」ものだからである。性慾發達の一部に異常を殘すものである所の同性愛患者の生活に於いては、再び膣の代りに直腸が用ひられる。夢に於いては、曾て一室であつた所が現在壁で二つに仕切られてゐる所だの、或はその逆な場合が現れることが屢々あるが、その意味は常に膣と腸との關係を示すものである。更に我々は、少女に於ける陰莖を有ちたいなどといふ全く女らしからぬ願望が、小供を有ちたいとの願望、更に陰莖所有者乃至小供を授ける人としての男性に對する願望に變化する正常の道程――かくして此處でも肛門性感に由來する興味の一部が後年の性器統裁期の編成に取り込まれて行く有樣が明かになる――をよく理解することができる。

性器統裁期以前のリビドー發達階梯に關してかくの如き研究をなしつゝある間に、性格形成に就いて更に二三の新な洞察が得られた。我々は既に「几帳面」「吝嗇」「我儘」といふ三つの特徴がかなり規則正しく並存することに氣付いて居た。而してかくの如き人々を分析した結果から、此の特徴は彼等の肛門性感を糧にするか、或は他の方法の流用によつて生じたものであるとの結論に達してゐた。此の三特徴が顯著に合同して來る場合には之を**肛門性格**（Analcharakter）と呼ぶ。而して我々は、肛門性格を本來のまゝの肛門性感に一程度まで對立せしめて考へる。同樣の、恐らく更に密接な關係は功名心と尿道性感との間に見出された。此の關係を特に示唆したものは、かのアレキサンダー大王が、**ヘロストラート**とか言ふ者が彼のつまらぬ名譽心から**エフェソス**の有名なアルテミス寺院に放火したその晩に生れたといふ傳說である。恰も古人にはかくの如き關係が未知ではなかつたかの如くに！ 放尿が火及び消火と如何に關係が深いかは諸君もよく御存じの筈だ。勿論我々は他の性格の特徴と雖も同樣に一定の性器統裁期以前のリビドー形成の沈渣として、或は又反動形成として生ずるだらうことを期待するものであるが、未だそれを明瞭にすることができぬ。

しかしもはや歷史と本題とに立ち還り、本能生活の一般問題を改めて取り上ぐべき時である。我々のリビドー說の根底に橫はるものは、先づ自我本能と性本能との對立であつた。やがて我々が自我そのものを一層深く研究し始め、ナルチスムスの見地を

把握するや、此の區別は全くその根據を失つてしまつた。少數の例に於いて、自我が自らを對象とし、恰も自我が自らに惚れ込むかの如き態度をとる場合が認められる。それ故にギリシア神話からとつた**ナルチスムス** (Narzißmus) の名がある。しかし之は正常な場合の極端な誇張であるに過ぎない。やがて我々は、自我は常にリビドーの主な貯槽であり、リビドーの大部分が不變のまゝ自我の中に殘されてゐる一方、對象へのリビドー配給が其處から起つて復た其處へ歸つて來るのであることを理解するやうになつた。つまり自我リビドーが對象リビドーへ、又對象リビドーが自我リビドーへと絕えず變轉するのである。從つて兩者は其本性に從へば別種のものであり得ない、一方のエネルギーを他方のエネルギーから分つことは何等意味の無いことである、人々はリビドーの名稱を抹殺してしまつてもいゝ、或はそれを汎く心的エネルギーと同義に用ひてもいゝ。

我々は此の見地に永く留ることをしなかつた。本能生活の內部に於ける一つの對立性を豫期することは、やがて他の、一層明確な形をとつて現れて來た。しかし余は諸君の前で此の新本能說をその源にまで遡つて論じたくない。之とてもその根本的なものに於いては生物學的考察に依つたものである。諸君には之を旣成品として御紹介しよう。我々は、二つの、根本的に異つた種類の本能があると假定する。卽ち、最も廣義に解釋した場合の性本能——**エロス** (Eros) と謂つてもいゝ、もしその方が諸君の御氣に召すなら——と攻擊本能 (Aggressionstrieb)——その目標は破壞である——との二つである。かうお聞きになつたら諸君は、そんなことは新說として通用しないと仰言るだらう。なる程之は一見、愛と憎との平凡な對立 (之は恐らく物理學が無機物の世界に對して想定してゐる引力と反撥力との對立に合致するものであらうが) に眞理篇をつけて尤もらしく說明しようとする試みの如く見えるであらう。しかしながら此の提唱が、尙且多くの人によつて革新と感ぜられ、而も希望に反した、一刻も早く取り除かれねばならぬものと思はれることは特筆に價する。余は想ふ、此の反對の中には强い情緖的要素が充滿して居る、と。我々が攻擊本能を認めようと決心するまでにか程の長年月を費したのは何故であらうか。白日の下に橫はつて居り、誰もが知つて居る事實を利用して理論を組立てるのに躊躇を禁じ得なかつたのは何故であらうか。もし動物にかくの如き目標を持つた本能を假定せんとするならば、多分それは僅かの抵抗に打つかるだけで濟むだらう。しかし此の本能を人類の體質の中に許容することは冒瀆的に見える。之は多くの宗教上の假說に撞着し、社會的因襲に戾るものである。然り、人の性は善であらねばならぬ、少くとも善意であらねばならぬ。もし彼が時に獸性、兇暴性、殘忍性を現はすとしても、それは感情生活が一時痲痺したものであり、

多くは何物かに唆かされた場合であり、恐らく彼に與へられた社會秩序の缺陷に基くものであるとされるに過ぎないだらう。

遺憾ながら歴史の教ふる所、又吾人の經驗した結果は、上述の假説を證明するものではなく、むしろ人の性の「善」を信ずることは、かく多くの悪い幻想——之によつて人々は彼等の生活を美化し慰安せんことを期待したが、事實はたゞ損害を招來するのみであつた——の一つであるとの斷定を是認するのである。我々は此の駁論を續けようとは思はぬ。何となれば我々が人類に於ける攻撃本能、破壞本能の想定を辯護するに至つたのは、歴史や人生の經驗の教ふる所に從つたからではなく、**サヂスムス**〔加虐性〕及び**マゾヒスムス**〔被虐性〕の現象を吟味することに發端した全般的考察を基礎としての結果だからである。諸君も御承知の通り、サヂスムスとは、性的滿足が、性的對象をして苦痛、虐待、屈辱に惱ましめるが如き條件と結合してゐる場合を謂ひ、マゾヒスムスとは、自分自身が此の虐待される對象になることを要求する場合に謂ふ。尚諸君は、此の二つの衝動が一程度まで正常の性的關係にも加入し、又之等の衝動が他の性的行爲を排し、獨特の行爲を以て之に代へる場合には、之等の衝動を變態性慾と名づけるといふことも御存じである。更に諸君は、サヂスムスは男性に、マゾヒスムスは女性に密接な關係を保つてゐる、恰も其處には何か神秘的な親和力が働いてゐるかのやうであるといふことも殆ど否定なさらぬであらう。たとひ余が敢て此の點で行き過ぎて居ないことをお斷り申上げなくとも。此の兩者、サヂスムスとマゾヒスムスとは、リビドー説にとつて全く謎の現象である。特にマゾヒスムスが。しかしそれは、もし學説にとつて躓きの石となつたものが學説を補足する隅石の役割を演ずるかも知れぬとしたら、單にその順列が不可解であるといふに過ぎない。

かくの如く我々の意見では、サヂスムス及びマゾヒスムスに於いて、エロスと攻撃慾との二種の本能が混合してゐる場合の顯著な二例を目前に見ると考へる。而して今や我々は、此の關係は典型的なものであり、我々の研究し得る本能活動の總てが此の二種の本能のかくの如き混合と合金とから出來てゐるものであると想定する。勿論混合の割合は千差萬別であらう。但しかゝる場合に、エロス性の本能はその性的目標の多様性を以て混合物を彩るであらうし、も一つの本能はその單調な傾向に對し僅に强弱濃淡の別をつけるに過ぎまい。此の想定によつて我々は、曾て病的過程の理解に對して重大な意義を有つた研究の上に、一道の光明を認めることができた。何となれば之等の混合物は分解することもできるし、又かくの如き本能の混合物が機能に對して最も重大な結果を生ずるだらうことを信じてもいゝからである。しかしながら之等の見地は未だ餘りに新し過ぎる。誰も之を實例によつて吟味しようとした人が居ない。

マゾヒスムスの呈供する特殊問題に歸らう。今暫くマゾヒスムスのエロス性の要素を除外して考へるならば、其處には自己破滅を目標とする一つの衝動が存在することは確かだ。自我――しかし此處ではむしろエス、全人格の謂である――は最初あらゆる本能活動を自らの中に藏するといふ假定が破壞本能にもあてはまるとすれば、マゾヒスムスはサヂスムスよりも古い、サヂスムスは外部に向けられた破壞本能である、之によつて破壞本能は攻撃性を帶びる、との解釋が生れて來る。しかし最初の破壞本能の若干が內部に殘り得る。かくして我々の知覺が破壞本能を把握するのは二つの場合に限られる、卽ち破壞本能がエロス性の本能と合してマゾヒスムスとなる場合か、或は攻擊慾として――多かれ少かれエロス性の附加があるが――外界に向ふ場合か。此處に於いて攻擊慾が現實の障碍にぶつかつて外界にその滿足を見出しかねる場合の意味が持ち上つて來る。かゝる場合この攻擊慾は恐らく後退するであらう、そして內部に君臨する自己破壞慾の大きさが增すであらう。實際その通りであり、此の過程が如何に重大なものであるかは吾人の耳にする所だらう。妨害を受けた攻擊慾は大傷害を意味する如く見える。事實我々は自分自身を破滅させない爲に、自己破壞の傾向から防衛する爲に、他人或は他の物を破滅させねばならぬやうに見える。確に之は倫理學者にとつて悲しむべき公示である。

しかし、倫理學者は今後長く我々の思索を無稽のものなりとして自ら慰めるであらう。我々自身の有機的故鄕を破壞するといふとんでもない本能だから。詩人は此の間の事情を云々する。しかし詩人には責任が無い。彼等は詩人として免除權の特典を享けて居る。しかし類似の考へ方は生理學では珍しいことではない。例へば自らを消化するといふ胃の粘膜の考へ方は如何。勿論我々の自己破壞本能說が幾多の支持を必要とするものであることは認めねばならぬ。かくの如き結論を敢て想定するのは、たゞ單に二三の哀れむべき馬鹿者がその性的滿足を特殊な條件に結びつけてゐた爲ではない。余の謂はんとする所は、本能を深く硏究した結果が此處に到らしめたのであるといふことだ。本能はひとり精神生活のみを支配するものではなく、植物的生活をも支配する。而して此の有機的本能が吾人の最大の興味を惹く特徵を示す。之が本能の一般特徵であるか否かは追つて決定することにしたい。本能は過去の狀態を再生しようとする努力となつて現れる。我々はかくの如き一旦到達せられた狀態が障碍された瞬間から、その狀態を再び作り出さうとの本能が發生するものと想定することができる。卽ち反復强迫(Wiederholungszwang)と稱する現象が起る。胎生學は反復强迫の唯一の見本である。廣く動物界を通じて、失はれた器官を新生する能力が存する。我々が治療的補助綫と竝んで、恢復のおかげを蒙つてゐる所の治癒本能も畢竟するに此の、下

等動物に於いてよく發達せる能力の名殘であるに違ひあるまい。魚の卵が游走するのも鳥類が飛ぶのも、出來得べくんば我々が動物に於いて本能の現れと稱するものの總てが、本能の保存的本性(konservative Natur)を現す所の反復强迫の掟の下に起る。精神界に於いても此の現れを求めることは左程困難ではない。旣に我々の目に著いた如く、幼時の忘れられた、抑壓された體驗が分析操作の間に夢及び種々の反應、特に感情轉移反應に於いて再生される。たとひ之等の再喚起が快感原理の方針に逆ふ場合でも。そして之が、かくの如き場合には反復强迫は快感原理を超越するものであるとの說明を與へたのであるが。分析以外にも同樣のことは見られる。一生涯何等改むること無く損害に對して同一の反應を繰返してゐる人間が居る。或は苛酷な運命につきまとはれてゐるかの如くに見える人間も居る。しかし之等をよく調べてみると、彼等は此の運命を識らず識らず自ら用意してゐるものであることが解る。こゝに我々は反復强迫の惡魔性を認める。

扨て本能の保存性なるものは我が自已破壞說の理解にとつて如何なる役目を演ずるか、かくの如き本能は過去の如何なる狀態を再生しようとしてゐるのか。今やこの答は手近に在る。遙かながら見透しはついた。もし、或時無生物から生命が生れた——何時、如何にしてといふことは想像すべくもないが——といふことが眞であるとすれば、我々の假說によれば、其時旣に生を再び廢棄し、無機の狀態を再生しようとする本能が發生したに違ひない。此の本能の中に我々の想定する自已破壞慾を再び顧るならば、之は死の本能(Todestrieb)であると解せざるを得ぬ。之は如何なる生の過程中にも看過されることができない。かくして我々の信ずる本能は、生物をより大なる單位に團結せんとするエロス性の本能と、此の努力に逆らひ、生を無機の狀態に還元せんとする死の本能との二群に分たれる。兩者が或は協同的に或は反撥的に作用することによつて生の現象が起り、死によつてその結末を告げる。

恐らく諸君は肩をすくめて言ふであらう、それは自然科學ではない、それは**ショッペンハウエル**の哲學であると。しかし紳士淑女君、或奔放な思想家が、その後の苦心慘澹たる生眞面目な事實硏究の結晶として實證された事柄を言ひ當てたとて何の不可があらうか。又總ては旣に一度言はれてゐる、ショッペンハウエルの前にも多くの同樣のことが言はれてゐる。更に我々の言ふ所は、決して**ショッペンハウエル**そのまゝではない。我々は、死が唯一の目標であるとは主張しない。我々は死と共に生をも無視しない。我々は二つの基本本能を認め、その各々に特有な目標を與へてゐるのだ。兩者が生の過程に於いて如何樣に混合するか、死の本能がどんな風にエロスの企圖に副ふやうになされてゐるか、就中外界に向けられた死の本能が攻擊慾として如何なる具

合にエロスの役に立つてゐるか、之等はその研究を將來に委ねられた課題である。我々はまだかくの如き見込みがついたといふ點までしか來て居らぬ。保存性が總ての本能に例外なくあてはまるものか、エロス性の本能が生物をより大なる單位へ合成せんとするものとすれば、之も過去の狀態への復歸を目指して居るものではなからうか、之等の問題にも觸れずにおかねばならぬだらう。

我々は少しく根據を離れて居た。遲れ走せながら之から我々の本能論を考慮するに至つた出發點を御報告申し上げよう。自我と無意識との關係を改訂するに至らしめたものは分析的研究から得た印象に他ならぬ。その患者は抵抗が强かつたが屢々此の抵抗に關し何も知らぬことが多かつた。彼には抵抗の事實が無意識であつたばかりでなく、抵抗の動機までもさうであつた。我々は之等の（或は此の）動機をつきとめなければならなかつた。そして遂に、意外にも之は强い懲罰要求にあることを發見したのであるが、此の懲罰要求はマゾヒスムス性の願望にしか數へることの出來ぬものであつた。此の發見の意義は實用的にも決して理論的のものに劣るものではない。何となれば此の懲罰要求は吾人の治療的努力の最惡の敵だからである。此の要求は神經症に結合してゐる苦惱によつて滿足され、從つて病氣で居ることに執着する。此の動機、無意識的懲罰要求はあらゆる神經症的疾患に關與してゐるやうに思はれる。神經症的苦惱が他の種類の苦惱によつて代理されるが如き場合は正にその好例である。その一例を御報告申上げよう。余は曾て一人の稍々年老いた娘の治療に成功したことがあるが、彼女は十五年間も或症候に苦しめられ、生活に關與することができなかつた。今や彼女は健康になつたと感じ、彼女の少からざる才能を延ばし、更に進んでは幾分の名望と享樂と成功とを獲んと一生懸命活動し始めた。所が彼女の如何なる試みも彼女が此の方面で何物かを獲ようとすべく餘りに年をとり過ぎたことを自他に知らせる結果となるに過ぎなかつた。さうなつては次に來るものは病氣への逆戾りがあるばかりだらうが、しかしもはやさうはならなかつた。その代り彼女に起つたものはいつも怪俄であつた。その爲に彼女は永い間活動を中止し、苦しまねばならなかつた。或時は轉んで足を挫いた、或時は膝に怪俄をした、或時は狩獵に行つて手を傷けた。此の一見偶然とも思はれる出來事に際し、如何に彼女の役割が大きなものであつたかに注意するならば、彼女は謂はゞ術式を變へたものだと言へる。同樣な機會に際し、怪俄の代りに輕い病氣に罹つた。カタル、扁桃腺炎、感冒樣の狀態、リウマチス性の腫脹等々。そして遂に彼女は總てを斷念しようと決心したが、それと共に妖怪は悉く退散した。

我々の意見では此の無意識的懲罰要求の出所に關しては何等の疑が無い。この要求

は良心の一部の如き態度をとる、良心の無意識界への連續の如き態度をとる。この要求は又良心と同一の出所を有つものだらう。即ち內攻して上位自我に攝り入れられた攻擊慾の一部に相當するものだらう。言葉がよりよくあてはまりさへすれば、この要求を「無意識的罪惡感」と稱することは總ての實際的利害關係に對して是認されるかも知れない。しかし理論的には、外界から歸つて來た攻擊慾が上位自我に捆へられ、而して自我に向けられると想定すべきか、或はその攻擊慾の一部が自由な破壞本能としてその陰險な力を自我及びエスの中で振ふものと考ふべきかに就いては、我々はもともと疑問を有つてゐる。後者の如き分業の方がより多く尤もらしい。しかしそれ以上のことは何も解らぬ。上位自我が最初に形作られる際には、此の心的法廷構成の爲に攻擊慾の或部分が兩親に向けられることは確かである。しかし此の部分の攻擊慾からの逃道を外界に求めることは、愛の固着が强い爲に不可能であること、外界の困難を處理しかねると同樣である。それ故に上位自我の嚴格さは、單に教育の嚴重さに比例するとは限らぬ。後年攻擊慾を鎭壓すべき機會に際し、本能が、かの決定的機會に際して開かれたと同一の道をとるといふことは極めて可能なことである。

此の無意識的罪惡感が强過ぎる人は、分析的取扱ひの際に豫後上甚だ好ましからざる拒絕的な治療上の反應を示すことによつて解る。彼等に症候が解決されたことを告げ、普通ならば少くとも當分症候が消失すべきであると言つても、その結果はむしろ反對に症候及び苦惱の一時的增惡を來す。或は彼等の容態の蔽ふべからざる惡化を招來するには、彼等の治療中の態度を賞め、分析の進行に就いて有望な言葉を聞かせるだけで充分な場合が屢々ある。非分析學者は、彼は「治癒の意志」を失つたものであると言ふであらう。分析學上の考へ方によれば、此の態度の中には無意識的罪惡感が現れてゐることは諸君にも解るだらう。苦惱と支障とを伴ふ病氣で居るといふことは正にこの罪惡感を滿足させるものである。無意識的罪惡感が提出した問題、又この罪惡感と道德、教育、犯罪性、不良性との關係は、現今分析學者に好適の研究領域である。今や我々は、思ひがけない所で精神界の奈落から公設市場に侵入して來たものだ。之以上は諸君を御案內することができぬ。しかし本日諸君とお別れする前に、諸君をお引き留めして言つておかねばならぬ一つの考へ方がある。吾人の文化といふものは社會生活によつて阻まれた性的衝動を糧にして、卽ちその一部はなる程抑壓されるが、他の一部は新な目標に向つて利用され得るやうになることによつて築かれたものであるといふことは我々の熟知する所である。尙我々は吾人の文化的進步を誇る際に、此の文化の要求を充たし、而も文化生活を營むことを快しとすることは容易な業ではなくなる（何となれば、我々に課せられた本能制限といふことは精神上の重大な

負擔を意味するから）といふことも告白しておいた。扨て今我々が性的本能に就いて知つたことは、他の攻撃本能に對しても同様に、否恐らくは更に高度にあてはまるものである。攻撃本能は何物にも勝つて人間の共同生活を困難ならしめ、その持續を脅かすものである。攻撃慾の制限は個人の合同生活が要求する最初の、恐らく最大の犧牲である。我々は此の暴漢操縱を機關士のやるやうな方法でやつてゐることを經驗してゐる。上位自我、それはこの危險な攻撃的衝動を强奪して自分のものとしたものであるが、この上位自我が在るといふことは、謂はゞ暴動の起りさうな土地に守備隊を置くやうなものである。しかし他方、純粹に心理學的に考へた場合、自我は、社會の要求を犧牲にした時、攻撃慾の破壞的傾向に從つて他人を傷けんとした時、決して快く感ずるものではないといふことを忘れてはならぬ。之等の事情は有機的動物界に屢々見られるかの「食ふか食はれるか」のヂレンマが精神界へ連續して居るかの如きものである。しかし幸なことには、攻撃本能は決して孤立してゐない、常にエロス性の本能と合體してゐる。後者は人類が作つた文化の諸條件の下に、多くのものを中和し、保護して居る。（完）

輪講會記事

その後の輪講會で抄讀された論文の中精神分析學に關係あるものは次の通りである。

フロイド著「强迫神經症の素因」(Freud, S.: Die Disposition zur Zwangsneurose, Ges. Schr. Bd. V, 1913.) ……………………………………早坂（12月21日）

アレキサンダー著「自我心理學の發達」(Alexander, F.: Developement of the Ego-psychology, Psycho-Analysis Today, 1933.) ………………木村（12月21日）

フロイド著「不安と本能生活」（續き）(Freud, S.: Angst und Triebleben, Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, 1933.) ……………………………………………………………………早坂（5月31日）

ケンプネル著「肛門性感に關する知見補遺」(Kempner, S.: Beitrag zur Analerotik, Internat. Ztschr. Ps. A., Bd. XI, 1925.) ……………………山村（5月31日）

フェニッヘル著「器官リビドー」(Fenichel, O.: Organlibido, Hysterien und Zwangsneurosen, 1931.) ……………………………………………………教授（7月5日）

國際精神分析學會仙臺支部設立に就いて

昨夏丸井教授が渡歐せられた際ロンドンに於いて國際精神分析學會長アーネスト・ジョーンズ氏に面會、種々折衝せられた結果こゝに仙臺支部の誕生を見るに至つた。之まで我國には矢部八重吉氏を中心とする日本支部が東京にあつたが、仙臺支部の設立と共に日本支部は東京支部と改稱せられ、今後仙臺支部と東京支部とは同一平面上に立つて日本支部の要素を成すわけである。

尙會員は當分の內東北帝大醫學部精神病學教室關係者、出身者とし、その氏名は次の通りである。此處に特筆すべきは東大教授三宅鑛一先生が斯學奬勵の思召を以て當支部名譽會員として入會することを快諾せられたこと、及び小峯茂之博士が特に會計係として當支部を御援助下さることになつたことであつて、共に支部員一同の深く感謝してゐる處である。

名譽會員

三宅鑛一	東京帝大醫學部精神病學教室

役員

丸井清泰	東北帝大醫學部精神病學教室	（支部長）
小峯茂之	東京市瀧野川區西ケ原小峯病院	（會計係）
早坂長一郎	東北帝大醫學部精神病學教室	（秘書係）

會員

新井昌平	八王子市明神町 11
鈴木雄平	東京市瀧野川區西ケ原小峯病院
小峯茂三郎	同上
三浦信之	岩手醫學專門學校精神病學教室
土井正德	大連市紅葉町 1
古澤平作	東京市世田ケ谷區東玉川町 3587 古澤精神分析學診療所
木村廉吉	東北帝大醫學部精神病學教室
懸田克躬	東北帝大醫學部生理學教室
山村道雄	東北帝大醫學部精神病學教室

東北帝大醫學部

精神病學教室業報

(精神分析學論叢)

Arbeiten aus dem Psychiatrischen Institut der Tohoku Kaiserlichen Universität

(Beiträge zur Psychoanalyse)

第 II 巻　　(昭和 8 年)

I. Band　　1933

東北帝大醫學部

精神病學教室業報

(精神分析學論叢)

Arbeiten aus dem Psychiatrischen Institut der Tohoku Kaiserlichen Universität

(Beiträge zur Psychoanalyse)

第I巻 (昭和8年)

I. Band 1933

東北帝大醫學部精神病學教室業報（精神分析學論叢）

第II巻（昭和8年）總目次

Inhaltsverzeichnis des II. Bandes (1933).

原著（Originalen）

紹　介

東北帝大醫學部精神病學教室業報 (精神分析學論叢)

第II巻 (昭和8年) 總目次

Inhaltsverzeichnis des II. Bandes (1933).

原著 (Originalen)

介紹

前號正誤表

頁	行	誤	正
51	19	無いといふこも	無いといふことも
56	10	我自	自我
56~57		正しいかはだ兇倒	正しいかは甚だ兇倒
69	29~30	in Beziehung werden	in Beziehung **gebracht** werden
70	28	Tribleben	Triebleben
72	10	(Pltzangst)	(Platzangst)
〃	24	(Dermographnie)	(Dermographie)
〃	30	(erythrophobie)	(d'erythrophobie)
〃	33	Eröten	(Erröten)
75	18	復雜な	複雜な
78	24	精神外來	精神科外來
81	33	實除	實際
83	29	充分は	充分に
85	29	死にする	死に對する
86	21	怖恐怖心	恐怖心
89	22	揶揄らせれ	揶揄せられ
91	27	事ば	事は
94	18	聯患	聯想
95	19	之ば	之は
〃	22	二適間	二週間
98	15	或ひは	即ち
〃	26	(Passiuitäts-	(Passivitäts-
99	21	亦も	も亦
〃	25	認めらにた	認められた

本業報規約

1. 本業報ハ精神分析學及ビ精神病理學ニ關シテ、東北帝大醫學部精神病學教室ニ於テ研究サレタル業績ナラビニ、主幹ノ指導校閲ヲ經タル舊教室員ノ業績ヲ掲載ス。

2. 本業報ハ毎年二回乃至四回不定期ニ刊行シ改年ト共ニ卷齡ヲ加フルモノトス。

3. 出版費用ハ當教室ノ負擔トス。

4. 本業報ノ內容ヲ無斷轉載或ハ抄錄スルヲ禁ズ。

昭和九年十二月十三日印刷
同　　十二月十七日發行

主　幹　教授　丸井清泰
編　輯　　　　木村廉吉
同　　　　　　早坂長一郎

定價一册金五拾錢

東北帝大醫學部精神病學教室
編輯兼發行者　木村廉吉
仙臺市柳町三十五番地（電2416）
印刷者　水野勝藏
仙臺市柳町三十五番地
印刷所　水野印刷所

發行所　東北帝大醫學部精神病學教室

仙臺市國分町六十八番地
賣捌所　丸善株式會社仙臺支店